

---

# けいおん！平沢家のお兄ちゃん！

スズメバチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！平沢家のお兄ちゃん！

### 【Nコード】

N6058Q

### 【作者名】

スズメバチ

### 【あらすじ】

中学時代・・・まだ若かったあの頃、衝動に駆られて卒業式の日に告白した少年がいた。彼の名前は平沢凜、女の子とは地球とスーパーアースくらい縁がなく未だにモテ期すら到来していない！そして彼の趣味は俗に言うあっち系だった、それじゃあ仕方ないよね！けいおんを見てたら衝動に駆られてやっちゃいました、原作をあんまり知らないので色々酷い、さらに文章崩壊、おまけにオリジナル展開大爆発、それでも構わない方は読んじゃって！

「ごめんなさい、私好きな人がいるの」

桜が舞い散る三月のある日、とある学校の卒業式が行われていた。

卒業式・・・もうこれを逃しては、二度と好きな人に会うことも出来なくなる・・・そんな思いに駆られて告白する男女がいる。

そして此処にもその衝動のままに動いた一人の少年がいた・・・。

「ごめんなさい、私好きな人がいるの」

少年を襲ったのは無常な一言。

もはや何の捻りもないテンプレの返事、自分はその程度の価値しかないのか・・・と絶望する。

「で、でも・・・!」

少年は食い下がる、このまま此処で別れてしまったらもう彼女には二度と会えないかもしれない・・・!

「それじゃ」

そう言って少女は足早に去っていく、取り残された少年はただ小さくなっていく少女の背中を見つめるしかなかった。

ごめんなさい、私好きな人がいるの（後書き）

やっちゃいました、衝動に駆られて・・・続くのか！？続かないのか！？

それは私にもわかりません！

2月13日題名変更、昔のタイトル名を一話にもってきました。

何事も経験です、10回や20回は当たり前でしょう

桜が舞い散る三月のある日、とある学校の卒業式が行われた翌日から物語は始まる。

卒業式も終わり、とある少年・・じゃねえ！俺、平沢凜は高校が始まるまでの間時間を持て余す。

ちなみに俺は桜花中学3年生だ、と言ってもあと一週間も経たないうちに中学は卒業しちまうがな。

ちなみに今はお茶の間で先日行われた公開処刑を回想している真っ最中だ、あの時は友人A B C D E F Gに見られた、鬱だ・・。

「りーんたん！またやらかしちゃったんだってー？」

「・・なんじゃー！？黙れ唯姉え！」

登場して早々に痛いところを突きやがるこの少女は俺の姉である、ちなみに高校一年生。

名前を平沢唯と言う、天然ボケっぷりが半端ない姉だが顔は可愛い。

「これで中学時代に振られた回数って何回なの？」

「・・20回の大台に乗ったよちくしょう！そんなに俺ってダメですか！？こんな年で既に初音クとか聴いてるからですか！？それともパソコンに詰まった萌え画像が悪いんですかー！？」

俺、平沢凜は恐ろしい程女の子と縁がない男である。

どのくらい縁がないかと言うとおそらく地球と冥王星くらい縁がない。

中学時代に振られた回数は20をついに越えた、一年間に6回しか振られてなかったのに三年でついに記録を更新してしまった！

ちくしょう・・・卒業に合わせて告白とかやっちまったせいだ・・・！

「まあーまあー、りんたんには私がいるよっ」

「うれしくねえー！いくら姉ちゃんが可愛くても身内からの励ましの言葉は俺の心をスタスタにするから！」

「じゃあ憂がいいの？」

「なんでそつちに飛ぶの！？今身内からの言葉は買ったばかりのゲームが実は糞ゲ オブザイヤー受賞してましたってくらい俺にとっちゃ辛いのー！」

ちなみに憂とは俺の妹・・・と言っても俺のほうに僅かに生まれるのが早かったせいで妹をやっている。

学校では中学一もてない男の妹なのに憂本人がめっちゃくちゃ可愛いということでかなーり有名である、そしてその妹の噂は俺の耳にも届いている。

『どうして憂ちゃんこんなに可愛いのに貴方のお兄ちゃんはあるな  
キモイの?』って・・・。

酷くね!?せめて本人の耳に届かないところでしろよ!?なんで俺  
が日直で黒板消してる時に教壇でそんな話すんだよ!苛めか!?

つつかそこまで俺不細工なのか!?生きることに許されなくらい顔  
が終わってんの!?

「凜お兄ちゃんは顔じゃなくて・・・たぶん喋ってる内要があんまり  
好かれないんじゃないかな」

俺の心を代弁してくれた少女がキッチンから現れる。

名前を平沢憂と言う、ちなみに俺の妹・・・ってさっきも紹介したな  
これ。

「俺の喋ってる内要ってそんなにダメか?」

「む、胸に手を当てて考えてみてよ・・・」

若干引き気味で語る憂。

我が妹よ、そんな汚物を見るような目で兄を見るんじゃない。

「俺が話すネタ・・・ねえ」

「りんたんはサッカーと初音 クのことしか話さないじゃん」

「うむ、その何処が悪いんだ？問題なくね？」

「悪くないよねー」

唯姉ちゃんが同意してくれる、ほら俺は何処も悪くないぞ！

「大問題です！凜お兄ちゃんはサッカーで話を止めておけばいいのにそこから初音 クの話に持って行って自分がそっち系の人ですって女の子に言ってるみたいなものだもん！」

どうやら憂は俺が俗に言うキモオタであることを責めているらしい。身内からキモオタ引きニートの予備軍が出るのはやはり頂けないのか。

「女の子はそういうの苦手だから気を付けたほうがいいよ、やっぱり良い目じゃ見られないから」

「しかしそれは俺の個性なんだ！クやMegpidを取り上げたら俺が俺じゃなくなっちゃう！」

本心だ、ちなみに俺のパソコンのフォルダの中にはクさんやめぐの画像が軽く一千枚はあるぞ。

「あれを捨てるくらいなら俺は男を捨てたっていい！」



「どうしてそうなるの・・・部活動してる時はあんなにさわやかなのに！何で蓋を開けたらこんな・・・こんな・・・！」

「だああああ！それ以上言うんじゃないよ！俺のヒットポイントが0になるから！」

「き、き・・・」

いかん、憂が言いかけている、禁断の一言を・・・！その一言、その一言だけは決して口にしてはならぬという鉄の掟を忘れたのか・・・！

俺は何とか憂の気を逸らそうと光の速さで冷蔵庫から甘いモノを取りだそうとするが。

「りんたんはキモオタ？だから仕方がないよー」

「ぎゃああああああ！なんで姉ちゃんが言うの！？それに姉ちゃんキモオタの意味よくわかってねえだろ未だに！」

姉の非常なる一言が俺の心臓を貫いた。

自分でキモオタキモオタ思ったり言うのは全く構わないが他人から、特に家族からこの一言を頂くと生まれてきてごめんなさいしたくなるわ！

「凜お兄ちゃんからパソコンを取り上げるしかないと思っ！」

いつの間にか先ほどまでしょげていた憂が復活して元気になっている。

しかも俺のパソコンを捨てるだど・・・！

あのパソコンにどれ程希少価値の高い　クさんやル　さんの画像が入っていると思っっているんだ！

「でも憂、りんたんからパソコン取り上げると私達も困るよー」

そうだぞ憂、この家でまともにパソコン使えるのは俺だけなんだ！  
両親は都合よくいつもいねえからな！

「お姉ちゃん・・・そうだけど、このままだと凜お兄ちゃん一生彼女  
出来ないよ、それでもいいの!？」

グハツ、高校だけじゃなくてももうこの先60年一生独り身っていう  
レッテルを張られたよ！

いくら妹でももう少しこう変化球にしろよ！ダルビッシュの剛速球  
みたいな直球を投げんな！

「えー、大丈夫だよ。りんたんのお嫁さんには私になるもん」

「なれねえ！日本が転覆しない限りなれねえ！」

いきなり何を言い出すかと思ったらこの姉は頭のネジが100本程  
抜け落ちている！

「お、お姉ちゃん・・・本気？」

「本気本気っ。だってりんたんすごーくあつたかいんだよー」

そう言つて姉ちゃんが抱きついてきた、俺はほっかいるか？

この姉のスキンシップ、これが他の女の子だったらどれ程嬉しかったことか・・・！

「ず、ずるい・・・！私だつて中学に入つてからずっと我慢してたのに・・・！」

「おお！これは久々に憂の泣き顔を拝める！」

憂がふるふると目を振るわせて口をすばませる。

ふひひ、憂の泣き顔は俺の大好物なのだ、此処数カ月憂が涙目になったところすら見てないので欲求不満だったところだし、そおら泣きわめけ！

キモイ？サーセン！褒め言葉だよこの野郎！

「むふふー、憂、うらやましいー？」

「わ、私だつて！」

そう言つて何を血迷つたか憂は俺に突進してきた、お前は何処のドスファンゴだあああああ。

「さ、さっきまでのしおらしいお前は・・・げふう!？」

これで腰を強打した俺はその日階段を上がることすら出来なかった。  
。。

何事も経験です、10回や20回は当たり前でしょう(後書き)

果たしてこんなんで続くんでしょうか・・・。

私実は男だったの！男の娘って可愛いでしょ！

今、俺は15年生きてきた人生の中で最大の選択を迫られていた。

それは・・・。

「結局凜お兄ちゃんはどうちの高校にするか決めたの？」

「まだだ！まだ終わらんよ！」

「何かかつこいいよりんたん！」

公立高校か、私立高校かの選択である。

具体的には公立の桜花高校に進むか、私立の桜が丘高校もしくは光桜高校に進むか。

公立の桜花高校、これは当然普通の高校だ。

偏差値もぼちぼち・・・大学進学率もそれなりと言ったところ。

ちなみに俺は三つの中でこの高校に一番進みたい。

次に私立の桜が丘だがここは我が姉平沢唯が通っている女子高・・・ではなく今年から都合よく共学になった。

妹憂もこの学校への進学が決まっている・・・つまりどういふことが

分かるな？

こんな学校に行ったら、またしても黒板消してる時に女子共から『憂ちゃんこんなに可愛いのに何でお兄ちゃんはあるんなキモイの？』って言われるにきまつてるだろーが！

始めからコイツは選択肢にねえよ！

最後の光桜高校は逆に男子高校から共学になった高校だ、此処は男子率が高くてむさいのは間違いない。

だが俺としては捨てがたいのもある、何せ告白した20名のうち何と半分の10名近くが此処への進学を決定している。

未練がましい？やかましいわ！

「私はりんたんにはうちの学校に来て欲しいな」

姉ちゃん、それは憂が『私実には男だったの！男の娘って可愛いですよ！』って言うてくれない限り選択肢には成りえねえ。

「私は反対！凜お兄ちゃんはやっぱ光桜高校に行くべきだと思う、部活動も活発だし進学率も高く、それにあそこなら女の子もそんなに多くないし！」

おい妹、最後の一言どういう意味だ。

「どうして？憂はりんたんと一緒に登校したくないの？」

「べ、別にそんなわけじゃ・・・ただ桜が丘は女子が多いから、下手

したらまた女の子に振られ続けるだけで三年間が終わっちゃう！あ  
と・・・」

「それ以上言わないで！俺のライフはとっくに0よ！」

どうして憂はこんなにも毒舌な子に育ってしまったんだ・・・兄とし  
ての接し方を間違ったか。

こないだのダルビツシュ級のストレート発言と言い、憂・・・未恐ろ  
しい子。

「あ、りんたくん。私お父さんからこんなものあずかってるんだ」

「姉ちゃん此処に来て流れぶった切るとは流石だ！」

この姉、相変わらず俺は特徴を掴み切れないぜ！

せめて俺がやっぱりこの高校にするよって言うまで我慢してて欲し  
かったな！

「じゃーん・・・」

そう言っただけじゃなくは封筒から一枚の紙切れを取り出してそれを俺  
と憂に見せる。

その内要とは。

『凜元気にしてるう？貴方の進学高校だけど、三人通つと学費が格  
安になる桜が丘高校にもう決定してるのよん。頑張つてねえ〜い』



「・・・」

「・・・」

時間が止まったかと思った、そして俺は何から突っ込めばいいのかわからなくなり・・・。

「きめえ！きめえよ俺の父ちゃん！俺の数百倍きめえ！」

「お、お父さんが・・・お兄ちゃんの毒に犯されてる！」

憂元凶は俺なのか！俺が悪いのか！

「あ、お父さんじゃなかったお母さんからだったよ」

「だと思ったよ！俺こんな父ちゃん持ったらもう二度と日の光を見れねエから！」

「でも、そうなると思お兄ちゃんは桜が丘・・・」

「やったねりんたん！また私と一緒に通学出来るよ！」

そう言って姉ちゃんが抱きついてくるが、今の俺はそんなことに構っている場合ではない。

「なん・・・だと」

桜が丘高校。

よし、現状を整理してみよう。

入学式 普通 平沢三姉弟妹がばれる 憂が一躍美少女として大人  
気に 相対的に俺の期待値も上がる 実物の俺を見る 絶望 公開  
処刑が始まる。

「いやだああああ！それだけはいやだあああ！」

またあの苦痛の日々が始まるのか・・・そうならないように三校も受  
験したのに、この親は俺に何か怨みでもあるのか！

「お兄ちゃんと一緒の高校・私も嬉しいけど、あんまり女の子に  
ちよつかいださないでね」

憂が何やら黒いモノを含んで言い寄る、顔が怖いよ憂ちゃん！でも  
今はそれどころじゃねえ！

「どうにかなんねえのこれ！？俺このままだと死んじゃう！主に精  
神的なダメージで！」

「大丈夫だよりんたん、私が守ってあげるさあ！」

「たよりねー！此処まで頼りない『大丈夫』聞いたことがねえー！」

やばい、もう既に三年間キモオタレットルは確定か・・・。

「凜お兄ちゃんはその趣味を捨てれば普通の男の子だよ！だからま  
ずはパソコンの廃棄から始めようよ！」

「それはもつといやだああああ」

こうして俺の桜が丘高校生ライフが決定した。

私実は男だったの！男の娘って可愛いでしょ！（後書き）

どんどん意味不明な内容に・・・。

こんなキモイ人が身内にいるんだねって憐みの目を向けるよ！（前書き）

タイトルに『けいおん！』と入れたほうが良かったのかなと4話目になって思っちゃいました。

2月5日、結局タイトル変更です。うんこっちのほうがいいな。

主人公のキモさに・・・。

「こんなキモイ人が身内にいるんだねって憐みの目を向けるよ！」

「憂、今度軽音部の皆が来るから片付け手伝ってよ」

「うん、わかったよ」

今俺の隣では俺が一番過剰に反応する単語が飛び交っていた。

それは・・・

「軽音部の友達が来る・・・だと!?!」

来たか・・・!

ガタツ

俺は力強く立ち上がる・・・が。

「凜お兄ちゃんは部屋から出てこないよーに!」

「そげぶ!」

まさにそげぶだよ! (その幻想をぶち殺す) 分からない人ごめんね!

つつかこれ何回目のそげぶだよ! いや月何回ペースだこれ!?

「どつして!?!どつして憂ちゃんはお兄ちゃんをそこまで除け者にするの!?!」

憂は姉ちゃんが高校の軽音部の友達を連れてくる度に『お兄ちゃんは部屋から出ないで!』って凄まじい形相で言い寄ってくる。

そんなにこんなキモオタの遺伝子しかないような人間を周りの人に見せたくないの!?!家族って思われたくないの!?!

「だって凜お兄ちゃん軽音部の人達を絶対厭らしい目でみるんだもん!」

「グツ・・・そいつは否定出来ねえ・・・!」

確かに俺は女の子を見る時はまず最初に『胸 足 尻周り 腰 最後に顔』と言った感じで欲望丸出しなので否定出来ん・・・!

「あんな舐めまわすような視線で見られたら可哀そうです!どつせ話す内要も初音 クとか涼宮八 ビンとかでしょ!」

憂、ハルビン違う!それパチモンや!

「それにそんなこと話したら軽音部の人達きつとお兄ちゃんのことキモイ!つて言つよ!」

「うっ!?!」

「こんなキモイ人が身内にいるんだねって憐みの目を向けるよ!」

「グハ!?!」

「拳句にこんなのが家族で・・・」

「やめてえ！もうこれ以上は死んじゃう！」

憂の容赦ないマシンガントーク！効果は抜群だ！

それにこれってぱつと見俺を軽音部の方々からの誹謗中傷から守るために言ってるように見えるけど涙目になってるあたり本心は

『こんなのと家族って思われるこっちの身にもなってよ！』

って思っているに違えねえ！なんて妹だよ！俺は目の上のたんこぶどころか癌細胞扱いか！？

「だからダメなの！」

ぴしゃりと言い切る憂に俺は歯を食いしばる。

「え〜、大丈夫だよ憂〜。皆そんな酷い人じゃないよ〜」

流石に可哀そうになってきたのか姉ちゃんが助け船を出す。

ふ・・・しかし甘い憂よ。

それでは甘い、甘すぎる、まるでスイーツ（笑）のようにな！

今までの俺なら此処で引き下がっていただろう・・・しかし、もう中学時代の俺とはお別れしたのだ！



「で、でもな憂！どうせ高校に進学したら会うんだぞ！？だったら遅いか早いかの違いじゃないか！」

「あ、確かにそうかも。いいじゃん憂」

いいぞ姉ちゃん！もっと援護射撃してくれ！

姉ちゃんのさじ加減で俺が軽音部の美少女達と会えるか会えないかは決まってくる！

憂は俺にはめちやくちゃ厳しいが姉ちゃんにはめちやくちゃ甘いからな！偶にはその砂糖成分こっちに分けて欲しいくらい！

「う・うーん」

いいぞ、憂が戸惑っている。

あと一押しだ、あと一押しで巷で想像を絶する程美人と噂される軽音部に会える・・・！

その暁にはその女の子達を            にして            や            を・・・うひひひひひー！

「やっぱりダメ！お姉ちゃん今の凜お兄ちゃんの顔見た！？この世のものとは思えないくらいキモツ・・・凄かったよ！」

おいこら！今言いかけて言うのやめただろ！お兄ちゃんは誤魔化せないぞ！

「あ、ごめん。見てなかったよ」

ナイスだ姉！もつと弾幕厚くして！

「それにな、憂！きつとそろそろ軽音部の人達も不信に思ってるぞ！いつも留守にしているなんてどんな子なんだろうつてな！」

一応軽音部の方々には俺は部活動や外で遊んでいるといった建前でやり過ごしている、憂は決して実は兄は自室で監禁されてますなんて言っまい。

しかしそれにもいい加減限界があるはずだ、さあ諦める！

「確かに・・・そうだけど」

「だろ！？俺もほら、自粛してそんな変な視線向けたりしないからさ」

「・・・ホント？」

「本当です！この目を見て！姉ちゃんもほら賛成してくれてるし！」

「私は皆にりんたん紹介したかったんだ」

きたあああああ！この最強の援護射撃！

もっぐぐの音も出まい平沢憂！

「じゃあ・・・」

勝った！ついに妹を攻略した！牙城を崩したぞー！

勝利を確信した俺だった・・だが。

『お風呂はやっぱりバス  
マシー  
』

お茶の間のテレビから流れてきたCMは俺がいつも食い入るように見ていた某女性アイドルの半裸CMだった。

俺はいつもそのCMを瞬きせずに、一コマすら逃すまいと鬼の形相（傍から見れば相当気持ち悪い）で見つめる。

当然今回もまた、身体が条件反射してしまい……。

『しあわせー！』

「しあわせー！」

「しあわせー！」

叫んでしまったのだ、思い切り。

「……」

しまった……つい……衝動に狩られて……！

俺が振り返った時には身体をぶるぶると怒りで震わせ俯いている憂ちゃん。

姉の唯は一緒に「しあわせー！」とか言っているあたり問題ないが、憂ちゃんはそうもいかなかった。

「う、憂ちゃん？何処か苦しいの？お兄ちゃんに言ってみ？」

「……………」

無言で震える憂、いかん・いかんがねキミイ！

「ばかあああああ！」

「げふう！？」

俺は憂が掴んだ座布団で思い切り顔面を叩きつけられた。。

その日憂は一言も口を聞いてくれず、憂が準備してくれた夕食は何故か俺だけパンの耳と野菜スティック（しかも俺が嫌いなピーマンのみ）だった。。

こんなキモイ人が身内にいるんだねって憐みの目を向けるよ！（後書き）

憂のキャラ崩壊がやばい、そして主人公がきもい・・・。

どれだけの人がこれを許容してくれるだろうか・・・。

何だか凄まじい矛盾が一部発生していたので修正しました。

GPS機能でお兄ちゃんの位置確かめること　だって出来るんだよ！

高校の入学式があと一週間と近づいたある日、俺の春休み最大のイベントが行われようとしていた。

それは・・・。

「りんたん、憂々、あと少ししたら皆来るって〜」

「きああああ！きたこれええええ！」

そう、軽音部の皆さんが無駄に広い平沢家に遊びに来るのだ！

知ってたか！？俺は三度の飯より軽音部の美女見るほうが好きだ！  
聞いてない！？うるせえ！

30

未だに見たことねーけどな！

「凜お兄ちゃん！」

「グッ・・・」

しかしハイテンションの俺を見て憂がずいっと近寄ってくる。

「前にも言ったように、お兄ちゃんは今日も自室でパソコンです！」

「うっ……」

「こないんだあんなことがあったのに……やっぱりダメ！」

くそう、そんなにあの『しあわせー！』がいけなかったのか。

隣で目を点にしてぼけーっとしている姉ちゃんも一緒に叫んでたんだぞ、これが格差社会か……。

だがしかし。

いいだろう……お前の言う通りにこの『家』では軽音部の方々を見るのは諦めよう……。

「仕方ない……じゃあ憂、今日は買いたいモンあるし出かけておくよ」

「え……お兄ちゃんが買物？もしかして……そ、そのエ、エ……」

「よし分かった！それ以上言うんじゃない！純粋な姉ちゃんが汚されるから！」

？マークを浮かべる姉が核心に迫る前に俺は憂の声を遮る。

流石に姉ちゃんまで憂のように俺を見始めたらホントにパソコン廃棄するハメになっちゃおう……。

「憂……？顔が赤くなっちゃってるよ……？」



「こ、これは・・・その。だって凜お兄ちゃんが!」

「俺のせいだよ!?!俺のせいだけどもうこのネタから離れて!」

このネタはまだ憂には早い!姉ちゃんにも早い!いや俺よか年上だけどなんかこの姉がそういうのに染まっちゃうのやだ!」

「と、とにかく!俺外出するから後頼んだよ?」

そう言つて俺は玄関へそそくさと向かつていくが・・・。

背後から何やら黒いオーラを纏つた何者かが近づいてくる気配を感じ首を回す。

「・・・凜お兄ちゃん?」

やはりそこにはラスボスである我が妹平沢憂が仁王立ちしてこちらを睨みつけていた。

蛇のような眼光に俺は武者震い・・・。

「もしかして、先周りにして軽音部の人達と会おうとか考えてるんじゃないの?」

「ギクリ!」

「家の近くの道で待ち伏せして、そこから軽音部の人に話しかけようとか思ってるんじゃないの?」

「ギクギク!」

「顔に出てる！やっぱりそうだったんだ！」

「うるせえ！ちげえよ！そんな邪な考え持ってないから安心しろ憂  
！」

「ホント・・・？GPS機能でお兄ちゃん的位置確かめることだって  
出来るんだよ！」

「なんだよそのわけわからんんでも機能は！？こんな妹に変なハ  
イテク機能携帯持たせるんじゃないやねえよアホ親！俺の自由とプライバ  
シーがなくなっちゃう！」

「ほらやっぱり！お兄ちゃんはお部屋の椅子にロープでぐるぐる巻き  
に縛りつけるから！」

「なんでそんななのお！？姉ちゃんも何か言ってやってくれ！」

「こえええ！この妹こえええええ！そんなにこの家の癌細胞である俺を  
見せるのが嫌なのか！？俺が高校に進学して軽音部の人と廊下で会  
ったらどうするつもりだ！」

瞬間移動でもして俺を亜空間の彼方にでも吹き飛ばすのか！？

「りんたんはそんなに軽音部の皆と会いたいの？」

「会いたいです！」

俺は光の速さで返答する。

だって軽音部だよ！？女子高の！もうそれはシンデレラみたいな子だよ全員！キモオタでシスコン（姉に限る）で妹萌え（二次元に限る）で鼻屑目100%の俺フィルターを差し引いたとしても姉ちゃんほめっちゃ可愛いの！そのレベルがあと三人もいるんだよ！？天国だああああ！

「憂〜？」

「お、お姉ちゃん！」

「・・・ダメ？」

上目遣いで憂を撃墜しにかかる姉唯。

いいぞ、その調子で頼む！

だがしかし、今日の憂は朝からこの姉の攻撃を予想していたようである。ぷいっつと視線を逸らし・・・。

「ダメ！お姉ちゃんのお願いで！」

「え〜？憂のけちんぼ。ぶ〜ぶ〜」

くっ・・・姉ちゃんの必殺攻撃でも憂を落とせなかった・・・こうなってしまうと・・・。

「すみませーん」

きた！女神・・・じゃなかった、軽音部の方々が！

「お兄ちゃんこっち！」

「いででえええええ！？手がもげる手があああああ！？」

憂が俺の手を強引に引つ張り、右肩の骨が・・・！骨が外れる！

つうかこの馬鹿力なんだよ！？ホントに俺の妹がこの物体は！？

「此処で私がいって言うまで大人しくしてて！」

バタン！

「・・・」

俺は自室に放り込まれてしまった。

俺の部屋は2階だ、そして1階からは先ほど来た軽音部の方々のきやっきやうふふな可愛い声が俺の耳に響いてくる。

「またかよ！？またこのパターンかよ！？ちくしょおおおおがああああ！」

GPS機能でお兄ちゃん的位置確かめること

だって出来るんだよ！

(後書き

恐ろしや憂。

お兄ちゃんはお姉ちゃんみたいに可愛くないですから

「新入生はどんな子が入ってきてくれるのかなあ〜ッ」

「そつだなー！少なくとも3人は欲しいよな漣！」

「まずは唯も漣も下級生から先輩って呼ばれるように自分を見つめ直したほうがいいんじゃないか？」

「ひ、ひどいよ漣ちゃん!？」

隣の部屋から聞こえてくるのは姉ちゃんと憂、そして軽音部の方々3人のきやつきゃうふふな声。

そんな中で俺は一人パソコンと向き合い、クさんのエ 画像を見てハアハア・・・していなかった。

いや、口画像見てるんだけどさ・・・こんな状況じゃ興奮も何もねえつて・・・。

「くそ・・・憂の奴・・・まあいいさ、どうせあと一週間もすれば美少女達を拜めるんだ・・・！あと少しの辛抱だぞ凜・・・！」

あの妹の潔癖症には恐れ入った、どう育てればあんな恐ろしい子に育つんだ。

そしてどうしてこつも俺と違う子に育った。

俺はどちらかと言うとMだが、間違いなくあの娘はSだ。

SとM、バランスが取れているとよく友人Aとかには言われるが実際取れてないあたりその話題が出ると笑えない。

しかし・・・何だな、この暇を持て余した時間・・・流石に隣に美少女達がいるのに　　なんて出来ねェし。

だがこのまま生殺しのまま数時間過ごし続けるのも・・・いつそのこと特攻してみようか。

いやもしそんなことをすればあの憂がどんな顔をするのやら・・・そしておそらく俺は一週間近く飯抜きになる。

「そう言えば今日も弟さんは外出中なのか？」

「えー。違うよ澪ちゃん、りんたんはねー」

「お姉ちゃん！」

「ぶ〜ぶ〜」

「・・・どうしたんだ二人とも？」

ツ・・・やはり俺の話はタブーなのか！これってもしかして存在することすら認められてねえのか憂の中じゃ！？

「結局弟さんは何処の高校に決まったんだよ？全員揃って桜が丘だったたり？」

「りっちゃん流石！りんたんも来週から桜が丘の生徒なんだよ」

「おー、ってことは秘密のベールに包まれた平沢凜をついに拝めるんだな！これは楽しみ」

「あんまり期待しないでください・お兄ちゃんはお姉ちゃんみたいに可愛くないですから」

憂、お前姉ちゃんと兄ちゃんどうしてそんなに差別するんだ。

小学校の頃までは『凜お兄ちゃん！お姉ちゃんとはっぴり一緒にいてずるい！私と遊ぼうよ！』とかそれこそ超がつくほど可愛かったのに・・・。

中学に入ってからこの妹はませてしまったのか、そういう行為は一切しなくなってしまった。

いや・・・待てよ、そっぴや中学の時に何かがきっかけでそれからだよな。

なんだっけ・・・もう三年近く前だから全然思いだせないぞ。

「でも唯部屋じゃ弟さんのことばっか話すんだぜー？私の弟よりも可愛いってさ」

「りんたんは平沢家のマスコットなんだよ」

「いや唯、お前以上のマスコットが身内にいるってどれだけキャラが濃いんだこの一家」



「唯ちゃんも十分マスコットになり得るのにね〜」

姉ちゃんはマスコットじゃなくて砂漠の中にあるオアシスのような存在だ。

もし姉ちゃんも憂みたいな子だったら俺死んじゃう。

・・・でも姉ちゃんは小中高って俺に対しての接し方全然変わってないな。

昔からよく抱きついてくるし、『りんたあん』って満面の笑みをこちらに向けてくれる。

まあ俺からすれば嬉しいことこの上ないのだが。

だけど俺は姉ちゃんと同じくらい憂のことも好きなんだけどな。

どうしてこつも憂に対しては思いが一方通行になってしまっているのか・・・俺がキモオタだからか。

どうすれば憂に小学校時代のように好かれるようになるのか・・・俺はそのことを軽音部の女神たちが帰宅するまで永遠と考えていた。

・・・結局答えは小学時代持っていなかったパソコンを廃棄すればいい、しか見つからずげんなりしちゃったけどな！

お兄ちゃんはお姉ちゃんみたいに可愛くないですから(後書き)

珍しく『!』やら『?』少ないぞりんたん。

平沢憂さんの・・・お兄さん・・・だよな？

ついにこの日がやってきた

！

この日を俺はどれだけ待ちわびただろう・・・！

憂と同じ学校なんて精神が崩壊してしまうと何度も何度も喚いた。

しかしそれと同時に軽音部の美女を拝めるといふ期待に胸が膨らんでいったのは否定出来ん・・・！

そして憂からの様々な妨害攻撃・・・締め出し、飯抜き、今朝なんて俺がドアを引こうとしたら反対側から思い切り押ししてきたんだ・・・唯でさえよくない顔が潰れてエイリアンみたいになるところだったぜ・・・。

しかし・・・しかしそれでも俺は此処に立つことが出来た！

ふっふっふ・・・ふはははは！どつだ憂！お前の野望は露と消えたのだー！

「おい、お前さっきから顔怖いぞ」

「ん？怖くなんてないさ・・・俺はこの日を待ちわびていたのだからな！」

「・・・そうなのか？入学式をそんなに楽しみにしてたなんて・・・余程勉強が好きなんだな」

隣の友人Aが話し掛けてくる。

そう、今日は入学式！俺は今日から桜が丘高校の一員となり軽音部の美女たちを拝めることが出来る！

俺は喜びを爆発させ我慢させず気持ち悪い笑みを全開にした！

「ふひひひひひひ！」



「何その例え・・・？」

俺と憂は兄弟揃って同じクラスだった。

いやちょっと待て、双子が同じクラスに放り込まれるってどーいうことだよ！俺は生まれてこの方憂と同じクラスに何かなかったことねーぞ！

問題アリだ！意義アリ！

「桜が丘は今年から共学だけど、男子生徒が極端に少ないから一か所に集められたんじゃない？ほら、クラスに男の子10人しかいないよ」

「す、すくねえ・・・！」

・・・待てよ。

男子生徒が少ない 分母が少ないと自然とイケメンも少なくなる 相対的に俺の株もアップ 彼女が出来て最強になる。

いいことばっかじゃん！万歳！

「お兄ちゃん、何かよからぬことを企んでいるでしょ？」

「むふふ・・・何も企んでねえ！だからその黒い笑みを引つ込めて憂ちゃん！せっかくの美人が台無しです！」

そんなこんなで俺と憂は割り当てられたクラスへとやってきた。

む・・すご、木造じゃん。試験があつた大講義室とはまるで別物。

流石私立と言つたところか・・ふっふっふ。

俺は早速周りを見渡し物色を始め、そして。

「な・・なんだこの天国は！女神ばかりではないか！？」

周りの女の子は皆超がつくほど可愛い&美人だらけ！

此処は天国か！？俺は昇天して天に召されたからこんな楽園にいるのか！？

女子は皆俺と憂がいた中学の中の上以上ばかり、スタイルも良くこれはもうこの世に現れたパラダイスだ！

俺は密かに心の中で燃え上がる。

っしゃー！絶対に彼女つくつたるでええええええ！

何だか言葉使いがおかしいがそんなことは問題ねえ！早く始まりやがれマイスクールライフ！

「え、えつと・・こんにちは」

「え、あ、はい！？」

見えないオーラを発している俺に誰かが声をかけてきた！そしてこの声のトーンからして発主は女子！きたああああ！エ　ゲイベン　トきたあああ！

「平沢憂さんの・・・お兄さん・・・だよな？」

振り向くとそこには俺が中学時代に告白してきた女子共の半分近くが霞んで見えるような超がX100は突くような可愛い生物が立っていた！

やべええええ！そんな可愛いおめめで俺を見ないでえええ！浄化されちゃっつっつっつ！

「で、です！平沢凜です！」

早速は俺は中学時代から続ける分析を開始・・・しようとするが。

「お、兄、い、ちゃ、ん？」

「びっくうー！」

「何してるの？」

「な、なんでもない！右手の缺しまって！死んじやう！」

ラスボス憂が許さなかった・・・ちくしょう、どうやってこの妹を攻略すればいいんだ・・・！



「えーと、いいかな？」

「あ、大丈夫だよ梓ちゃん」

「私は中野梓・・・憂とは何か意気投合しちゃって。平沢君もこれから1年間よろしくね」

「よろしく中野さん！」

「くれぐれも梓ちゃんに変なことしないよーに！」

「鉄をちやきちやき鳴らさんでいいから！そしてホツチキスも出さないで！中野さんもヘンな目で見ないでくれええええええ！」

平沢憂さんの・・・お兄さん・・・だよね？（後書き）

オリジナルキャラは出てこないと思います。

おそらく友人A B 扱いです。

## 平沢君と一緒に待ってるから

「桜花中学校出身平沢憂です。得意なことは家事とお料理、好きなモノは・・・えーっと・・・お、お姉ちゃんです！」

我が妹よ、公衆の面前で自らスコンと暴露するアホを俺は初めてみたぞ。

そしてそれが身内だということに多大なるショックを受けている、慰謝料請求してもいいかね。

今はクラスのホームルーム、俗に言う自己紹介を行っている真つ最中だ。

先ほど超絶美少女中野梓ちゃんの自己紹介も行われた、当然一字一句逃さず全て暗記しちゃったぜうへへ。

キモイ？ふ・・・紳士と呼んでもらおうか。

「はい、平沢さんよろしくお願いします。じゃあ次は平沢凜君、彼は平沢憂さんの兄みたいですね。それではどうぞ」

O i

m i s u

おい。

『みたい』ってなんだこら。

お前の出席簿にどういう情報が記載されているか知らねーが俺は正真正銘憂の兄だつての！

何だよこの扱いは！確かに顔全然似てない＋あまりに不細工かもしれないがこれでも15年間（特に13歳〜15歳は死ぬ思いで）兄やってんだぞ！

俺は釈然としないままガバッと立ちあがり教師を人睨み・・・が、教師は俺のほうを見らずに前の席にいる憂に視線を向けている。

こ、この野郎・・・俺みたいな汚物はどうでもいいっていうことですかあ！？見るに値しないってことなんですかねえ！？なんて教師だよ！

「平沢凜、前にいる憂の兄ちゃんをやってるモンです。得意なことは超マイナースポーツハンドボール、好きなモノは初・・・」

「・・・（おにいちゃあん）」

「ッ!？」

前方の憂からとんでもない殺気が俺に向かって飛ばされいるのを感じたぞ！

このまま初音 クさんの名前を言うのは危険だ！初・・・から何かまっとうなモノへ変えなければ！

「初・・・初めての事にチャレンジすることです!」

うわぁ・・・何この厨2のような発言・・・自分で自分に鳥肌立つわ！

「よろしくお願いします」

こうして俺の自己紹介は自分を半分も紹介せずに終わった。

クツ・・・息苦しいぜ、でもまぁ・・・どうせ一週間もすりゃあこのクラスの男子共とキモオタクで盛り上がるんだろっな。

そうなっつてしまえばこっちのmond、我慢する必要もなくなる。

言っておくが俺は自分の趣味を我慢しなけりゃ女の子と付き合えんのだったら一生キモオタ童貞引きニートで一向に構わん！

放課後クラスの友人A達とつるんでいると自然と話が部活動の方向へと向かって言った。

俺はまぁ、何か部活に入るのならばハンドボールという超マイナースポーツにしようと思っただけだな・・・。

あるわけねー！そもそも公立高校ですらねーもんが昨年まで女子高だった高校にあるわけねーよ！

「ハンド部ないけどお前どうすんだよ平沢」

「ああ？俺はまあ・・・帰宅部というなのニートになるぞ」

「じゃあ俺と一緒にアニメ研究部に入ろうぜ」

「んなもんあつたか俺らの学校に」

「ねーけどさ、俺らで作るんだよ。既にクラスの3人は集まったぜ・  
ふひひ」

・・・コイツ、俺と同じ臭いがするぞ！

こいつは間違いなく同士だ！

「・・・ふ、言っておくが俺は初音クのミの字も知らん奴とアニメを見るつもりはねえ・・・出直してくるか？」

「ほう・・・言ってくれるな平沢よ。俺はクリトン6兄弟なぞとっくの昔に網羅しているぜ？」

「何・・・！出来るなお前・・・！」

「甘く見て貰っちゃ困るな・・・」

友人A、そしてBCDがにやりとした笑みを俺に向ける。

これは早速キモオタ学生ライフがスタートしたか・・・ふふ、楽しくなりそうだ。

その代わり女の子成分が圧倒的に不足しそうだけど。

「あ、あの平沢君」

「お兄ちゃん」

「え・・・？ひゃい！？」

気持ちの悪い笑みを男共に向ける俺に話し掛けてきたのはなんとあの絶世美少女中野さん＋妹憂だった。

危ない危ない・・・キモオタモードから普通の顔に戻さなければ！

「帰ろ、今日はお姉ちゃんが家で私達の制服姿写真に撮りたいって言うってたし」

「あ・・・そう言えば姉ちゃんそんなこと言ってたな」

姉ちゃんは今日の入学式には来ていない、まあ入学式は強制参加のメンバーに含まれていなかったたので別に来る必要も無いのだが・・・。

前日に『明日はりんとんと憂のために朝頑張って起きるよ！お姉ちゃんを信じなさい！』とあれだけ大口叩いていたというのに、結局朝は『うっいゝあとらふゝん』だった。

「おい平沢、部活の件頼んだぞ」

友人Aが憂と中野さんと共に遠ざかっていく俺を呼びとめる。

ふ・・今の俺はすまんが部活のことなどどうでもいいんでな・・何故だか分かるか？

隣に絶世の美女中野梓がいるからだ！これ以上俺がためーらキモオタと喋る必要などない！皆無だ！

「ふ・・考えておく」

とりあえずこのあたりさわりの無い返事で充分だろ！さあさあ、さつさと俺から視線を逸らせ！中野さんが不審な目で俺を見るだろ！

俺は奴らキモオタ共（将来の同士）を振り切り二人と一緒に下校しちやうことになっただぜ！

っじゃあああああ！中野さん！中野さんの隣歩けるなんて俺幸せ・・  
！



と思っていたのにやはりそうは上手く話しは進まなかった。

校門まできつちり中野さんの隣はラスボスがキープ。俺は何も嬉しくも無いことにこのラスボスの隣をすたすたと歩くハメになってしまった・・・ちくしょうめ。

が、此処でまさかの転機が訪れる。

それは・・・。

「あ、私教室に忘れ物しちゃったみたい・・・」

「んー？なら早く取りに行つてこい」

「憂、携帯？平沢君と一緒に待ってるから」

「あはは・・・」

憂はもうダッシュで校門から下駄箱へと走り去る、最後に俺を一瞥してその視線に『梓ちゃんに変なことしたら殺すからね！』というメッセージを込めるのも忘れていないあたり流石憂、ぬかりねえ・・・。

こうなると俺は借りてきた猫のように大人しくするしかない・・憂  
に釘を刺されては・・俺は身動きがとれん・・。

とでも思ったか!?!馬鹿め!憂、てめえーのミスは唯一つ・・この  
俺をこんな可愛い子ちゃんと二人きりにさせたそのことだ!

ぐへへ、こうなったらもう容赦しねえぞ中野さん!さっそく物色開  
始じゃー!

平沢君と一緒に待ってるから（後書き）

あずにゃんにりんたんの毒牙が！

あずにゃん逃げてえ！

な、何でもない！帰る！（前書き）

たくさんのご感想&お気に入り登録&アクセスありがとうございます。

な、何でもない！帰る！

「平沢君、憂と仲良いんだね」

二人きりになった俺と中野さん、最初に声を発したのは中野さんだった。

・・・仲が良い。

まあいいっちゃいいんだけどさ・・・どうせ中野さん憂の暗黒面知らないんだろうなあ。

もし家でのやり取りを見てればきっと彼女はこう言うはずだ、『よく憂と仲良くしてられるね・・・すごいタフだと思う』

「え、ああ・・・まあ。俺んところは人並みに仲が良いんじゃないかな」とりあえず棘が出ないようにこう言うておくか。

「私兄弟居ないからちよつと羨ましいな」

「・・・言うておくけど兄弟居るっていいことばっかじゃないから！何か勘違いしてそう！」

「そつなの？憂、平沢君よく見てるけど」

「たぶんそれは奥に秘められた殺・・・じゃなかった、思惑を知らな

いからそんなことが言えるんだと思う」

「・・・？」

中野さんが？マークを浮かべている・・・ええい、憂は外だとホントいい子だからなー。

家の中じゃ姉ちゃんにべつとりで俺にツン×三億くらいの態度。

まあ後者は外じゃ絶対に見られることないんだろう。

んなことはどうでもいい、さて中野梓を分析・・・分析。

「平沢君は中学は何やってたの？」

ぬ、ぬう・・・えらく話し掛けてくるな。これでは分析が出来ぬ。

「あー、ハンドボールをちょちよいと。ヘンなことに手出すの好きでさ、マイナースポーツやってみたんだ。中野さんは？」

「私はギターをやってたんだ。独学みたいなものだけど」

ふむ、ギターか。

「俺の姉ちゃんもギターやってんだよね」

「ホント？」

「ああ、そりゃあもうギターを溺愛しててなー。一時期は寝る時ギター抱いて寝てたくらいだ」

「す、凄・・・私もそこまでしたことはないかな」

「ああ、傍から見りゃ軽く引くなありゃ」

まあ俺がパソコンで クさんの画像見てる時も同じようなモンなんだろうけどね！

気にしないことにした！

「っていうことはお姉さんは軽音部に？」

「そそ、軽音部だな。4人で部活動やってるみたいだ」

「そつか・・・軽音部か」

「中野さんも入って見たら？何か馬鹿みたいに楽しいみたいだしね」

おまけに美女4人だしな！あそこいいところしかねえ！

男子マネージャーとして入部しちゃっていい！？

「うん、考えてみる。平沢君はギターとか楽器は興味ないの？」

「俺は小学生の頃は何を血迷ったかピアノはしてたなあ・・・おかげで指だけは綺麗と言われている」

「指・・・？」

「そー、まああの頃は指やら爪やら煩く言われてたもんだ」

顔と比較されて凹むことが何度もあるが、それはピアニストの宿命・  
・だと考えておくれ。

そもそも親はなーんで俺なんかピアノさせたのか・・それこそ意味不明だ。

「ちよつと指見せてッ」

「え・・ええ？いいけど・・一般人と比べてちよつと綺麗ってだけで・・」

が、俺の制止を気にも留めず中野さんは俺の右手をがばつと奪い取る！

あわわわわわわ！？やべえ！？何この展開！？

心臓がバーストする！爆発する！破裂するわあああああ！



「うん、他の男の子と比べて確かに指が細くて長い・・・指とか鳴らしたことはないの？」

「あ、え、つとあ、そりゃあ指鳴らしたら太くなるとか言うたろ？それが嫌でなー」

「・・・良い指だね」

「ど・・・どうも・・・」

い、いい加減離してくれませぬか・・・俺はもう間違いなく新燃岳の噴火口くらい顔が赤いぞ！

中野さん・・・こんなキモオタの手を取るなんて貴方は凄い人だ！女神か！？現生に現れたイエス・キリストなの！？

「そ、その・・・離してもらってもいいですかね中野さん」

「あ、ご、ごめんなさい！」

「・・・いや、そんな深々と頭下げないでも」

「・・・」

「・・・」

き、気まずい・・・！なんだこのラブコメみたいな甘酸っぱい雰囲気！

もしやこれはアレか・・・フラグなのか！？中野さんに対してフラグ  
たったの！？

やべえええええ神様ありがとうとおお！俺はこの瞬間のために今ま  
で生きてきたんですねえええええ！

恥ずかしさからか中野さんが俯き視線を逸らす・・・。

む、これはチャンスだ。

俺は相手と話す時は絶対に相手の目から視線を逸らさない癖がある、  
よって絶え間なく会話があると分析が行えない。

しかし、今は中野さんは俺を見ていない・・・つまり自由に分析が出  
来る！

ふひひひ・・・さあて俺にとってのイエス・キリスト中野さんはどん  
な女神スタイルなのかなー！？

ほうほう・・・こうやって見ると身長は低いな、そして胸も・・・これ

は下手したら憂よか無いんじゃないか。

おおう！しかしそれを補うには十分過ぎる美しいおみ足！そしてきゅっとした小さいお尻・・・！何これ！やばい　たい！

ひひ・・・さあてくびれは・・・。

「う、ごめん！待った!？」

ツ・・・良い所でラスボスが戻ってきたか。

しかも凄まじい形相で汗だくだ、これはハナから俺を信頼してなかったな・・・、ふ・・・その通りだが一足遅かったね・・・。

後の分析は次の機会だ！

「あ、良かった。それじゃ帰ろっか、憂、平沢君」

「・・・梓ちゃん？声が上がってるけど？」

「な、何でも無い！帰る！」

「ほいほい、憂。もー忘れモンすんじゃないやねえぞ」

ふへへ・・・憂、お前は分からないだろうが先ほど既にエ　ゲイベントは開始されてしまったのだよ。

これからが楽しみだな！もしかしたらマジで中野さんと付き合っ展  
開とかあるんじゃない！？

ヒ  
ハ  
！

な、何でもない！帰ろ！（後書き）

りんたん勘違い乙。

今から・・・その、軽音部一緒に見に行かない？（前書き）

今回若干キモオタ成分が強めとなっております。お読みになられる際は十分ご注意ください。

今から・・・その、軽音部一緒に見に行かない？

高校生活が始まってから一週間、俺は未だに軽音部の美女達を拝めずに居た。

理由は多々ある、一つは絶世の美少女中野梓と喋らなくてはならぬいからな。

何・・・？そんなものは全体の1%にも満たないだろ？うるさい、黙れそこ！

他にもあるんだぞ、俺の同士（キモオタ共）と共にアニメ研究同好会を立ち上げたり、爽やか系男子（あんまり縁が無さそうな）とサッカー同好会作ったり・・・。

いや・・・分かってはいるんだ、これらが原因じゃないってことくらい・・・。

そう・・・原因は俺にとって身近なモノ・・・それは。

「お兄ちゃん、今日は帰りにお醤油買ってきて！私純ちゃんと先に帰って夕飯の準備しておくから」

こやつ。

俺の妹であり、天敵であり、ラスボスでもあるこの物体！

奴は俺がなるべくクラスから出ないようにこのクラスに縛りつけようとしやる！

まるで監禁生活だよ！この年でそんなやばいもの経験するなんて思いもしなかったがな！

「……」

憂よ、お前にとって兄ちゃんは使い勝手のよいパシリでしかないのね……。

「あんな、俺は今日同好会の活動あるから遅いぞ？」

「だからだよ、調度帰宅する時間帯はスーパーでセールやってるか」  
「ら」

「へいへい、じゃあ気をつけて帰れよ」

憂はクラスメイトのボーイッシュな美人である鈴木純と共に帰っていく。

その後ろ姿をクラスのキモオタ共（俺の同士）がにへらとした表情で見つめる……うわぁーきめえー！



あ、俺も中野さんと鈴木さんに関しては同じような顔で見てるんだ  
ったふひひ。

「おい平沢。今日は俺らアニ研（アニメ研究同好会）の活動すんぞ、  
コンピュータールームに10分後な」

「わあった、今日は『とる科の超電砲』の御美について  
研究だったな」

「ああ・・奴のビリツン・ビリデレが現生に現れたら世の男共はど  
ういった反応を示すか検証だ！」

まあそんなこんなで1時間半程友人A達と 琴について語った俺は  
自分が意外にツンデレ耐性が無いことに気付いた・・・。

いや、なんかさ・・・身近にアレのデレが無くなった存在が居るもん  
だから、そういうのマジ無理になってんだらうねー！。

あとロリコンじゃないよ！中学生の研究とか怪しいけどさ！

俺はアニ研の奴らと話を終えクラスに戻り、エコバック、別名奴隷  
バックを棚から取り出し帰宅する。

残念ながら白状なアニ研の奴らは17時半のアニメに間に合わんと  
いうことで血相変えて帰って行きやがった・・・！

よってぼっち。

寂しくねーよ！？本当だよ！？

「あれ・・・平沢君？」

が、そんなぼっちに絶望している俺に声をかけてくれるイエス・キ  
リストが居た！

「む・・・な、中野さん」

中野さんきたああああああ！初日以降一度も二人きりになる機会  
なかったけどついにこの日 came きたあああああ！

ぐへへへ・中野さん今日も超可愛いよ・その眼もそのヴォイスもツインテールも！

「今日はもう帰りなの？」

「あ、ああ・・ちよつど同好会も終わつたしなー」

「あ、サッカーの同好会だね。今日は運動場に居なかつたみたいだけど」

「えーと、が、外周を走つてたんだよ・・あはは」

言えない・・実はキモオタ共と円になってツンデレ・ビリン・ビリデレに関して熱く語っていたなんて・・。

普通の展開なら言つただけどさ・・何かこんなに綺麗な目されると・・やましいこと考えてる自分が馬鹿に思えちゃう・・。

「あ、あのを」

「んー、なんですかい」

「今から・・・その、軽音部一緒に見に行かない？」

『軽音部』

そのワードに俺は過剰に反応した！

『桜が丘軽音部』とは

美女4人が軽音楽器を扱って演奏を行っているパラダイス空間のことである。

以上脳内wikiより抜粋

ん・・・でも待てよ、確か中野さんは鈴木さんとこないだ軽音部に見学しにきたって姉ちゃんと憂が言ってた気が・・・。

俺だけ全然知らなかったことに絶望を感じたというのは置いておくとして。

「新歓ライブ見てから1回純と見学に行っただけど・・・その、何か雰囲気は良く分からなくて。もう1回行ってみたい、それに・・・平沢君お姉ちゃんがいるでしょ？」

あー、確かにあのライブはすげー良かったな。

俺の姉ちゃんがあんな才能あるなんて俺もびっくりしたよ、15年間弟やってるけどありゃギター弾いてる時だけ別人だなうん。

でもまあ、おそらくギター持ってる時以外は普通の姉ちゃんであって、その姉ちゃんと一緒にいる軽音部の美女達もそりゃあ個性の強いメンバーなんだろうなー。

「ああー、だいじょーぶ。予定とか何もなしな、行くっか」

「ホント？良かった」

ふへへ・・・ついにこの時がやってきたか。

軽音部の美女達を拝めるこの日が！

軽音部の美女が遊びに来たときは自室に監禁され、桜が丘高校が一般に開放された時は一日家の掃除をやらされ、入学してからは行きも帰りも憂と一緒に、学校の休み時間はクラスに縛りつけられる・これらの苦難を乗り越えてついに！ついに！

俺はパラダイスに足を踏み入れることが出来るんだあああああ！

俺と中野さんは二人揃って音楽室へと歩き出す・しかしこのイベントも美味しいな、中野さんと二人きりで歩くなんて・学校中の男子敵に回しそう。

揺れるツイントールが超キュートです中野さん、いまにも食べべちゃいたい衝動に駆られちゃうねふひひひひひ！

「サッカー同好会は楽しい？」

「ぼちぼちー、まあ小学生の時はサッカーやってたのもあってある程度動けるしなー」

「そうなんだ、スポーツ好きなんだね」

「まあ俺の取り得はマジでそんならいしかなないから・・・」

会話もそれなりに弾み、俺は今まで生きてきた中で一番の幸せを感じながら音楽室へと続く階段を上がる！

そして見えてきたのは理想郷へ続くドア！今まで完全に閉ざされて

いたそのドアも・・・ついに開かれたのだ！

「・・・き、緊張するかも」

中野さん若干声が上がってるけどそんなとも可愛いね！

大丈夫だよ中野さん、貴方がこの軽音部に加われば美女5人となってもう桜が丘高校軽音部は永遠に語り継がれること間違いない！

「俺の姉ちゃんもいるし大丈夫だって・・・まあ俺も軽音部来るの初めてだけだよ」

「そうなの？」

「ああー、ラス・・・じゃなかった憂がさ、お姉ちゃんに迷惑かかるから行くなって喚くし。んじゃ・・・」

そして俺は理想郷のドアノブへと手をかけようと右手を伸ばす。

・・・が！

その瞬間、俺は全身に凄まじい何かを感じ一瞬身を引いた。

「どうしたの？」

「・・・い、いや・・・」

な・・・何だこの感覚！？

このドアを開けてはならない、と本能が告げている！

何故だ！？このドアの先には楽園が待っているのに！恐れるモノなどないはずだ！

まさか中野さんと俺の行動を見張っていた憂が張りこみを・・・！？  
そしてノブに手をかけた瞬間襲ってくるのかか！？

いや待て、アイツは鈴木さんと一緒に帰ったじゃないか・・・！この学校にはもういない！最後に見たのは一時間以上も前だ！

それにもし姉ちゃんが憂に俺が軽音部に来たことを言っても別段問題は無い、中野さんに紹介してくれと頼まれたと言い張れば流石に納得するだろう。



じゃあ何だ！？この先には・・・いったい何がいる！？

下手をすれば・・・憂を越える存在がいるかもしれない！

「平沢君？」

ツク・俺の葛藤を不審に思ったのか中野さんがつぶらな瞳で見つめてくる。

浄化されちゃいそうなおめめは大好きなんだけど、これ以上此処で引っ張るのは得策ではない！

「あ、何でもないって！んじゃあー開けよーか」

自身の中の躊躇いを噛み殺し俺はノックし、そしてドアを開けた！

今から・・・その、軽音部一緒に見に行かない？（後書き）

憂を越えるかもしれない恐ろしい存在とは如何に。

キモオタ成分強めと書きましたが、いつもこんなだったねりんた  
ん。



デコの方が近寄ってきた、そしてさりげなくどこるかストレートで俺が気にしていることをぐさり。

全然似てない・・・いやね、男であるの二人の顔だったらどうよ？美男子として今頃芸能界デビューしてるからね！

「ま、あ・・・そういう兄弟もいるもんですよ」

「そういうもんか。しかしほっそいなー！体重とか超軽そうだな」

「まあ身長割には・・・」

「何センチ？」

「170cmで体重は53kgですけど」

「って俺は何でこんなに個人情報をべらべら喋っているんだ・・・！？」

「うわ！何とか指数だと絶対痩せタイプだろ！？」

そしてテンションたけえー！やはり姉ちゃんとするむ辺りこの人も一癖あるぞ。

「・・・ま、まあ」

「まさかこんなほっそりとはなあ・・・話は変わるけど凜は軽音部入らないのか？」

い、いきなり名前と呼ばれた！てか話変わりすぎだよ！いきなり軽

音部のことに飛ぶって脈絡が無さ過ぎる！

てか今まで憂以外のほとんどの女性に呼ばれたことがない下の名前をあっさりと呼ばれて俺歓喜！

やべえめっちゃ興奮してくるぜぐへへ。

「軽音部すか。俺はまあ・・・他に同好会入ってるんで、今んとこ入る予定はないすね」

本当は入りたかったんだよちうしょうが！

男子マネとして入部したかったんだけど・・・

『お兄ちゃん、軽音部に入部するつもり？・・・お兄ちゃんが居ると、せつかくお姉ちゃんが打ち込めることに支障をきたすかもしれないんだよ？分かってる・・・？』

と憂から殺人光線飛んで来てるんだよ！？酷くね！？

ていうか最後の一言こええ！威圧感たつぷりでもう俺の妹と思えんわ！顔と声一致させるせめて！

まだこの年で墓石の下に埋まりたくは無いですうつうつうう。

「そこを何とか！このまま後輩0の軽音部なんて嫌なんだ！」

「うつ・・・そ、そんなデコを全面に出して迫らないでください！」

「デコ言うな！」

「す、すみません！」

いやこつちとしても入りたいんだけど・・・少なくともこの方に憂をどうにかする力があるとは思えん。

姉ちゃんですら無理だったからなあ、何かもう軽音部と俺の関わり合いになると憂はテコでも動かんし。

「俺より中野さんを勧誘したほうが・・・ほら、姉ちゃんに任せてると変な方向に・・・」

姉ちゃんは中野さんのツインテールに興味津津のようで目を輝かせている。

中野さんは相変わらず苦笑い、やはり彼女に我が姉の相手は荷が重すぎるか・・・というか何処か一本ネジ飛んでる人じゃないとあの人の相手はかなーり厳しい気が。

俺と憂、そしてこのテコの方含めて何処かおかしいが中野さん完全に普通の人だし。

「・・・まあ、今日は平沢家の弟を見られて良しとしくか。こら唯、勧誘ってのはー」

そう言っつて俺から離れて行き中野さんに必死の勧誘を試みる。

あ、名前聴き忘れた・・・テコの方と記憶しておこう。

しかし軽音部は美女の種類も豊富なんだな、てっきり皆乙女ちっく

な方だと思っっていたんだがあんな爽やかふう美少女も取りそろえて  
いるとは・・・。

なんかあれだな、夜にry・・な、なんでもありません！

邪なこと考えていると何時何処から憂が現れて俺に鉄拳制裁してく  
るか分かったもんじゃねーし、気を抜くな平沢凜・・・。

さあて普段美女達はどんな楽器を使っているのかな？

さっそく物色開始だ、まずは手始めにあのキーボードから・・・。

が、俺が楽器に手を伸ばそうとしたその瞬間だった。

音楽室の、扉が開く。

そしてその扉から現れたのは・・・。

「お疲れ様ー。遅れてごめんね」

きたああああ！何かめっちゃおしとやかで眉毛太くて垂れ目のウルトラ級の美女きたあああああ！

何この全身からあふれ出る私お嬢様ですよなオーラはあああああ！

現生に現れたヴィクトリア女王ですか！？それともクレオパトラですか！？何か違ってるけどどうでもいいや！

うは、もう俺あの人見てるだけでご飯10杯行けます！すぐさま俺に白米用意して白米！

そしてさらに彼女に背後に誰か居るのを確認した俺はテンションが最高潮に達して鼻血が出てきそうになる！

やばい、あの爽やか系デコの方も良かったけどやっぱり王道も良い！良すぎるぜえええええ！

さあ次はどんな美女が出てくるんだ！？何処からでもかかってこいやあああ！



「ごめんな、まさか先生にプリント整理頼まれるなんて・・・」

出てきたのは・・・黒髪ストレートの美女・・・！

・ ・ ・ っ て アレ ・ ・ ・ ? この 人 、 俺 知 っ て ね ・ ・ ・ ?

「 ツ ー ! ? 」

ななななななな！？

な、なんで！？どうして！？ワイ！？

どうしてこの人が此処にいるんだあああああああ！？

さらに追い打ちのごとくこちらに気付いた黒髪ストレートの人が俺の顔を見て驚愕の表情を浮かべた！

「……………んな！？ど、どどどどどどどどど……………」

そういつて美女も俺を指さす！





りんたん、固まってるけどどうしたの？

「ん？どうしたんだ溇？凜と知り合いか？」

「りんたんと溇ちゃん何処かで会ったことあるの？」

「二人が知り合いだったなんて意外ねー」

「平沢君、軽音部に二人も知り合いが居たんだ」

「……何だこのわけわからん空気は！」

しかも知り合いて……いや、そうだけど！知ってるけど！

この秋山溇さん知ってますけど！

出来れば思い出したいくないんですよおおおおおおおお。

「どうなんだ溇？」

「い、いや……そ、その……」

「溇ちゃん顔が赤いけど体調悪いの？」

「そ、そんな訳じゃ！」

ぐぐぐぐぐ……！これ以上此処に居るのは得策ではない！

しかし中野さんを置いてこのまま音楽室から飛び出してしまえばもう二度と彼女は俺に声をかけてくれないかもしれないし！

い、いつたい俺はどうすればいいんだ・・・!?

「・・・漣？何か変だな」

「何処も変じゃない！」

「りんたん、固まってるけどどうしたの？」

「何でもない！何でもないです姉ちゃん！」

「初めて私凜君見たわー、全然唯ちゃんと似てないのね」

ぐう・・・俺にまで火の粉が！

てか垂れ目の方向気にぐさりと気にしていること言ってるし・・・。

こ、こっとなったら・・・！

「な、中野さん？」

「どっしたの？」

「も、もう軽音部は満喫出来た？」

「え、えっと・・・それは、うんそれなりに」

「じゃあ今日はもう帰ろうか!？俺憂にスーパーで買い物してこい

って言われてんの忘れてたんだ」

「あ、そうだね。なら・・・」

「そ、そういうことで！軽音部の皆さん、ありがとうございました  
！！！！！！」

「あ、ちょっと平沢君！手、引つ張らないで！」

俺は超絶美少女中野さんの手を畏れ多くも無意識のうちに引つ張つて音楽室を飛び出した！

場所は変わって、此处は平沢家。

家では憂が姉と兄のために夕飯を作っていた、そしてその様子を見ているのは友人の鈴木純。

彼女は鼻歌を歌いながら料理をする憂を見てこう思った、良い奥さんになるんだらうと。

「憂ってさ、平沢君と仲がいいよね」

「そうかな？何処にでもいる普通の兄と妹だと思っけど」



「またまた、そんなこと言って憂よく平沢君見てるじゃん？やっぱ妹からしたらお兄ちゃんはかっこいい？」

純としてはカマをかけたつもりだった、つまり冗談なのだ。

双子なのでかっこいいも何もないだろうと思っていたのだが・・。

「か、か、かっこいい！？な、何言ってるの純ちゃん！そんなわけないじゃない」

「へ・・・？」

「あ、あんなひよろひよろで！背も高くないし！」

何だ・・・これは？

冗談のつもりだったのだが、予想以上に憂が過剰に反応している。

これはもしかして・・・俗に言う・・・ブラコン？

「パソコンにはオタク画像いっぱい入ってるし！お姉ちゃんにはいっつも厭らしい目向けてるし！」

「・・・は？」

「初音 クとか！Megpoidとか！」

「・・・」

「気持ち悪いもんお兄ちゃん！」

「・・・」

それが何を意味するかは純には分からないが、少なくとも平沢凜という人物を紐解くのに十分すぎるワードが二つ入っていた。

『パソコン』『オタク』

そしてさらに『お姉ちゃんに厭らしい目』

・・・なるほど、確かに気持ちが悪いなと純は思った。



りんたん、固まってるけどどうしたの？（後書き）

憂が口を滑らせてしまいました。

どんまいりんたん。

漣のメルヘン成分に満ちた小学校の頃の作文を皆に見せるぞ！

平沢凜と中野梓が音楽室から走り去った後、教室に残された軽音部の方々は秋山漣を尋問にかけていた。

「なあみおー。何かあったんだろ？」

「何もないつて言ってるだろ！」

「嘘だ！顔を真っ赤にして言うなんて墓穴を掘ったな漣！」

「く、くう・・・」

「漣ちゃんはりんと会ったことあるのー？」

「私も気になるわー」

四面楚歌の秋山漣、もう20分近くこの調子である。

尋問を受け続けて何とか何処かで話題を変えようと振舞ってみたがそんなに世の中は甘くは無い。

何処をどう逸らしても最後にはまたこの話題に戻ってくる・・・俗に言う無限ループの状態だ、酷い。

そして遂に彼女は折れた、もうこれ以上軽音部の皆を誤魔化すのは限界がある。

それに・・・

べ、別に・・・私が悪いわけじゃないし。

と彼女の頭は結論付けた。

「実は・・・その」

「うん」

「えーと・・・」

「うん・・・」

「うーん・・・」

「えい」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「22」

「やっぱり言えないー!」

「言えー!じゃないと遷のメルヘン成分に満ちた小学校の頃の作文を皆に見せるぞ!」

「え、ええ!?それは困る!」

「なら言うんだ!」

「遷ちゃん!気になって眠れないよ!」

「まだ寝る時間じゃないだろ!?!」

「まあ細かいことはいいからいいから!」

「ッ!」

秋山遷は大きく息を吸い込み、そして。



「、、、、、、、、、、、、告白・・・されたんだ」

「だからー！こゝこゝくゝゝはく。か、彼から

「「「？」」」

「なあッ、なあんだってえー!?!」

「あらまあ!ホント?」

「み、漣ちゃんが・・りんたんにな?」

それぞれ様々な反応を示す軽音部員。

律はそんな馬鹿な!?!と言った感じの表情。

紬は早く次の話が聴きたくて堪らないらしくそわそわしている。

一番過剰な反応を示したのが唯だった、顔が驚愕の色に染まったかと思っふるふると顔を振るわせている。

「何時だ!?!何時なんだ漣!?!お前そんな素振り全く見せなかったじゃないか!?!」

「漣ちゃん、もしかして私達に内緒でたくさんの男の子と関係を・・?」

「りんたんが・・りんたんが・・」

何やら皆違う方向へ思考を持っていつているがもつこの話は終わりで・・・。

「何時だ!？」

そうもいかなかった。

「去年の・・・じゅ、12月」

「まさかクリスマスだったりするの?」

「い、いや・・・その、23日」

「その日・・・確かりんたんが『クリスマスの馬鹿野郎!』って叫んでた日だよ」

「それで!?!どうなったんだよ凜とは!?!」

まるで餌を与えられた猛獣のように律が食いついてくる、これは逃げられそうにも無い。

秋山澗は話しても差し支えないかと判断した部分だけかいつまんで話していく。

「そ、それは・・・こ、こ、ことわ・・・っただけだよ」

「どっしして!?!」

「いや・・・その。だって2回しか会ったこと無かったんだぞ!?!」

「2回でも想いは伝わる・・・澪ちゃんなら考えそうなことよ!」

「何の理論だむぎ!？」

「りんとんと・・・澪ちゃんが・・・りんとんと・・・澪ちゃんが・・・」

こうして蜂の巣をつついたような騒ぎはまだまだ終わりそうにも無かった・・・。

溻のメルヘン成分に満ちた小学校の頃の作文を皆に見せるぞ！（後書き）

唯が壊れました。

そしてりんたんの被害者だった溻さん、これからどうなるのか!？

もしかしてお兄ちゃんに変わったことされたとか!?(前書き)

タイトル名に憂が復活しました

もしかしてお兄ちゃんに変なことされたとか！？

家に帰ってきた俺を待っていたのは憂の暗黒スマイルだった。

「お、兄、ちゃ、ん、！遅い！」

「ご、ごめんなさい！だからおたまと包丁振り回さないで！あ、今包丁の切っ先俺の髪掠ったよ！？ねえ！？」

憂は俺から醤油をひったくるとそのままスタスタと去っていく．．．  
こえー．．．。

まあ．．．でもこれも慣れたもんだから別にいいけど．．．今日は慣れてないことが起きちゃったし。

自室に入り荷物を放り投げた俺はベットにダイブ、今日の嫌な出来事が頭に過る。

「つつか秋山さん．．．姉ちゃんと同じ部にいたなんて．．．盲点過ぎたわ．．．」

俺と秋山さん、出会ったのは去年の12月頭。

あの美女と出会った瞬間俺はもう目を奪われたと言っても過言じゃねえ．．．アレは反則すぎだろ、ときめかない男は間違いない．．．してる奴だ！



思い出してみれば・・・ちょっと早とちりだったかな！2回しか会ってないのに告白ってのはさ！

でもあんな美女だよ！？次会ったらもうその横には男が！ってことも考えられるじゃんか！？

「あああああああ！くそおおおおおおお！」

ツ・・・ちくしょー、軽音部にも足運び辛くなっちまったし・・・つうか姉ちゃんの友達に告白してたってコレなんの苛めだおい。

姉ちゃんから

『りんだあん、澪ちゃんになんて言っただけで告白したの？』

つて口撃食らうの目に見えっして・・・そして憂がそれに反応してまた色々・・・

『だから桜が丘はダメって言ったのに！』

うわ、その後俺に向かって鍋投げしてくるところまで幻視出来ちゃったよ、幻視で終わらんあたりが憂クオリティだし・・・今日はヘルメット被って食卓に臨むか。

フルフェイスじゃ飯食えなし・・・半ヘル・・・持ってねえ！俺バイクのヘルメットフルフェイスしか持ってねえ！

これは不味い、今日こそリアルに生命の危機か・・・！？

嫌なことばっかだな今日は・・・あ、でも超絶美少女中野さんのお手

手を握りしめられたのはもう鼻血モノだねふひひ。

あー、もうめっちゃ柔らかかったよあの子の手。

もう舐めまわしてしゃぶりたいくらいだわ、あれはもう楊貴妃だわ、現生に現れた世界三大美女の一人。

中野さん軽音部に入ったら何か喋り辛くなるし、いつそのこと『軽音部はやめておいたほうがいいよ』とか言っちゃう？ししし。

まあとりあえず・・・秋山さんのことは忘れちまおう、もう終わったことだし・・・。

それに俺を振ったことをねちねち言うような人じゃないだろうし・・・。

俺は気を改めてパソコンへと向かう、そして初音クさんに慰めてもらうことにした！

決して厭らしい意味ではないので勘違いしないよーに！

「お姉ちゃん元気ないけど・・・大丈夫？」

「うん・・・大丈夫だよ憂ー」

「・・・普段めちゃくちゃ元気なだけに違和感すげえあんなー」

「お兄ちゃん！」

「ご、ごめんってば！うわマジで鍋を台所から取り出そうとしてるよこの鬼畜は！」

いつも通り三人で食卓を囲んでいる訳だが、何だか姉ちゃんが元気がない。

元気だけが取り柄のような姉ちゃんだけに何かネガティブエネルギーに周りに巻き散らかすことなんてないもんな。

違和感がやべえわ、まあ元気のない姉ちゃんもいいな・・・可愛いし・

・シスコン万歳！

つうか夕食の時に絶対からかってくると思ってこっちはかなり心の準備をしてきたというのに・・

その予想と反して姉ちゃん元気ないし、もしかして秋山さんと俺のことで言い合いになったとか！？りんたんは澁ちゃんにはもったいないくらい良い男の子だよって！

なにこの素敵展開！？姉ちゃん、姉ちゃんは姉の鏡だ！シスコンで良かったよ！

「憂<sup>うれ</sup>ごめん、今日はもうちょつと部屋に戻るよー」

「お姉ちゃん・・何かあったの？もしかしてお兄ちゃんに変なことされたとか！？」

オイコラ、勝手に人を痴漢扱いすんな！

お前が俺にやってることは痴漢どころかドメスティックバイオレンスなんだぞ！？分かってんの！？

分かってたらしらないよね！自覚してくれ頼むから俺の命があるうちに！

姉ちゃんは食器を片付けて部屋に戻っていく・・・

むう、此処まで元気ねーのは久しぶりすぎる。

「お兄ちゃん？」

そしてまあ・・・そうなるわな・・・頼むからその目力もう少し落と  
して憂、キミ視線で人殺せるよその勢いだと！

「言つとくがなー、俺は全然知らねえぞ？」

「ホント？お使いに行くにしては帰ってくるの遅すぎたけど・・・何  
かあったんでしょ？」

ツ・・・鋭い、頭が切れる妹を持つと大変だ・・・！

「・・・ねえって」

「嘘、今お兄ちゃん私から目逸らして上向いたでしょ！」

「ぐはッ、俺の癖を見切つてやがるこの妹・・・！」

「ほら！さっさと吐いて！」

「何この某悪徳検事みたいな誘導尋問は！？」

「いいから！」

「ッッ」

「早く言わないと鍋を」

「わかった！わかったからそれは止めてくれ頼む！」

なんて妹だよ！警察にDVで訴えるぞちくしょーが！こんな恐ろし

いのは嫁に絶対に持ちたくないわ！

つかこればかりは言うわけにはいかねー！マジでコレ言ったらもう二度と軽音部と関わんなとか言われるに決まってる！

だから代替案と出さず俺は！

「でもな憂、やっぱり言うのは無理だわ」

「そう・・・なんだ・・・なら」

「よしわかった、頼むから着席してくれお兄ちゃんの一生のお願いだ！」

「・・・もう」

「言うのは無理だけどさ、姉ちゃん元気にしてくるから・・・それで機嫌直してくれ」

「・・・出来るの？」

「出来るんじゃないかってやらなきゃダメだろ、元気のねえ姉ちゃんなんて俺だっけ見てたくないし。俺に任せろ」

「・・・うん、わかった」

っしゃあああああ！丸めこめた！憂丸めこめたって何時ぶり！？いや何年ぶりだっけ！？

久々だよこの嬉しさを噛みしめるのはあああああ！

俺は猛然と階段を駆け上がり姉ちゃんの部屋へと突っ走ってる！

ししし、姉ちゃん元気になれるかどうかはわからんけど、一緒にギ  
太の手入れとかすれば少しは回復すんだろ！

それでもどうにもならんかったらマジで相談とかに乗るしかねーけ  
どな！

平沢凜が駆けあがっていき、リビングに一人残された憂はポツリと  
呟いた。

「・・・偶にかっこいいこと言っただから・・・ずるいよ凜お兄ちゃん」



もしかしてお兄ちゃんに変わったとか!? (後書き)

ドメスティックバイオレンスⅡ D V

あ、だ、ダメだよりんたん！それは！

姉ちゃんの部屋にやってきた俺だが、姉ちゃんはベッドに突っ伏したまま動かずに『うーうー』言っている。

最初は憂が恋しいのかと思ったがどうやら違うようで・・・。

まあ、まだ『うーうー』言っているうちはそこまで重傷じゃないなと俺は判断した。

「ねえ、りんたん」

普段より幾分か元気の無い声で姉ちゃんが話し掛ける。

「なんじゃい」

「あのさ・・・澪ちゃんから話聞いたんだ」

「・・・つぶッ!?!」

やっぱりかよ!?! やっぱりそっちのお話だったのかよ!?!

もしや秋山さんに『唯の弟は気持ち悪い、気分を害したから慰謝料を請求しよう』と思っているんだ』とか言われたの!?!

それでそんなに落ち込んでんの!?!

生まれてきてごめんなさい!でも死にたくは無いです!

「あのさ・・・りんたん、今でも漣ちゃんのこと好きなの？」

「いやいやいやいやいや！」

いきなり何を聞いてくるんだこのお姉様は！

「つつか4か月以上前のことだよ！？いくら俺が執念深いと言っても流石にもう秋山さんのこと何も思っていないよ！可愛いけどさ！」

それにその後追加で他の二人に振られてるしな！

「つつか短期間で三人に振られてる俺すげえ！」

「流石にもう何も思っちゃいけないけど・・・四か月以上前のことだし」

「ホントに・・・？」

「む、ホントだったば。そんな涙目で訴えないでくれマジで」





つつかマジで結婚したいとか思ってたの！？俺も大概なシスコンだけど流石にそこまで考えたことないわ！

と、とにかく混乱しているこの姉を落ち着かせねば。

「色々突っ込みたいけど・・・と、とにかく今はもう秋山さんのコトなんも思っていないって。それに姉ちゃんが秋山さんに勝てる部分なんていっぱいあるしさ」

「例えば・・・？」

「そうだなー、とにかく秋山さんは普段は冷静、悪く言えば仏頂面だが姉ちゃんは何時も満面の笑みで俺や憂を元気にしてくれるだろー。あとどんだけへマしてもその笑顔見たら何でも許せちゃうところだろー。他にもいっぱいあんどー！」

「りんたん・・・！」

ふへへ、姉ちゃんのいいところ言うんだったら俺の右に出る者はいねえ・・・あ、憂とは互角だけど。

とにかくこれで少しは元気になったか？

「まあそういうわけでき、もう今は秋山さんとか全く関わってねえし。そもそも連絡先だって知らん、もう終わったことなんです！」

「良かったあ・・・」

何が良かったのか分かんが、まあ姉ちゃんが元気になってくれたのならば良しとしよう。

しかし・・・姉ちゃんはいったい何処まで本気なのやら、彼女になるやら結婚するやらお嫁さんになるやら・・・。

まあ全部姉ちゃんのことだからよく考えないで色々言ってるんだろうけどさ。

とりあえず一安心と言ったところか・・・む？

姉ちゃんの机の上に、桜が丘高校に入学するのを決定づけた親からの命令文書が入っていた封筒があるぞ。

まだ持ってたのか・・・というか今考えてみればあの馬鹿親たちが桜が丘高校に入学を決めなければ秋山さんと会うこともなかったのに・・・！

あ、でもそうになると中野さんとも会えないことになるのか、それは困る・・・。

俺はふと何気ないつもりでその封筒を取ろうと手を伸ばしたのだが。

「あ、だ、ダメだよんたん！それは！」

「・・・へ？」

そう言っただけで姉ちゃんが高速で起き上がり机の封筒をひったくる。

普段動きがとろいだけにこれはいったいどういう・・・ま、まさか。





かかかかかかかか、かつかかつかかか、かか、彼氏?!?!の  
写真?!?!?

その封筒はダミーで中身は実は彼氏の写真なのおおおおおお  
おおお!?

うおおおおおおおおあああああああああああああああ  
あああああああ!?!?!

その後怒り狂った俺だったが結局中身はあの時の紙つ切れしか入っ  
ておらず、姉ちゃんに多大なる迷惑をかけた拳句俺の雄たけびを聞

いた憂がお玉で俺のおつむを思い切り叩いた。

・・痛くて眠れなかった。

あ、だ、ダメだよんたん！それは！（後書き）

シスコンとブラコンが合わさり最強に見える・・・！

何かお気づきの矛盾点などあってもなくても、感想が貰えればスズメバチは泣いて喜びます！

ひらね・・・

くうーわー・・・憂の野郎、思い切りお玉で叩きやがって・・・。

軽音部に秋山さんが居ると発覚した翌日、俺は朝から前頭葉、つまりデコをさする行為を続けている。

今は休み時間だが、学校に来ても相変わらず憂はツンとしたままだ。

全く・・・あんな妹を持つと大変だよ！

「あのさ、平沢君」

「ん・・・中野さん」

中野さんきたあああああああああああああ！

俺のオアシス！俺の女神！俺の救世主！

うへへ、まだ昼回ってないのにこんな時間から中野さんと喋れるなんて・・・昨日は多少強引な別れ方しちゃったけど、杞憂に終わったようだ。

「軽音部のことなんだけど」

うっ・・・。

まさかここでも『秋山先輩とはどんな関係?』とか聞かれるんじゃないかな?」

「あの後細先輩と少し話をして・・・入部することに決めたの」

「そ、そうなの・・・?それは良かった」

ぐう・・・秋山さんのことじゃなかったけど、それはそれで困る。

俺は今軽音部に非常に足を踏み入れずらい、そして中野さんが軽音部に入るということは少なからず俺と秋山さんの関係を知られてしまうわけで・・・。

「ひらさ・・・」

「梓ー、ちょっと」

「あ・・・」

中野さんが誰かに鈴木純さんに呼ばれている。

ツチ・・・俺の至福の時間を奪い取りやがって・・・!

今日のところはその美しさに免じて許してやろう。

「ごめん、平沢君」

「ああー、いいっていいって」

そう言っただけで中野さんはテクテクと鈴木さんのもとへと駆けて行く、

うは・・・揺れるツインテール、揺れるスカート、もう何処をとつても神なんだけど・・・。

最近中野さんが可愛すぎて生きるのが辛い・・・！

しかし昨日今日と中野さんと喋りまくりだな俺、もしかしてマジで・  
・このまま素晴らしい関係になっちゃうとか！？

が、そんな空想にふけている俺は何だか自分に冷ややかな目が向けられていることに気付く。

「この視線・・・そしてこの空気・・・！これは

『おちちゃんこんなに可愛いのになんでお兄さんはあんなにキモイの  
』  
『？』

って中学時代教壇で言われた時と似ている・・・いや全くもって同じ！

そしてその発信源は・・・！

中野さんと鈴木さんだとおおおおおおおおおおおお  
おお！？

二人がこつちをちらちら見ながら陰口のようなモノを叩いている・・・  
ま、まさか。

まさかでも何でもない、今までの経験からしてこの感じ・・・間違い  
ない！

「・・・バレたなこりゃ」

俺がキモオタであることがバレたようである、そしてそれは瞬く間に  
広がり中野さんと鈴木さんを蝕み・・・。

中学時代の再来というわけか、しかしまあ何だか慣れ過ぎたという  
こともあり悲しいとか腹が立つとかそう言った感情は湧きあがって  
こなかった。

しかしいったいどんなルートを辿って俺がキモオタだという解に辿  
りついたんだ？少なくとも周りに聞こえるようなでかい声でキモオ  
タトークしてたつもりなかったんだけどな・・・。

もしかキモオタフレンズの誰かがしくじったか！？自分から高校生  
活に女っ気失くしてどうすんだよ馬鹿め！

まあどちらにしろどうせいつかバレんだ、それが遅いか早いかの問  
題だし・・・。



面と向かって何でも喋れるような関係になるためにはこんなコト知られた程度でびくついちゃいかん！

それに前も言ったけどキモオタ趣味を知って俺を避けるような女性、そして趣味を取り上げようとする女性とは断固お付き合いは拒否させて頂きます！

俺の中じゃ完全に『姉ちゃん』>>>初音 クさん>>>女性>>>憂』という方程式が成り立ってんだ！姉ちゃんに止めると言われん限りは絶対にやめん！

シスコン！？うるせえ！

言っておくが姉ちゃん限定だぞ！？双子の妹とか言う恐ろしい物体は絶対に違うからな！絶対にだ！

「おい平沢、昨日の『とる』みたか？ヴェン さんめちやくちや かつこよくね？俺あんな女性と結婚してーわ」

俺が密かな決意を固めていると、友人Aが先日アニメに関して感想を求めてきた。

「エントさんだろ？俺もそれは同意だ、間違いなく2期じゃあの人が一番かっけえ女性キャラだわ」

「そしてイン ックスさん何気に良い子じゃね？」

「最近株がウナギ登りだわ・・・ふひひひ」

いや、やっぱりキモオタトーク最高だわ、そしてヴェントさんかっけ

えし。

誰が何と言おうとこの趣味はやめられん！姉ちゃんは除く！

ひらた・・・(後書き)

2週間近く更新が無かったわりにこの内容・・・ごめんなさい！

今後の更新について知りたい方は後に更新する活動報告をご覧ください。  
さい。



そう言って去っていく少女。

背中がドンドン小さくなっていく、勇気ある男ならば追いかけるの  
だろうが・・・俺はそんなヒーローみたいな奴じゃなかった。

どうしてこんなことになっているかって？回想してみるか・・・。



中野さんと鈴木さんにキモオタであることを知られたことにより急速に俺らキモオタグループの噂は広まっていき今ではクラスで知らない奴もいないくらいになっていた。

あの時以来中野さんは挨拶はしてくれるものの話をしようとはしてくれない・・・ふ、わかっていたさ！そんなことくらい！

あれから一週間、学校にもなじみ始め、もうキモオタであることがばれているのだから遠慮することはないと言わんばかりに俺達アニ研はキモオタトークを繰り広げている。

「I のシャ 超可愛くね!？」

「S のヤルだろ!？僕っ娘最高過ぎるだろ!」

友人A達とこのような会話を休み時間中には話している、おかげさまで同クラスの女子だけではなくイケメン爽やか系の男子共も話し掛け無くなってきたぜ。

サッカー同好会？まだ続けてるぜ！キモオタとは認識されてるけどそれで弄られるのは別に苦じゃねーしな！

それに身体動かすのは大好きだし、なまっちまうのはいざというときに大変だろう？

具体的にどんなことかって？

そりゃあもちろん女の子と　　するとき体力がなかったら大変だろ！

女の子に　　ばっかりさせると可哀そうだしな！

え？出来もしないことを妄想するな？

うるせえ！少しくらい夢を見させてくださいお願いしますこの通り！

まあそんなわけで高校3年間もキモオタとして楽しんでいくだろうと思っていた矢先に、クラスの委員決めが行われた。

俺は各委員はそれぞれ二人ずつ、男女問わない構成となるようで俺はもちろんその他の野郎共も考えていることは皆同じ。

そこで男女一人ずつ選ばなければならない委員に立候補するわけに



なるのだが・・・。

「行くぞ平沢！俺の奥義を受けてみるおおおお！」

「ふははは！この日のために準備していたのは貴様だけではない！やはり運命は私の味方だ！」

とか大口叩いてた割に1回戦であっさり敗退、結果野郎野郎の委員になってしまった・・・悔しい。

が、そこで神は俺に微笑んだ。

配属された委員会では俺のクラス以外は皆女子が選ばれていた！委員会が集まった集会はもう天国と言っても過言ではなかった。

しかしまあ、もうその頃には俺がキモオタであるということは既に全校レベルで知れ渡っていたので・・・皆裂けていたが、一人だけ例外が居た。

それは隣のクラスで同じ中学を卒業したA子さんだった。

俺がキモオタであるということは中学時代から知っていたのでそこまで抵抗感は無かったらしく、すぐに打ち解けることが出来た。

そして話していく内に何気に彼女もそっち系の趣味を持っているということが発覚、さらに仲良くなっていった。

性格も顔もスタイルも並み（自分の顔を棚に上げて良く言うな）の彼女、美少女趣味の俺だったが彼女を好きになるまでそう時間はかからなかった。

そして委員会の集会があつてから1週間が経ち・俺はもう完全に彼女に惚れこんでいた、同じ趣味を共有することも出来、淘汰してこない彼女ははっきり言つて理想のお嫁さんである。

意を決して俺は彼女に告白をした、もうそれはおそらく秋山さんの時と同じくらい・いやそれ以上の熱意を込めてやったが・。

結果は回想を始める前の通りである。

そして今現在、彼女の背中が完全に見えなくなった俺は体育館裏で一人ぼけえつと突っ立っているというわけだ。

寂しい男だなと皆言うだろう、実際そうだけどね！

ちくしょおおおおおがああああああ！

結構早かったな高校生活の初振られ・高校始まって1カ月くらいで一人目頂きました、これは中学時代の記録を塗り替えるかもわか

らんね。

とりあえず今日はマジで何もやる気がおきねえ・・・さっさと家帰って初さんに慰めて貰おう・・・色んな意味で。

あ、その前に俺の様子を見て姉ちゃんがにやにやしなながら、憂が怒りながら俺に詰め寄ってくるのは間違いないな。

あの二人の追撃をどうやって交わせばいいんだよ・・・とりあえず鍋やらお玉やらで攻撃されないように防具だけは準備しておかないと・・・ははは・・・。

貴方とはトモダチでいたいの（後書き）

高校生活一発目頂きました、綺麗に散りました。

流石りんたん、1カ月で一人目なんて1年で12人に振られるんじゃないか！

感想など待ってます！。

お兄ちゃんの馬鹿あ！

「りんたあん、高校生になっての初めてはどうだった？」

「うつせえわ！なんでそう傷口を抉るような口調で話し掛けてくんだ！」

「だって〜」

「にやにやすんな！嬉しそうな顔も禁止じゃあああああ！」

A子さんに振られた当日の夕食タイム、やはりそこは予想した通り拷問タイム、いやもう地獄だった。

姉ちゃんは嬉しそうな顔で話しけてくるし、憂はむすつとしたままだし・・・。

俺の料理だけ幾分か粗末に見えるのは気のせいではないな・・・。

つつか何で俺が振られたのにこの姉妹は、片方はこんなにも嬉しそうな顔をして、もう片方は腹がたったようなご立腹の表情を浮かべる！？

後者とはともかく前者最悪過ぎだろ！？姉ちゃんが憂を越える日が来るとは思わなかったわ！

「A子ちゃん？まさかりんたんがあの子にアタックするなんてびっくりだよお」

「知ってんの姉ちゃん!？」

まさか・・・裏で姉ちゃんと繋がっていて、そこで

『家のりんたんが・・・ゴニョゴニョ』

『ほ、ホントですか!?! 気持ち悪いです!』

とかいうやり取りがあったのか!？

「憂が教えてくれたんだよー、りんたん仲が良い女子がいるって

「・・・!」

憂・・・やはりお前なのか!？

俺の幸せを奪う悪魔は!？

俺は真っ先に抗議の目を憂に向ける。

「私は別に何も言っていないッ、ただお兄ちゃんと仲がいいんだねってA子さんに言ったただだよ」

「ホントか!?! もしかすると今流れかけそうになっているこの涙の故郷はお前なのかもしれんだぞ!?!」

「ちよ、何その変な例え! き、き・・・」

「うわあああああ！すとおおおおおおっぷー！」

我が妹がまたもや禁句ワードを発しようとしている。

「まありんたんは振られても仕方が無いって憂は言うもんねー。だつて・・・」

「姉ちゃん！そこから先はこの家では絶対に言うてはならない鉄の掟を忘れたのか！？」

「ぶーぶー」

言いたくて仕方が無いように口を尖らせる姉ちゃんだが、いくらそんな可愛い顔したって無駄だからな！

そこから先は俺がこの家での存続を危ぶませるには十分すぎる力があるんだぞ！

「お兄ちゃん、でもコレで目が覚めたでしょ？やっぱりお兄ちゃんはパソコンを取り上げるしかないの！」

出た、憂お得意のパソコン取り上げ作戦。

何か事あるごとに憂は俺の初音クさん・じゃなかった、パソコンを取り上げようとしてくるのだ。

「ぐっっ・じゃ、じゃあ聴くがな。お前は俺にどうなって欲しいん

だよ」

「え・・・」

この趣味は、はっきり言ってパソコンを取り上げたくらいでは断絶出来ないものだ。

何せ世の中にはネットカフェという便利なものがあり、何時でも何処でもキモオタへの扉は万人に開かれているのだから。

そのことを賢い憂が知らないとは思えないし、それにもしパソコンを取り上げて、万が一俺からキモオタ趣味が取り除かれたとしても、俺の根本が変わるわけじゃない。

憂からすればだらしのない兄であることに違いは無いし、姉ちゃんから弄られ続ける弟、平沢凜のままなのだ。

「それは・・・中学校1年の時みたいに、爽やかで・・・その、かつこいいお兄ちゃんに戻って欲しい！」

「1年・・・ねえ」

1年か・・・バリバリハンドボールやってた頃じゃん、あの頃はガリガリだったなあ。

そついやキモオタ全開になったのは2年からだったか・・・

あれ？でも待てよ、確か中学1年生の時って・・・。



「でも1年生の時って、憂とりんたんそこまで仲良くなかったんじゃないかなー？」

素直で純粋な姉だからこそ、この一言が言えたのだと俺は感心した。

「だよなあ、1年の時って俺と憂がそりやあもう仲悪くて・・・凄かった時期じゃね？」

そうなのだ、中学1年生・・・13歳の頃の平沢凜と平沢憂の兄弟仲は最悪であり、常にどちらか一方が怒ったり泣いたりしていたはず。

小学生時代なら確かに憂は『お兄ちゃん！一緒に遊ぼう！』とかそりやあもう涎が出るくらいのロリータフェイスに花を咲かせて俺を誘惑してきたもんだが・・・。

そっぴやキモオタ趣味に走っていないあの頃から既にシスコンだったな、あの頃は憂も含まれてたか・・・懐かしいのう。

「だ、だって・・・その、お兄ちゃんあの頃はまだパソコンやってなかったじゃない！」

「まあねえ、あの頃はお前との喧嘩で大変だったもんなあー」

「そう言えば憂はいつも家出するー！とか言ってるんだ困らせてたねー」

「うわー、そういうこともあったな。何かもう・・・今じゃ考えられんパワーバランスだよ」

確かにあの頃は俺がまだこの家で権力を持っていた気がする、少なくとも今のように、奴隷扱いは受けていなかったはずだ。

一体何故こうなった・・・やはりキモオタ趣味のせいかな。

「また俺と喧嘩でもしたいのかー、憂ちゃんは」

何気なく放った一言だった、昔を思い出して現状に何となく文句を言いたくなったが故に皮肉混ざりでぼろっと・・・。

しかし・・・。

「お、お兄ちゃんと喧嘩なんてしたいわけないじゃない！この分  
からずや！お兄ちゃんの馬鹿あ！」

「え、ええ！？憂ちゃん！？どうしちゃ・・・げぶああ！？」

憂がモノ凄い勢いで立ち上がると俺の頭を思い切り座布団で叩きつ  
けた、柔らかいもののその勢いと重量で首がもっていかれる。

もげそうになつた首を必死に支えて憂に視線を移すが、既に憂は此処におらず階段を駆け上がっていった。

「・・・えーと、姉ちゃん」

「・・・な、なんか凄かったよ、憂」

憂が・・・憂がついに噴火した。

これはアレか・・・目の上のたんこぶどころか家の癌細胞である俺についに痺れを切らしたのか・・・。

中学1年生の頃の俺ならばたぶん逆切れを起こし憂に突っかかっていたのは間違いない。

しかし最近の俺は知恵をつけた、それは・・・。

「・・・姉ちゃん」

そう、姉唯に泣きつく・・・じゃなかった、憂のご機嫌を取って貰うことだ。

俺と違って姉ちゃんは憂から溺愛されている、羨ましい限りだがやはりここは不機嫌の元凶である俺が出向くより姉ちゃんが行ったほうがいい。

中2以降そうしてきたし、それが一番の解決策だ。

「だーめ、今回はりんたんが謝らないと」

「な・・・」

拒否・・・だと!?

あの姉ちゃんが!?! ブラコンの姉ちゃんが!?! シスコンだけど俺!?!

「ほおら、早く早くー」

「ぐ、ぐう・・・」

仕方ねえ・・・憂がご機嫌斜めのままだと俺らの食生活が世紀末になつちまうし・・・それに中野さんや鈴木さんに、腹いせでこれ以上変な噂流されるのも困るし・・・。

やるしかねえか・・・。

「わあつたよ・・・はあー・・・」

お兄ちゃんの馬鹿あ！（後書き）

おいおい・・そんな展開だとスズメバチも大変なんだぞ！自重しろ  
りんたん！

3月25日、りんたんの発言を一部修正しました。

お兄ちゃんは、私のこと・・・嫌い？（前書き）

大変お待たせ致しました。

10日前後更新停止して申し訳ありません。

今回は憂が噴火した話でしたね、それではどうぞ。



お兄ちゃんは、私のこと・・・嫌い？

「うーい」

「・・・」

「おーい」

「・・・」

只今、私平沢凜<sup>わたくし</sup>、妹のご機嫌を直すために一心不乱の思いで話し掛けておりますが、全く憂は微動だにしないです、はい。

正直なところ部屋に入れてくれただけでも奇跡に近い・・・あ、単に鍵がかかっていなかったとかは内緒だぜ！

今回ばかりは俺に非があるし・・・ご機嫌斜めどころか270度くらいなってるんじゃないかコレは・・・。

しかし話さないことには問題は解決しない、とにかく祈る思いで憂

の反応を待つ。

「えーと、今回はマジでごめんな憂。軽率過ぎた」

憂は布団に突っ伏したままこちらを向いてくれやしない、小刻みに身体が震えているあたり本当に泣かせてしまったかこれは。

だが此処で俺は挫けない、昔は家から飛び出した憂を、日が暮れてから日が昇るまで追い掛けていたこの平沢凜を甘く見て貰っては困る！

「まー…うん、あれだよさっきのは。えー…と」

「…」

「懐かしいな、って思ってさ。ごめんな憂。だから許して欲しい」

「…」

「…不味い、今日の憂はラスボス通り過ぎて隠しボスその1くらいになってやがる…！」

隠しボス専用のレアアイテムとかないと倒せそうにも無い、やはり召喚獣平沢唯を呼ぶしかないのか…！？

「・・・お兄ちゃんは、私と喧嘩したいの？」

俺が試行錯誤していると、憂が声を発した。

部屋に入ってから5分足らずでようやくか、何だかもつまっきの夕飯よか長い時間待ってた気がする。

「んなわけないって。憂の涙目は大好物だけど」

「・・・やっぱり悪いって思っていないんじゃない！」

ぐ、しまった口を滑らした！

でも今の憂の涙目は俺の好物の範疇に入っていないぞ！

「違っつて！確かに憂の涙目は好物だけど、俺が好きなのは受験に合格した時の憂のうれし涙とか、映画見て感動した時の憂の涙目だって！」

「・・・」

「そんな時の憂はマジで可愛いからな！言うておくがシスコンでキモオタの俺フィルター無しでも絶対だぞ！」

「・・・そんなの聞いてないもん」

「・・・そうでした」

話題は逸れたが、憂の声に何となく元気が戻ったような気がする。

これなら徐々に距離を詰めて行けば・・・何とかなるか!?

「ま、まあ・・・俺はお前と喧嘩したいなんて思ってないって。今の生活俺好きだしさ、まあもうちょっと俺に人権与えられてもいいんじゃないかなとは思っけど」

鍋を投げられそうになったり、鉄で脅されたりするのは流石にどうかと思う。

・・・そういうこと考えたら何だか謝る気失せるんだよなあ・・・俺が今まで憂にされてきた仕打ちを思い返せば、何か割に合わないっていうか。

たまーに俺が反撃（それすら怪しい）みたいなことすると、凄く噴火するし。

い、いかん・・・今はそんなつまらぬことを考えている場合ではない、憂に全神経を集中せねば!

「とにかく!さっきのは俺が悪かったしさ、ちゃんと謝る。ごめんな」

「・・・」

「それに、まあ俺は別に何されようがいいけど姉ちゃんが可哀そう  
だろ？俺らのせいで何か目が点になってたしさ、ご飯もあれじゃあ  
美味しくない」

「それは・・・そうだけど」

「ならば、俺は憂に謝ったし・・・憂は姉ちゃんに謝って」

「・・・お兄ちゃんには？」

「ん？」

「お兄ちゃんには・・・私は謝らなくていいの？」

「俺に？」

「だって・・・私のせいで、ご飯が美味しくなくなったもん」

「・・・これは・・・奇跡か？」

憂が俺のことを考えてくれるなんて・・・怒って思考回路がショート  
したとかか！？

と、とにかく冷静に答えよう、此处でまた気を悪くされたらまた大  
変なことになる。

「俺はな、お前が作ってくれるモンだったら何でも美味しいの。そ  
れにお前とねーちゃんの写真が最高だけだな。だから気にす

んなつて」

「・・・」

「ほーら、布団から stand up！ 行くぞー」

憂はもそもそと布団から起き上がる。

若干目が赤くなっており、顔も紅潮してる。

やっぱり泣かせちまったか・・・うー、最悪だ、死にたい。

「お兄ちゃん」

「なんじゃい？」

立ち上がった憂がふらつきながら声を上げる、立ちくらみが酷そう  
だ。

これが姉ちゃんだったら・・・

「姉ちゃん！？大丈夫か！？」

『り、りんたあん・・・支えておくれえ!』

『うおおおおお!』

とかいう展開になるんだけど・・・憂にはまあ、ならないわけで。

「ほれ、寄りかかれ」

「え・・・?」

「立ちくらみ酷そうだし」

「う、うん」

俺から手を握ることは無く、あくまで身体を憂に寄せて寄りかからせる。

そついやこれって中学時代から始めたことだったっけ・・・まああの時は色々凄かったし、献身的な態度を取ることが憂の機嫌をよくする方法だって気付いたんだろうなあ。

まあ今はそつという打算的なこと無しでやっちゃっただけ。

「お兄ちゃん」

俺の背中に体重を預けていた憂が声を上げる、若干重たい・・・やはり姉ちゃんより胸が・・・っと、何でもないぜ！

「お兄ちゃんは、私のこと・・・嫌い？」

っと、そんな胸のことにかまけてる場合じゃなかった。

しかし・・・嫌い・・・だと!?

嫌いなわけがないじゃないか。

まあDVはちょっと頂けないけどな！

「嫌いだったら憂が布団から出てきた瞬間部屋から出てってるって」

「・・・うん」

「どづしたんだ？」

「・・・何でもない、ありがとう」

「・・・!」



憂が・・憂が・・俺にありがとう!?

どういふことなのこれ・・!?

天変地異に前触れ・・!?!?もしくは彗星が衝突してくるとか!?

そんなことを考えているうちに憂は下の階へと降りて行った。

お兄ちゃんは、私のこと・・・嫌い？（後書き）

りんたんと憂、仲直り？出来て良かった良かった。

今回の更新は早ければ週末ですが、基本的には未定となっています。

感想待っています！。

ひ、平沢・りり、りん!?(前書き)

連日アップ!

ひ、平沢・・・りり、りん!?

憂との喧嘩から1週間が経ち、月日は流れ今はもう5月半ば・・・。

あれから少しの間憂はまだくすぶっていたけど、今は平常運転だ。

俺に対する態度も平常運転だ、今日はさっそく遅刻しそうになった俺を、フライパン片手に起こしに来た。

ふ・・・フライパンを鳴らすんじゃないぜ?叩くんだぜ?頭をな!

咄嗟に気付いた俺はニュータイプ並みの反射神経を見せて超回避、これは・・・閃き!

まあ今日は遅刻しそうになった俺が悪いな・・・だって今日は。

「うー、疲れた平沢。あと頼むわ」

「ほいほい」

時刻は14時、俺は同じ委員であるBと学校の交通整理、駐車場整理の役目を交代する。

今日はやたら車が多い、その理由は・・・。

「ねえ貴方、私達のZ子は何時の競技から!？」

「ああ、Z子は・・・」

そう、今日は5月の大イベント、体育祭の日!父兄の方々も女子の血肉を求めて大勢やってくる!卑猥!?!うるせえ!

当然俺も選手として参加してるぜ!男子の競技がほとんどないからめっちゃくちや暇だけだな!

そして出番の少ない野郎共はこうやって雑用を押し付けられる始末!これじゃあ出会いもへったくれもねーぞ!

「平沢君は何時まで?」

ふへへ、隣のポニーテールの女子が話しかけてきたぜ。

俺がキモオタであることは全校生徒に知れ渡っているだろうと思っ  
ていたが、まさかまだ生き残りがいるとはな!

これはチャンスかもしれん、上手くいけば・・・A子さんみたいに仲  
良くなれるかもしれん!

あ、ちなみにA子さんとはあれから会ったら少し話す程度です、は  
い。

昔みたいにキモオタクで盛り上がることは・・・なくなっちゃいました、ちくしょおおおおおおおおお！

マジでA子さん来たと思ったんだけどなあ・・・同じ趣味で、顔も結構可愛くて、不細工な俺には不釣り合いだったけど。

あー、思い出せば思い出す程鬱になってきやがる・・・考えるのやめよう。

「えーと、俺は今から1時間かな。Bさんはもう交代？」

「うん、でもちよつと遅れてみるみたい。さっきのB君と一緒に代わるはずだったんだけど・・・」

いやいや俺としては遅れてもらっても大歓迎ですがね！

次来る子が君みたいに可愛くて、俺に話し掛けてくれるとも限らんしやー！

ふひひ、思考回路がキモイのはご愛敬だと思ってくれ！

「まー、気長にまとうかー」

「うーん、私次の競技があるし・・・喉も乾いたなあ」

う、俺のことなんて視界にすら入っていない様子・・・。

やはり俺は年がら年中こういう扱いなんですか・・・。

しかし此処でそう簡単に諦めて堪るか！諦めの悪さだけには定評のある平沢凜！一時期あまりに諦めが悪くてストーカーとも言われた俺の根性をなめんじゃねー！

「何か飲み物買ってこようか？何が・・・」

「あ、私も交代の子が来たみたい！良かった・・・それじゃあ平沢君沢君頑張って」

「・・・おお」

そうなるんですかそういうことですか希望を持つっちゃいけないんですか・・・

しかもその笑顔、眩しい・・・！爽やか過ぎて浄化されちゃう！

まあどちらにしる今日の交通整理は他の委員会と共同作業、俺達の委員から1名、相手から1名ずつ、計2名。

ふへへ、つまり・・・女の子と二人つきりになるチャンスはまだ続いている、次の子が俺の素性を知っているかどうかは分からんが。

しかしまだ神は俺を見捨ててはいないはず！・・・この照りつける太陽の中でむさい男だけじゃあ拷問みたいなもんだしな。

「う、ごめんな。ちょっと遅れた」

「いえいえ、いいんですよ。よろしくお願いします」

きたあああああああああ、この声のトーンからして声の主は女子！イエス女子！女の子！男じゃない！

これは早速お近づきになるしかねー！

「秋山さん、それじゃあ」

・・・え？

ちよつと待って、そのポニーテールの女の子何言ったの？あき・・・  
？うん、その後聞こえなかったな。

まあ何かの間違いだろ、えーつと・・・



「あ

「え

そこに居たのは・・・！

黒髪ストレートで胸が大きい・・・！

「あ、あああああああああ、あき・・・やま・・・さん？」

「ひ、平沢・・・りり、りん!？」

「・・・どういふことだこれはあああああああああああああ!？」

ひ、平沢・・・りり、りん！？（後書き）

秋山さん再登場、さて今から1時間、地獄の時間が始まるぜ！

3月25日、B子さんの発言及び一部を修正しました。

君の微菌で汚染されないように少しでも距離をとっているんだ（前書き）

今回は平沢家にしてはえらく長くなってしまいそうだったので、途中で区切りました。

違和感を覚えても気にしないでください（汗

君の微菌で汚染されないように少しでも距離をとっているんだ

その少女は突然俺の目の前に現れた。

髪の色は黒、そしてロングストレート。

胸が大きくて、お尻も小さい。

スタイル抜群、見るものすべてを魅了するとはまさに彼女のことを  
言うんだらうと俺は思った・・・。

が。

それは去年までの俺の心境である！

今の俺は全くもってそんなことは考えていない！むしろ彼女が目の前に現れることによって心身に限りないダメージが・・・！

「・・・」

「・・・」

まさか秋山さんが・・・俺の所属する委員と一緒に仕事をする委員に居たなんて。

これは運命なのか！？振られた呪縛から解き放たれることはないとの死の宣告か！？

まあ当然俺と秋山さんの間に会話は無い、気まず過ぎて死にそうなんだか誰か交代してくれないか。

こういうときクラスのキモオタ男子のAならば先陣切って『俺！俺！』とか叫ぶんだけどなあ・・・。

しかし気まずくてマジで死にそう、マジでくたばる5秒前、呼吸困難になるくらい息が詰まる・・・。

「・・・」

「・・・」

俺と秋山さん、駐車場の入り口の横にパイプ椅子を二つ並べて仲良く座っているわけですけども。

彼女は話しかける素振りどころか、こちらとは反対方向に体を向けてしまっている・・・。

これは何だ、あれか？

『君の黴菌で汚染されないように少しでも距離をとっているんだ。わかるらない？この私の気苦労が』

とかか！？

いやだあああああああ！

がん細胞どころかこれじゃあもう汚物扱いじゃん！

「えーと・・・その、秋山さん」

思わず話しかけてしまう俺、というかこのまま沈黙が1時間続くとか拷問だわ、そうなるくらいだったら玉砕覚悟で話しかけたほうが数千倍マシじゃ！

失敗したら更なる地獄が待ち構えてるって？ふ・・・現状がそれと同じくらい地獄だから問題ねーよ！つうかこれ以上悪くなるとか想像出来ん！

「秋山さん、  
×委員だったんですね、知りませんでした」

「……」

「……」

……

どうすればいいのか、全くわからん。

というか振られる前も、この人ほとんど喋ってなかったもんなあ。

俗に言う男性恐怖症……?とまではいかないけど、男が苦手なのか?

ふへへ……なんだかそついうの考えちゃうとイケナイ方向に思考が……。

この俺が君の男性恐怖症を克服させるべく奮闘しちやっても構わんのだよ?

例えばその手をぎゅっと握って、少し赤くなってきたその耳を  
でさ……ふひひひひひいー!

「そ、その……わ、私も。平沢君が× 委員って知らなかったな」

お。

よ、ようやく・・・！ようやく秋山さんが声を発してくれた！しかも体も反対方向180度から90度になってくれているぞ！

これはチャンス！1回振られてるけど、やっぱりこの人超ウルトラスーパー可愛いし美人なんですけど！真正面から見たらその美貌で脳内でアドレナリンが暴れ回っちゃう！

未練たらしくてすみません！

「そ、それに・・・唯の弟っていうのも知らなかったよ」

「う・・・」

俺も知らなかったんですけどね、秋山さんが姉ちゃんと同じ部活動に所属してるって。

先月音楽室で中野さんと一緒に秋山さんを見たときはそれはもう心臓が止まるを通り過ぎてバーストすることろだったわ・・・。

そっいえば中野さんとはだいぶ喋っていない、というか視線すら合わせてくれない。

鈴木さんがまるで中野さんの露払いをするかのように、こちらに殺人光線（またの名をを視線）ビンビン送ってきてるしさ。



「中野さんは……どうですか？」

「……あ、梓か？それなりに……戸惑ってるけど、悪い子じゃない」

「やっぱり姉ちゃんに？」

「ま、まあ……その、最初はかなり困ってたみただけど、今は慣れたみたいだ」

やはり姉……平沢唯、只者ではない。

「え、……と、平沢君は梓と同じクラス何だろう？軽音部のことは……何て言ってる？」

ぎくり。

言えない……実は

『キモオタであることがばれて口どころか視線すらこちらに向けてくれません』なんてことは……言えない。

というか秋山さんも知ってるんじゃないか？平沢凜が重度のキモオタであるというのを。

「ま、まあ……すれ違いもありまして。最近はあるまじ喋って無くて、分かりません」

「そ、そうか。……その」

秋山さんが改まって口をゆっくり開く。

これはもしや・・・凶兆の兆し！

「は、はい」

『キモオタだから避けられてるんだろっ？』

次の一言を予言し俺は身構える！

ふ、幾度となく悪口雑言を浴びせ続けられたこの平沢凜を舐めても  
らっては困る！大防御発動じゃあああああ！

君の微菌で汚染されないように少しでも距離をとっているんだ（後書き）

凄いわなところで切っちゃいました。

しかし2000字をゆうに超えそうだったので、此处区切ります。

ちなみに本作品の文字数は一話あたり1800前後、多くて2000です。

平沢君、私・・・本当は、君のことが（前書き）

唯だけではなく憂も運動音痴という設定になっています。

二次ということで大目に見てやってください・・・。

平沢君、私・・・本当は、君のことが

「平沢君は、何かやってるのか？」

「え・・・？」

あ、あれ・・・意外にも普通の問いかけが。

てつきり『キモオタなんだから梓に近づくなよ、分かったか？この汚物め』とか、もう心がメルトダウンしちゃいそうなのを予想してたのに。

「え、えと・・・サッカー同好会に」

ここでアニメ研究とか言える程俺はキモが座っちゃいなかった。

ていうかマジで秋山さん俺がキモオタだったこと知らないのか、これは・・・嬉しいんだけど、次が無いだけに何だかなあ。

もしまだお近づきになれるチャンスが残っているんだったら、そりゃあ頑張るけどさ。

今のところ振られた女子とは気まずい関係になったことしかない、キモオタに対する世間の風当たりは想像を絶するほど厳しいものだったぜ・・・。

「そ、そうか。運動が好きなんだな」

「ええ、まあ足早いのが取り柄みたいなものですから」

「ゆ、唯は・・・その、運動凄い苦手らしんだけど」

「ああー、姉ちゃんと憂は運動苦手なんですよね。顔といい運動の件といいホントよくもまあここまで似てない兄弟が生まれたもんです」

特に顔は大事だよ顔は！

知ってますか秋山さん、学生時代の女性は顔で男性を選ぶらしいんですが、社会人になってからはマナーで選ぶらしいですよ！

ちなみに俺の脳内wikiから抜粋してるから信憑性は高いです！振られた回数が真実を物語っています！

自ら犠牲となつてこの論理を確立した俺に何か一言！慰めでもいいから労わりの言葉を！

「ま、まあ・・・それはそれで、いいんじゃないか。そ、その・・・平沢君だつて、悪い人じゃないんだし」

・・・マジですか。

秋山さんの口からそんな素晴らしいお言葉を聞くことが出来るなんて・・・！

これはもしやアレか、フラグか!?

『前振ったのは・・・その、恥ずかしくて。だから・・・』

とかですかああああああああああああああ。

ひゃっはああああ俺の妄想すげええええええ!

妄想よ現実になあれ!

「だ、だから・・・えつと・・・」

「はい」

「 良い兄弟だよなッ」

何故この会話から良い兄弟に持つていくのか分からんが、その美しい顔を見るとなんかもうそんなことどうでも良くなってきた!

でも良い兄弟っていうのは「姉ちゃん：俺」「姉ちゃん：憂」の組み合わせだけであって「ラスボス：キモオタ」は絶対にねーから!

自分の兄ちゃんに対してDVする妹なんて聞いたことねえよ!世界広しと言えどあそこまで鬼畜な妹はそうはいねえー!

ていうか秋山さんと普通に喋れてるじゃないか俺、てつきりサイレスかけられたビビ(F F 9)のように何も出来ないと思ったんだけど。

もしかして・・・マジでこのまま秋山さんと・・・くへくへ。

「あれ、凜じゃない。整理員のお仕事お疲れ様」

「・・・和さんじゃないすか」

物陰から現れこちらに向かってくるのは真鍋和、俺の姉ちゃんの下モダチである。



ちなみに俺も彼女とは結構長い付き合い、姉共々アホなのでいつもお世話になってます。

だがしかし・・・。

「はぁー・・・」

「ど、どうしたの？ 澪もお疲れさま」

「あ、あぁ」

「・・・？」

何故このタイミングで現れるかね。

今秋山さんと甘酸っぱい雰囲気だったんですよ!?

和さんが来なかったら

『平沢君、私・・・本当は、君のことが』

『いいんですよ秋山さん・・・今は僕の胸でその涙を止めてください』

とかなってたかもしれんのに・・・。

キモイ？いやいや、キモくない！これは男のロマンだ！

「和は生徒会で見周りか？大変だな」

「ええ、でも貴方達みたいに他の委員の人達が手伝ってくれてるから大丈夫よ」

「そうか、無理はするんじゃないぞ」

「そっちこそ。あと凜、溼に失礼なことしてないわよね？」

「・・・うーす」

失礼も何も、貴方が失礼なんですよおおおおお！

恋人同士（妄想の産物）の会話に隣から野暮入れるなんて、どういう神経してんですかあああああ！

「・・・もう」

そんな俺のふてくされた態度に和さんはご立腹のご様子。

こっちだっのご立腹じゃないけど落ち込んでるんです！千載一遇のチャンスだったのに・・・！

「唯と言い凜と言い、少しはしっかりしなさい」

いや貴方から見れば日本の人口の9割が墮落したニートに見えると

思いますよ、ハイ。

「それとちょっと滞りるから、一人で整理員の仕事やっておいてね」

「……は？」

m i s u

おい。

空気をぶち壊した挙句、俺から秋山さんを奪おうというのがこの眼鏡っ娘は!?

「え、ちょっと和。それは不味いんじゃないか。原則として二人じゃないと」

「いいのいいの、まだ忙しくないんだし。それにちょっと凜をしゃきいっとさせないと。ただでさえ変な趣味持ってるんだから、態度くらいはしっかりさせるべきなの」

グサ！

「このまま一生彼女が出来ない男になったら可哀そうでしょ？ 私なりの愛情表現よ」

グサグサ！

「少しは自覚を持って欲しいわ、これじゃあ女の子は誰も寄ってこ

ないわね」

グサグサグサアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

「……え、えっと、そういうわけだから平沢君……平沢君?」

「ハイ」

「……だ、大丈夫なのか?」

「ハイ」

「……の、和?」

「いつもこんな感じだから大丈夫よ、それじゃあ行きましょ」

その後俺の口からはエクトプラズムよろしく魂が半分程漏れ、脳本体に深刻なダメージが残った。

そして真鍋和の名前がブラックリスト入りした。

今まで憂以外誰も足を踏み込めなかった禁断の聖地、『ブラック偏差値75』に辿りつき、彼女は憂と並ぶ同率1位の快拳を成し遂げた。





平沢君、私・・・本当は、君のことが（後書き）

頑張れりんたん、きっと液晶の先には君の唇を受け止めてくれる人がいるよ！

液晶の味しかしないけどね！

**貴方と同じ空気を吸いたくないんですけど（前書き）**

今回キモオタ成分が強めとなっております。

冗談ではなく本当に強いので、苦手な方は注意してください。

貴方と同じ空気を吸いたくないんですけど

体育祭も終わり、1学期の大きなイベントも終わりを告げた。

今は平日の昼休み、体育祭の興奮冷めやらぬ中・・・というわけではなく、俺は平常運転に戻った。

昼休みと言えば俺は友人A達とキモオタクをやっているか、サッカー同好会の連中と運動場でじゃれあっているかのどっちかな訳だが。

今日はまあ、前者な訳である。

しかし話している内容は違うからな！

「体育祭終わった後って何か燃え尽き症候群にならね？」

「言えとる、つつか平沢は毎朝疲れ切った顔してるけどな」

「う・・・朝からお前らが想像出来ない死闘を演じて来てんだ！」

先週この高校の体育祭が行われたが、まあ言うまでも無く男子がやれる競技などたかが知れているので、大半は女子生徒達の活躍を眺める時間が続いた訳だ。

ふへへ・・・あの食い込むようなブルが最高なんですよ奥さん、あと張り付いた体操服で揺れる　　は、神が俺たちに与えた最後の希望つたね・・・。

「でもお前あんな足早かったんだな、知らなかった」

「ふ、伊達に妹とリアル鬼ごっこやってねえぞ！」

「なんじゃそりゃ」

俺は1500M走で1位、200M走で1位と、徒競走では好成績を残したからな。

普段の俺からじゃ想像出来ないあのスピードに驚いただろう！感動しただろう！崇め奉れこのキモオタ共め！そして俺に魔法　女のブルーレイをさっさと渡せ！

「まあ・・・俺が本気を出せばあんなモンだ」

「うわ、自身たっぷりに言いやがったよコイツ」

「悔しかったらお前も1位取って女子から黄色い声援を受けるんだな！」

「飛んでなかっただろお前！キモオタだし！」

「づぐッ・・・」

痛いところついてくるなコイツ・・・。

確かに1位は取ったんだけど、女子から黄色い声援は飛んで来るどころか、相変わらずキモオタと認識されているせいで何も言われなかつたんだよな！

嫌な記憶を思い出させるんじゃないやねえよ！

つづか最近中野さんとすらまともな会話ねえじゃん、というか1位取った時も彼女何も言ってくれなかつたし。

まあいいか、所詮キモオタの立ち位置なんざこんなものよ・・中野さんにはかつこいい爽やか系の男子がお似合いですよ、俺みたいなキモオタには出番ないですよ。

見てるだけで幸せだからいいの！負け惜しみじゃねーぞ！

「つづか今は終わったことよか中間だろ中間！目の前に迫って来るがお前ら大丈夫か」

「なめんな、ア二研の頭脳と呼ばれたこの俺を甘く見てもらっちゃ困る」

「エロネタ百科事典が頭脳とは、ア二研は早くも終了ですね」

「おいこら訂正しろ！」

そう、これからは地獄のテスト期間が開始される。

俺ははつきり言って勉強が大の苦手である、平沢家の頭脳を表せば

憂（天地雷鳴士）>>>>>>>>笑わせ士（凜）＝踊り子（唯）

こんなものだろう！

ちなみに数学がおそろしくやばい、どれくらいやばいのかと言うと猿の惑星が実は地球でしたって落ちを疑うくらいやばい点数、2度見どころか5度見するレベル。

そして物理はさらにその上をいく、こないのだ小テストで100点満点中15点を取ってしまった。

当然その数字を見た憂がサンダーフォースを詠唱、晩御飯が焦げたパンの耳だった。

俺は翌日空腹を訴え憂に学校を休ませてくれと必死に頼みこんだが、耳を引つ張られて断念、学校では腹の音で隣の席の女子を居眠りから起こして、先生の拳骨から彼女を見事救った。

「こないだの物理マジで俺死んだんだけど、お前らどうだった？」  
どうせコイツらも俺と同じレベルだろう・・・ふはは、類は友を呼ぶと言っからな。

「俺物理86点だったぜ？電気回路とか楽勝だろ！」

・・・は？

友人A、それは俺の聞き間違えだと思っていいいかね。

「なんだと！？裏切ったなA！」

すぐさまBが抗議の声を上げる、便乗して他の奴も叫ぶがAはふん、と澄ました顔でこちらを見やる。

何だそのこちらを見下した表情は・・・！キモオタ、じゃなかったア二研の頭脳（笑）のくせにい！

「俺はお前らとは此処の出来が違うんだぜえ？出直してこい！そして滞納してる部費をさっさと払いやがれ糞共がああああ！」

「うるせえー！てめえは英語10点だっただろ！単語しか出来てなかったペーパーをゴミ箱に押し込んでんの目撃してんだぞ！」

「なにいいい！？」

「あとてめえに部費払ったらそれで魔法少のブルーレイ買ったもりだろーが！てめえのコレクションのために払うつもりはねーよ！」

ぎゃあぎゃああと叫ぶ俺達を周りの女子や爽やか系イケメン男子は冷めた目で見つめる。

たぶん『貴方と同じ空気を吸いたくないんですけど』とか思ってたっしやるんだろっな！

まあそんなモノは百戦錬磨の俺たちには通用しない！今じゃ眼鏡かけてリュックサック背負ってアニメのポスター両手に担ぐなんて朝飯前だ！

「つつかお前魔 少女の最新持ってただろ！？まだ買うのかよアホか！」



「観賞用と保存用があるってことをためえら忘れてるな！？もしくはそれすら思いつかない程レベルが低いとでも！？ふはは、まずはハヒから出直してこい！」

「うるせー！俺だってニさん見てえんだよ！貸せよ！」

「誰が貴様の  
で汚れた手に触れさせると思つか！？俺のママさんが穢れるわあああ！」

下ネタ全開のアニ研、これが日常茶飯事だからクラスの皆さん本当すみませんねえ！頼むから汚物を見るような目を向けないで！気にしなくても視線は刺さるの！

まあもうどうしようもないくらい俺達はアニメが好きなんだし、これを止めることなんて不可能だな。

そろそろ二次元の女の子を実体化する技術が開発されてもいいと思うんだが、まだかね？

あ、もし成功したら最初の女の子は初音ミクさんかMegpoid  
でお願いします！是非！

貴方と同じ空気を吸いたくないんですけど（後書き）

今回はかなりキモオタ成分が強くなってしまいました、ア二研とりんたんが絡むと、

こんなおぼっかりになってしまいます。

相変わらず短髪でぱっつんぱっつんだね(前書き)

み、短い・・・!

しかし切るには此処しかなかったんです、ごめんなさい!

相変わらず短髪でぱっつんぱっつんだね

只今桜ヶ丘高校は中間テストの真っ最中、私平沢凜はシャーペンを回しながら物理の答案用紙と睨めっこ中です、はい。

『平沢、お前電気回路の基礎もわかんねーの？馬鹿じゃね？』

いかーん！幻聴が聞こえる！喋るはずのない答案用紙が俺に話しかけるわけがない！冷静になれ俺！

『うわ、また問題飛ばしたよコイツ。このまま最後まで飛ばすつもりか？』

・・・

『つつかお前中学からやり直せよ、お前みたいな馬鹿に汚される俺の身にもなってみ？まあお前馬鹿だからまっさらなままだろーけど』

こ、この野郎……！人が大人しくしてりゃあつけあがりやがっつてえ！

いいだろう、お前の自慢のその綺麗な顔を黒鉛で塗り潰してくれろわー！

結果は惨敗だった、答案用紙にやつあたりをした俺は、宣言通りにわからなかったところの四角を全て黒で塗りつぶした。オセロみたいになって綺麗だった。

まあそんな俺の様子を憂が見逃すわけもなく、雷を食らった俺は図書館にて居残り勉強をさせられちまったよ、ちくしょー。

明日は鬼門の数学だというのに、マジで明日息してないんじゃないかなるか……主に憂の制裁が原因で。

つつかもう7時か、図書館閉館の時間じゃん。

道具片付けて帰るか……。

俺は一人で帰り道をトボトボ歩く。

てか姉ちゃんも俺とほとんど変わらないオツムなのに、なんで憂はあんなにも姉ちゃんの点数には甘いのか……。

やはり顔か、あの涙目で訴える姉ちゃんを見たらもう幸せでいっぱいになれるもんな！

不細工はホント損するわ！

そついや姉ちゃんにチョコレート買って来いって言われてたっけ、コンビニにでも寄るか……。

学校を出て、じめじめした空間を歩く。

もう梅雨入ってるもんなあ……しんどい季節がまた始まるぜ。

去年は出来心から憂のスカートを傘でめくってやったんだよな！

そしたら噴火どころか太陽のプロミネンス級の爆発が起きて、口を効いてくれるとかのレベル通りこした状態だったっけ……。

奴隷と化した俺は家の雑務全てやらされて、数日後ミイラみたいになっただな……今年はそのような過ちはしないよう気をつけよう。

あ、ちなみにパンツは水色と白のストライプでした！

憂らしくてその一瞬だけ可愛く見えたね！その後のアイツは不動明王だったけど！生きた心地がしませんでした！

さてコンビニも見えてきたことだし、ガ ナチョコレートでも……

ん？

コンビニの前に誰か居て、こっちを凝視してるぞ。

「うわー、平沢じゃん、相変わらず短髪でぱっつんぱっつんだね」

……………げえ。

そこに居たのは、中学時代に俺が見事振られて、今は光桜高校に通っているa子。

なんでこんな時にこんなのに会った、苛めか・・・。

無視を決め込もうにも向こうは話し掛ける気満々みたいだし・・・は  
ああああああ。

相変わらず短髪でぱっつんぱっつんだね（後書き）

内容もこんななので、次はなるべく早めに更新したいと思います。

出来れば明日くらいに・・・予定は未定なのですが；



ちよ、ちよっと！お姉ちゃん！？（前書き）

そろそろラブコメが本格的にスタート！

あ、ちなみに前回の最後に出たa子さんはまたの機会に。

話した内容は、いづれ本編で！

ちょ、ちょっと！お姉ちゃん！？

「わ、わからん！分からんぞ憂！おそらくこれは高校1年のレベルを越えてしまっている！」

「お兄ちゃん、それって中学3年生のおさらいだよ？電気抵抗の公式は？」

「・・・」

「・・・」

「よし分かった、頼むから笑顔で物理の教科書の角をこちらに向けてないでくれ！」

くそー・・・憂の奴、ワンツーマンで教えてやるとか言って、その餌にホイホイ釣られてしまった俺がマジ馬鹿だった。

結局俺は中間テストで物理は赤点を取ってしまい、補修の際に再テストが行われることになった。

ここで点数が取れなかったら『青点』・・・1学期のうちに青点を2つ取ったら留年が確定してしまう！

それだけは嫌だ！と憂に泣きついてみたんだけど・・・。

「だから、並列と直列で違うって何度も言ってるでしょ！」

「う、ごめんなさい！い、痛い！止めて憂ちゃん！唯でさえアホで脳細胞が足りないのに、これ以上叩かれたらアホ超えちゃう！」

くっそー、高校入ってからアニメ漬けの毎日を送っていたせいか全く分からんぞ！

アニ研の奴らも俺と同じように補修を食らっている時はほっとしたが、同じ家に月とすっぽんレベルの違いを持つ化物がいることを忘れてたぜ・・・。

つつか憂90点って何だ、少しでいいからその点数分ける。

そついやティーチャに『平沢凜23点！補修だ！』と言われた時中野さんから侮蔑の籠ったような視線向けられてたっけ・・・。

べ、別に悲しくなんかないやい！

そ、それに・・・ああいう視線向けられるのも、その・・・中々良かったりするんだ！

ジト目で見つめられるだけで・・・最近視線すら向けてくれなかった俺からすれば嬉しいんです！

決して我々の業界ではご褒美です的なモノじゃないからな！

「もう、本当にやる気あるの？お兄ちゃん、このままだと1年生で留年しちゃうかもしれないのに・・・」

「ぐっ・・・」

そう言われると黙りこむしかないわ・・・。

いや落ち付け平沢凜、あのアホな平沢唯だつて無事2年に進級出来たんだ。

いくらアニ研所属のキモオタだからと言って、姉ちゃんよりアホと  
いうことはないはずだ！

「分かってる！やってやるよおらああああ！」

「お兄ちゃん・・・」

そう言つて俺は鉛筆を握り物理の答案用紙と睨めっこを開始する！

が、しかし。

「お兄ちゃん、かれこれ1分くらい手が動いてないけど」

「・・・ふう、少し休憩しようか憂」

「・・・」

「ごめんなさいマジでごめんなさい！ちょ！百科事典取り出したよこの鬼畜妹は！」

やばい、憂の目が据わっている！

これは本気だ、このままでは俺の脳細胞は憂の次の一撃で死滅してしまう！

「憂！聴いてくれ！いや聴いてください！これにはちゃんとした理由があるんですううううう！」

「な、に？」

「ヤル気はあるんです！あるんですけど脳細胞がついていけないんです！」

だって分からんものは仕方ないだろ！それくらい分かるよね！？

「それは勉強してないお兄ちゃんが悪いの！最近パソコンばかりしてるからこんなものになっちゃったんだよ！」

こ、こんなのってひでえなおい！

もはや俺は人間じゃなくてモノ扱いか！？

「・・・本当に、分からないの！？」

「イエス！分からないです！」

「やっぱり、パソコンを没収する以外に道は無いと思う…この百科事典の角を…！」

げえええええええ！？

やべええええええええ！？

憂がやばい、憂がマジで超本気モードだ！

このままだと俺の制止を無視して強行作戦に出るに違いない、そして数秒後俺のノートパソコンを粉々に…！

クさんやMegpidさんが俺に向かって泣き叫んでいるのが幻視出来る！

俺は彼女達を守るため、立ち上がる

！

そんな中でガチャリとドアが開き、平沢唯が平沢凜の部屋に入室した。

「あ、憂。頼まれた写真持ってきたよ」

般若の形相でパソコンを絶命させようとしている憂に、決死の表情でそれを止めようとしている俺、二人の世界に何のためらいもなく入って来るあたり流石姉ちゃんだぜ！

しかもこれは俺にとって神の助け！流石に姉ちゃんの前じゃパソコンぶっ壊すなんざ出来ないよねえ憂ちゃん！

「写真・・・？」

身に覚えがない、と言った表情を姉ちゃんに向ける憂。

流石憂だ、平沢家の癌細胞への興味などあつという間に薄れて、今は女神平沢唯しか視界に入っていない様子・・・。

「え、アレだよ。ほら、りんたんが200M走で1位でゴールテープを切った時の・・・」

「ちょ、ちょっと！お姉ちゃん!？」

ん？

俺が200M走で1位の写真・・・？

確か、体育祭の翌日姉ちゃんが夕飯で

『ほらりんたん！かっこよく映ってるよ!』

『流石姉ちゃんだ！俺のかっこよさをよく分かってらっしゃる!』

『普段のお兄ちゃんを知っていると、全くなかっことよくなんかないです！お姉ちゃんもお兄ちゃんも食事中だよ!』

『しょんぼり』

みたいな会話が繰り返されていたじゃないか・・・。



もしや・・・もしや・・・これは。

「う、憂ちゃん・・・もしかして」

「な、何？お兄ちゃん」

「もしかして・・・」

「・・・だって」

「ついにビリッピンに目覚めたのか!?!」

「・・・ほっ」

その後、とある科学の 電磁砲よろしく憂のジゴスパークが炸裂し、  
散々キモイ変態オタクと罵られた拳句、晩御飯は焦げた肉だった。

食べたらマジで癌になるんじゃないかと思うくらい焦げ具合に、  
怒りと憎しみの向かった先が俺じゃなくて良かったと胸を撫で下ろ  
した。

牛肉よ・・・安らかに眠れ・・・。

ちよ、ちよっと！お姉ちゃん！？（後書き）

ちなみにアルファベットで表記される人物達のことですが。

ア二研の連中は

部長（ア二研の頭脳）＝A

それ以外B～Z

桜が丘の女子生徒は

振られた子＝A子

体育祭で秋山さんの前に椅子に座っていた子＝B子

それ以外＝C～Z

りんたんのトラウマ女子

a子～z子

です。

高校時代で出会った女の子は大文字、中学時代に出会った女の子は小文字です。

・・・ありがとう（前書き）

すみません！まずは謝らせてください！

3週間近く開けてしまうとは・・・！難産でした；

就活のせいだと言いつい訳にいたくはないんですが、本当にすみません  
でした。

今後はせめて2週間に1回は更新出来るようにしたいと思っています！

内容的には3000字超えてます、まさかの平沢家で3000字超え  
とは・・・。

・・・ありがとう

「えー、それでは今日のHRは終了です。皆さん気をつけて帰ってください」

終わった・・・長い一日が。

今日は7月の頭のある日、とにかく気温の上昇が半端なくて昼間は36度いったんじゃなからうかね。

俺はそんな中、憂の準備してくれた「ピーマンの炒め弁当」しか食ってない、要するに何も食べてないのと同じなのだ！

憂の野郎・・・そこまでして俺にピーマン食わせたいのか！あんなモノは人間の食べるものではない！

「あー、それと平沢君と中野さんは物理と英語の先生からこのプリントを預かってるから、それぞれ終わらせてから帰るように！」

なん・・・だと。

そう言えば今日の物理の時間、宿題を忘れてえらく怒られたんだっ  
た。

周りは皆帰宅の準備を始め、それぞれ席を立つ。

「平沢頑張れよ、まあ青点免れただけでもいいじゃねーか」

「そうそう、今日は家帰って電波 女でも見るか」

そう言っただけでア二研の連中は何の躊躇いもなく帰っていきやがる・・・！

こ、コイツら・・・友達と一緒に帰るよりもアニメのほうが重要な  
か！そんなにアニメ好きか！

ていうか中野さんも英語の宿題忘れて怒られてたっけ、俺と違って  
サンダガじゃなくてプチサンダークラスだったけど、補修はやるの  
か。

数分後、皆はそそくさと退散していき、ア二研の連中も今日は電波  
女のアニメがあるので活動は休止、結局クラスに残ったのは俺と  
中野さんだけとなり・・・。

俺の机の斜め前で中野さんは一所懸命に英語の問題集を解いている、

対して俺は鉛筆を回しながらそんな中野さんの後姿をガン見中。

ああ・・久々に中野さんをガン見する機会に恵まれたよ、流石に今日はいつも中野さんの露払いをしている鈴木さんも憂も帰っちゃったし、心おきなく女神中野梓を堪能することが出来る！

フヒヒ、数週間我慢しただけあって今日の俺は誰にも止められねぞぞ！

相変わらず揺れるツインテールがとってもキュートです、どんな顔して問題解いてるんだろう。

むむーとか、分からなくて可愛らしい表情してるんじゃない！？

うひゃあああああ！

イメージ上での中野さんが可愛すぎて死にそう！リアルの中野さんも可愛すぎて死ぬるけど、あの顔を向けてくれるのはイメージ上だけだからね！

最近見ることも話すことも出来なかっただけに中野成分が不足しているな、十分に補充しておこう。

まあ・・ホントは話すことが出来たら、それは一番最高なんだけど流石に此处最近汚物を見るような視線で見つめられて、陰口の叩かれ度が半端ない頻度だったしそれは無理か。

む、いかんいかん・・そういうやってる内に17時じゃないか、18時まで家に帰らないと憂がサンダーフォースを詠唱しちゃう。

今日はパシリも頼まれてるし、17時30分までに学校出ないと不味いなあ・・・。

でも確かこの学校の下校完了時刻は帰宅部だと18時30分だったよな、それまでに職員室に行かなかつたら物理のティーチャがやってくるよとか言ってたけど、逆に言えば終わらなければそれまで帰れないわけで。

またもや明日の弁当がピーマンになりかねん、それだけは絶対に回避しなければならぬ！

俺は中野さんをもっと見たい欲望を押さえつけて物理の答案用紙と決闘を開始する。

ふはは、中間テストを乗り越えた俺ならば物理の小テストなんざ楽勝ですよ・・・。

が、しかし。

世の中そんなに甘くはないのです、中間テストは確かにクリアしたかもしれない、だが今回の小テストはその範囲を軽く超えていたのだ！



「か、滑車・・・！？力の大きさとか分かるわけが・・・」

そう、新しい範囲になったならば平沢凜は全くの無力！

そしてその気持ちの悪い呻き声が一人しかいないクラスに響き渡る！

「・・・」

中野さんの肩がびくつと震えた、でも振り返ることはなくそのままカリカリと勉強を続けている。

・・・。

「気まずい！気まずすぎるぞおおおおお！」

「つつか中野さん、入学した頃の貴方は何処へ行ってしまわれたの・・・。」

あの時は、『平沢君と一緒に待ってるから』とか、『一緒に軽音部行こう？』とか、そりゃあもう最高の音声を俺に届けてくれていたのに・・・。

今じゃ視線を向けてくれることも、話してくれることも皆無・・・。

この差！何なの！苛めか！？ていつか鈴木さんマジで余計なこと吹きこむんじゃないよ！

思い出したら今より断然数カ月前のほうがいいに決まってるじゃない！体育祭で1位とつても何も言ってくれないとか正直心の底から落ち込んだよ！分からねーよな！

問題は分からない、このままだと憂に怒られる、拳句中野さんの冷たい態度のトリプルパンチで俺のテンションは真ッ逆さま。

問題を解く意欲など全く起こらず、時間だけがだらだらと過ぎ・・・その間も中野さんは職員室とクラスを行ったり来たり。

日は暮れ始め、周りの教室からも生徒達の声が消える。

グラウンドで走り回っていた部活動生徒がようやく練習も終わり、クールダウンの体操を始めていた頃によくやく俺は物理の小テストをやり終えたのだった。

時刻は18時15分、携帯を見ると憂から怒りのメールが届いており、間違いなく明日もピーマン弁当決定か・・・。

憂のお玉攻撃をかわすためにヘルメット被つとかないと・・・。

おや？

中野さん、まだカリカリやってるぞ。

おかしい、中野さんは確かクラスで最高クラスの頭腦の持ち主の筈だ、英語の宿題など瞬殺だろう。

俺はちょっと気になって体を乗り出して、横から中野さんを見てみるよ。

「・・・！」

どうやら彼女は英語が大の苦手だったようである。

書いては消して書いては消しての繰り返しで、用紙はくしゃくしゃに曲がっており、黒ずんでいる。

しかもよくよく見れば今日の宿題とは違う英作文のプリントを渡されておき、確かにこれは解くのに時間がかかりそうだ。

教師も優等生の中野さんが宿題を忘れたことに腹を立ててこんな意地悪でもやったのか？

そうこう俺が思っている内にも、中野さんはこちらには目もくれず鉛筆と消しゴムをせっせと動かしている。

しかしこれでは終わりそうにも無い、流石に汚物扱いされてシカトされ続けてきた俺でも、これでは思うことがあるわけで。

ふむ・・・。

「中野さん」

まあ、いつものようにシカトされるならばそれはそれでいい。

でもまあ、暗くなる前に帰って貰わないと、中野さんが暴徒に襲われる可能性だってあるしな！それだけは絶対に避けなければならん！

シカトされたなら、『頑張つて』の一言だけでいいか。

「そこさ、物体の所有者に呼応してwhoseだよ。whoだと持ち主がわけわからん状態になるからさ」

行き詰っていた英作文に関してちょこつとアドバイス。

さて。

「え・・ほ、ホント？whoとwhoseの違いが私ちょっと分からなくて」

「ッ!？」

は、反応したぞ!？」

中野さんが！俺に向かって！その美しいエンジェルボイスを！

うひゃあああああああああ！

「あ、あつと、えつと。ほら、此処は・・・」

「こ、此処が違うんだ。だから先生に何回持っていても突き返されちゃったんだ」

「だ、だと思っ」

「あ・・・」

「「・・・」」

問題を解き終わった瞬間、再び空間を気まずい沈黙の空気が支配し始める。

まあそうなるわな、二人がそれぞれの目標を見失ったならばこうなっちゃうわけで。

「ま、まあ・・・終わったなら良かった。んじゃあ俺先帰っから」

ならばさっさと退散するに限る、流石に一緒に帰ろうとか言える程身分をわきまえない人間じゃないぜ。

鞆を持って、そのまま無言で去ろうとした俺の背中に・・・。

「ひ、平沢君」

数カ月ぶりに、中野さんが俺の苗字を呼んでくれた。

平沢家の中で唯一中野さんに名前と呼ばれない人間、それが平沢凜。

「その・・・ありがとう」

「・・・なんの、いいっていいって」

俺は振り返って、キモオタフェイスに気味の悪い笑みを浮かべた・・・が。

中野さんが、そんな俺の気持ち悪さを浄化するような微笑みを浮かべていたもんだから。

「それじゃー!」

逃げ帰るしかないでしょおおおおおおお!





・・・ありがとう（後書き）

今回は中野さんとりんたんのお話でした。

う、りんたんや打ち込むのが久々な気がしました・・・。

私が更新しない間にも皆さんのアクセスやお気に入り件数が増え、  
今では600ptを超えています！

とても嬉しいと思う一方で、頑張らなければならないと思いました。

今後とも平沢家のお兄ちゃんをよろしくお願いします。

ねっ、りんたん！（前書き）

大変お待たせ致しました！

平沢家の更新です！

また三週間近く空いてしまって申し訳ありません。

ねっ、りんたん！

私、平沢凜は只今姉平沢唯と買い物真っ最中であります。

向かった先は俗に言うファッション店、まあ服屋さんです！

何故こうなったのかと言うと、姉ちゃんが夏に向けて新しい服が欲しいと言ったからなんだが・・・。

どうして一緒にいるのが憂じゃなくてキモオタの弟である俺なのかって？

ふ・・・それはまあ、以下を参照して欲しい。

とあるジメジメした梅雨も終わりを告げそうな蒸し暑い六月末の平沢家にて事件が起こった。

今日は日曜日、姉ちゃんの軽音部の活動も俺のキモオタ活動も無く、憂は家の掃除をこなして平沢三兄弟が全員集合していた。

昼ごはんを食べて幸せを噛み締めていた俺に、憂と姉ちゃんの会話が耳に入る。

「お姉ちゃんお買い物に行くの？」

「そうだよ。そろそろ夏だもん！夏物夏物！」

相変わらず日だまりのような笑みを零す姉ちゃん、今日はそれが憂に向けられている。

う、羨ましくなんてないやい・・・なんて言つと思つたか！？羨ましいに決まつてるだろーが！

畜生が、早く姉ちゃんこつち向いて！そう、あと20度くらい！ああ！おいしい！

「今日はちよつと市街地まで行こうと思つてるんだ」

「そうなんだ・・・じゃ、じゃあ私も一緒に行つていいかな」

「憂も何か買いたいものあるの？」

「そういうわけじゃないんだけど、お姉ちゃんだけだとまた変なTシャツ買いかねないじゃない」

「む、結構あのTシャツ可愛いと思うんだけどなあ。どう？りんたん」

あ、姉ちゃんこつち向いた！

俺は光の速さで反応する。

「あの蛙のTシャツ？いいんじゃない、俺は好きだし」

「ほら憂。りんたんも可愛いって言ってるよ」

「それはお兄ちゃんのが感覚が一般人とは著しくかけ離れているだけです！」

「ぐは」

おいおい、相変わらず厳しい一言を投げかけてくるな我が妹は。

しかも憂の奴、俺と二人きりでこの家に居たくないから姉ちゃんと一緒に出かけたいだけだろーが！

どうせ憂と俺が二人きりになったら、俺が憂の下僕として家の掃除を散々やらされた挙句に、その腹いせとしてR指定の子供に悪影響を与えるゲームの如何わしい声を大音量で流すだけだもんな！

繰り返しているうちに、おかげで近所からはすっかりエゲオタクだと認識されたわ！そして何故か憂も一緒にエゲやってるのかおばさんに言われたよ！ありえねー！

「うーん、じゃあ今日はりんたんと一緒に買い物に行くよ！」

「え」

「は」

なん・・・だと・・・。

今、我が姉平沢唯様は何と言われたか？

リピートアフターミー。

『じゃあ今日はりんたんと一緒に買い物に行くよ！』

ハイ！声を揃えて！よく言えました！

よし、どつという風の吹きまわしか、はたまた姉ちゃんの気まぐれなのか一緒に買い物にイケるとかいうすんばらしい展開になりそうだぞ！

しかも天敵憂を押しつけて姉ちゃんの隣をゲット出来そうなんですけど！

ひゃっはあああああ！

「ど、どうして？」

「憂が私とりんたんのセンスを疑ってるから、二人のセンスがお天道様もびつくりするくらい良いつてことを証明します！」

ピシッと何故か敬礼ポーズを取る姉ちゃん、んなことはどうでもいいけど一緒に買い物とかマジ天国じゃん！

二人きりで出かけるなんて此処数カ月無かった・・・いや、高校に入学してからは皆無だったもんな！

やべえ、どんな服で行こう。

これって一種のデートじゃね？いや姉弟だからデートにはなんないんでけどねえええええ！

「ねっ、りんたん！」

「もちろん！憂は大人しくお留守番しといてな」

「・・・」



憂の表情が曇るが、俺はそれと比べて気持ち悪い笑みが満開だぜ！  
ふひひ、姉ちゃんと二人きりで感じられる幸せ指数は、憂と二人きりでお留守番する幸せ指数の万倍高いのだ！

俺が断る理由なんてない！いくら憂が怖い目でこっちを見つめていようとな！

「お、お兄ちゃんと一緒に行くともた変な服買っちゃうよ！」

「だから、りんたんと二人で行って私達のセンスを見せてあげるんだよ〜」

「それが心配だっけって言うてるのに・・・」

そこまで信用出来ないのか憂。

まあ、ぶつちやげ俺と姉ちゃんが服買いに行くとき々と世紀末になるからな。

姉ちゃんのタンスの奥深くには、去年俺が姉ちゃんと一緒に買い物に行った際に買ったメイド服やチャイナドレスらしきものが眠っている。

間違いなく俺の趣味で購入されたものであり、それを着た姉ちゃんを見た俺は鼻血が出た、出血多量で天国が見えました。

そしてそれが発覚した後、憂の灼熱の息吹で地獄が見えました。

それらは文字通り冥土へと送られ、あの一件以来一度も太陽の光を浴びていない・・・。

憂はまた前回のようになるのではないかと疑っているわけだが。

「大丈夫だって憂。ちゃんとしたの買ってきてくるって」

「ホント・・・？なら、いいけど」

ふひひ・・・。

馬鹿め。

買わないが・・

試着させてカメラで写真取るのは自由だもんなあああああ！

ねっ、りんたん！（後書き）

りんたんと唯で買い物です。

さていったいどのような展開になっていくのか！？

そんなに先週のメイド服が嫌だったのか！？（前書き）

平沢家の更新です。

まさか一週間以内に更新出来るとは！

そんなに先週のメイド服が嫌だったのか！？

「うん、りんたんやっぱコレ太ももの辺りがスースーするよお」

「も、問題ないと思います」

「そおかな？それにすっごい足出しちゃってるけど、公衆の風俗が何かには違反しないの？」

「大丈夫です！断固としてそんな公衆の風俗は認めない！」

只今俺と姉ちゃんは買い物真っ最中、そして俺は姉ちゃんにチャイナドレスを着せることに成功し、今その美しいおみ足を拝見させて頂いております！

ぐは、鼻血出るマジで鼻血出る誰かティッシュ持ってきて！箱ごと！

既に俺は姉ちゃんにメイド服とゴスロリ衣装は試着させ、バツチリその姿は携帯及び家から持ち出したデジタルカメラに収めている。

ゴスロリは新たな試みだったが・・・良い！実に良かった・・・。

ふ・・・ア二研の連中にこの写真見せて焼き増しすれば、一枚5000円は固いな。

そして今はチャイナドレス、今日のところはこれくらいにしておこう。

あんまり色々着せちゃうと姉ちゃん可哀そうだし、疲れるし。

「それにコレ去年買ったのとそっくりだよ、また憂にセンスを疑われちゃうかも」

「む、確かにそれは言えるなあ。んじゃあ、着替えて着替えて」「はい」

数分後姉ちゃんがチャイナドレスを店員に渡した。

ふ・・・今回のコスチュームは全て俺が美味しく頂きました、憂の奴・  
ごまあ！

まあその後はちゃんと一般人から見てもおかしくない服を試着しながら、憂に『可愛い』と言われるであろうものを探している。

「ん〜、ファッション雑誌とか見るとこういうのがいいのかな？」

「どれどれ・・・む、確かにこれは姉ちゃんにあいそう」

雑誌に目を通し、店員の意見を聴きながら悪戦苦闘を続ける。

如何せん二人ともファッションセンスとやらが皆無なもので、いったいどういう服装が夏物として可愛いのかよくわからない。

特に俺は男ということもあって、尚更わからんのだが・・・キモオタ目線だと可愛いのは分かるんだけど。

そして買い物を開始して30分程経った時、転機が訪れた。

「あれ、唯じゃん。お、凜もいるのか！」

「りつちゃん！」

店内に設置してあったベンチで休憩を取っていた俺と姉ちゃんに声をかけてきたのは、桜が丘高校2年で軽音楽部部长の田井中律さん、通称デコさん。

「律さん・・・てことは」

デコさんがいるということは、もしか・・・。



俺の本能が告げている！彼女もいるはずであると！

「唯も来てたのか・・・そ、それに・・・平沢君も」

物陰から遠慮がちに現れたのは俺の美女！女神！救いの道！イエス・キリスト！秋山澪！

っしやあああああああああああ！

秋山さんきたあああああ！

俺は飛び上がって全身で表したい喜びを何とか抑えつけながら、なるべくキモオタフェイスにならないように頑張る！

「こんにちは、秋山さん」

自然と言えたよ！やったね凜！

やばい、やっぱりもう秋山さん可愛すぎて死にそう、萌え死ぬ誰かどうにかして！

振られたけど、こつも自然に彼女から声をかけてくれるってことは、もう1回くらいチャンスあるって考えちゃっていいんですか！？

「りっちゃん達も夏物買いにきたの〜？」

「私のじゃなくて主に澪のだな。澪の奴、私がいないと絶対地味なの買っちゃうし」

いやいやいや、何を言いますかデコの方！

今この場にいる秋山さんの服装！もう素晴らしいの一言じゃないですか！その格好で秋葉原言ったら写真取られちゃいますよ写真！ちよつと時代が古いかもしれんけど！

「律、私の分は私が買うから、自分で買ったのは自分で着るように！」

「ええ！？せ、せつかく溼のために張り切ってきたのに・・・そんなに先週のメイド服が嫌だったのか！？」

「当たり前だ！あ、あんなもの人前で着れるか！」

秋山さんのメイド服だと。

どーいうことだ！

デコの方、どうしてその現場に俺を呼ばなかった！写真はちゃんと撮ってるんだろ？1枚5000円で買うから！

「ちえー・・・しょうがない、じゃあ唯をコーデイネイトしてやる！」

「り、りっちゃん？私はりんたんとー」

「いいからいいから！どうせ凜は男だしセンスないだろ！此処は私が一肌脱いでやるから！」

とか言いながら姉ちゃんとデコさんは彼方へと消えて行く・・・哀れ姉ちゃん、デコさんの思考回路何か俺と近いからまたメイド服やら

チャイナドレス試着するんだろうな。

まあ、あれは何度見てもいいものだから俺は一向に構わん！

「行っちゃいましたね・・・」

「あ、ああ・・・。えっと・・・」

そしてその場に残されたのは俺と秋山さん、体育祭が終わった後秋山さんとは一度も会う機会は無かったが、次会ったその時がこうやって二人きりとは。

ふひひ・・・こ、これはマジでお近づきになるチャンスかもしれん。

今回はかりは邪魔者であるのどっち（真鍋和）も湧いてこないだろう、絶対に成功させたるでええええええ！

平沢君は普段は何をしてるんだ？（前書き）

お待たせしました、平沢家の更新です！

今回は題名から分かる通りの内容です。

平沢君は普段は何をしてるんだ？

今俺の目の前には秋山澍さんが佇んでいる。

例えば、俺の姉平沢唯を『砂漠のオアシス』としよう。

中野梓は『女神』であり、あの眉が特徴的なお嬢様は『お姫様』と定義出来る。

ならば、秋山澍は？

秋山澍は何だと言うのか。

決まっている、彼女は『神聖なる巫女』以外無いじゃないか！

ごめんなさい何も思いつかなかったんですホントは女神様とか言おうと思ったら中野さんと被っていたんですボキャブラリーが圧倒的に足りなくてごめんなさい！

だが、そんな巫女様を目の前にして困ったことがある。

それは会話をしようにも、俺と秋山さんを繋ぐであろう共通の話題が皆無なことだ！

盛り上がるうにも何も、俺と秋山さんを繋いでいる接点は姉ちゃんと軽音部のことなのだが、姉ちゃんネタはこないだ話しちゃったし、軽音部ネタは俺が軽音部に在籍していない、さらに音楽について全く詳しくないからどうしようもないのだ！

マジで弱りました、これがキモオタの宿命なのか・・・綺麗な女の子とは喋ることすら許されないのが世界の理か・・・

そして案の定体育祭の時と同様に沈黙、秋山さんこないだみたいに180度別方向向かないけど握った拳をぶるぶるさせてるうつつうつつう。

あれか、俺と居るのはそんなに苦痛なんすか！本当は姉ちゃんやデコさんと一緒に買い物したかったんですね！分かってるけど自覚したら更なるダメージが！

「あ、あのさ。平沢君は普段は何をしてるんだ？」

「へ？」

い、いかん。

話しかけられるなんて思っても居なかつた分変な声が・・・。

今俺と秋山さんはベンチに座っているが、互いの距離は1メートル50cm程あけている、つまりかなりの距離がある。

実際の心の距離はそれの100倍はあるだろうがな！悲しくなんてないやい！これが現実じゃあああああ！

「えーと、普段はまあ・・・同好会の活動に参加してて、土日は姉ちゃんや憂と戯れてます」

真実だ、ウソは言っていないぞ。

『何の』同好会かは言っていないだけ！

「ああ、サッカーの？」

「え、ええ・・・まあ。運動場の端っこのほうで細々とボール蹴ってるやつです」

「遅くまで大変だよな、私達が帰る頃までやってるだろう？」

「皆あのボールが大好きなんですよ、それに同好会で顧問にあってこーだ指図されませんし、自主性に任せるとアホみたいにする奴らですから」

俺も一応週3回の練習にはちゃんと参加してる、ア二研との折り合いがつかなくて偶にア二研の頭脳（笑）から怒られるが。

まあ俺はミさん達 サッカー>アニメだし。

サッカー同好会とアニ研どっちが大事？と問われれば、たぶんサッカーで言うだろうな。

下手だけど！見るのが好きだから問題ない！

「君は・・・その、上手い方なのか？」

・・・此処は建前上上手いとか言うべきなのか。

いや待て、どうせ俺が此処で上手いとか言っても、放課後あの脳筋共に、見事に抜かれてる姿見られたら意味ねえじゃん！

いずれ自爆するならば、今自爆しとくか・・・。

「いえ・・・下手です、センスないです」

実際は中の下くらいだけどね！

「で、でも、サッカーは好きなんだろう？」

「そりゃー、まあ。身体動かすのは基本好きですし」

「サッカーの、どういう所が好きなんだ？」

ふむ・・・サッカーのどういう所が好き、か。

考えてみれば言われるまでそんなこと誰かに言ったことなかったなあ。



というか自分が何でサッカーやるのが好きなのかよく分からんし。

「なんとなく・・・好き？」

「な、なんとなく？」

う、しまった。

いやいやこの解答は駄目だろう平沢凜よ、どういうリアクション取ればいいかわからんって顔してるぞ秋山さん！

でもホントに何でサッカー好きなのかは俺も分からんだ！

ただ練習終わった後、リア充達と一緒に帰って騒ぐのは好きだぞ。

リア充の中で一人だけキモオタというのは凄く浮いているがな！道中で『俺彼女待ってるから先行くわ』とか言う輩が居ると、キモオタフェイスにキモオタスマイル満開にして『死ぬ』って言ってるよ！

その後そいつから『僻み乙』って視線が飛んでくるけどな！こっちが死にたくなるわ！

「ええーと、やっぱり見てると面白いからじゃないかと思ってます」

「見てると？」

ぶ、無難な答だが・・・実際見てると楽しい　じゃあやってみる　何か楽しい

になっちまった訳だし。

実際高校入るまでサッカー見る専門の輩だったもんなあ。

「何時ゴールするのか、どんな凄いプレーを披露してくれるのか、とか期待していると自然とわくわくしてくるものなんですよ。基本的に見るのが大好きで・・・」

「そうなんだ」

「でも見てるうちにやりたいつて思って今は同好会やってるわけです・・・何て言うか、そのわくわくの中の一員になりたいんです」

ありゃ。

何か今まで考えたことも無いこと言っちゃったけど・・・

こうやって熟考してみれば、今言った通りなのかもしれない。

ワクワクドキドキがサッカーの醍醐味で、そこから生まれる感動が最高なのは見てる時によく思ってた。

それを実践で感じてみたいから、今こうやって同好会で汗水たらしてあんなことやってるのか。

意外にシンプルなもんだなー。



平沢君は普段は何をしてるんだ？（後書き）

珍しく落ち着いた内容でした。

というかりんさんの自己啓発のような内容です。

まだまだ秋山さんとの会話は続きますよ！

感想待ってます！

何やってるんだろっ私!?

秋山さんとの会話が順調だ、それはもうこれが幻想なんじゃないかって思う程に順調過ぎて自分が自分じゃないみたい。

ふへへ、何か自然と自分スポーツマンなんですよ!ってアピール出来てない?

これは秋山さんに爽やかイケメン系男子ってことで覚えられるのかも!?

態度からしてまだ中野さんから俺のキモオタ情報を得ていないみたいだし、チャンスはある・・・!

「え、と。秋山さんは何がきっかけで軽音部に?」

今度はこっちが尋ねるばんだぜ、ここで更に会話が弾めばもう俺の脳内は幸せ回路がショートしちゃうっつうっつう。

「そ、そうだな。最初は仕方なしでさ」

「仕方なし・・・?」

「あ、ああ。律が軽音部作りたい!やりたい!って駄々捏ねるから。」

でも今は、こうやって唯や梓達と軽音活動が出来て凄く楽しいよ」

そう言えば姉ちゃんも最初凄く軽い気持ちで軽音部入ってたなあ。

カスタネットやるんだよ！とか自信満々に言った翌日にやっぱり止めるとか言ってたし。

ドタバタ感が半端ない部活動って感じたけど、今はこうやってちゃんと活動してるあたりあのデコさんもしっかりしてるんだなあ。

実はしっかり者の秋山さんや中野さんあたりが仕切ってる、姉ちゃんやデコさん、まゆげさんはそれにイエスマンってことも考えられるけど。

「夏は合宿やって、秋には文化祭でライブもするし、もう止めようにも止められないな」

ああ、そう言えばそうだった。

文化祭のライブに行くって言ったら憂から

『お兄ちゃんが行くとお姉ちゃんが上手に演奏出来なくなる原因になるからダメです！』

とおしかりを受けて、結局その日は俺は家で留守番、憂は生で姉ちゃんや軽音部の方々のライブを見た。

何この格差社会、別に去年の桜ヶ丘男子禁制って訳じゃなかっただろ！どうして俺だけ除け者にするんだちくしょーめ！

憂の奴め、今回は、はぶってやったがこれだけじゃ何だか気が済まないぞ。

次は姉ちゃんと一緒に旅行行くから憂留守番しとけざまあああああ！

とか面と向かって言っただけでやりたくなってきた。

その後俺の顔が原型保ってるかどうかわかんないけど・・・。

あ、キモオタフェイスだからいつそのことそれで整形してワンちゃん狙ってみるのもありなのかな・・・。

「平沢君は軽音には興味はないのか？」

「あ、俺すか？」

「ああ」

軽音か。

音楽事態は初音　クさんやらMeg　oidさんをめっちゃくちゃ聴いてるから好きだなあ。

あ、もちろん彼女達が可愛いのもありますぐへへ。

2次元って言うなよ！？アイドルだから一次元だろうが二次元だろうが三次元だろうが関係ねー！

「聴く専門ですよ、軽音を弾いたりするのは全然・・・」

「そ、そうなのか・・・」

え、ちよっと何ですかその残念っぷり！

今そんなダメなこと言った！？

日経平均株価が1万円台割ったようなショック見せないでください！

「で、でも偶に姉ちゃんと一緒にギ　太をいじったりはしてますよ」

主に磨く作業を！

流石の姉ちゃんも弾かせてくれないもんなあ、軽音部入ったらいいよとか言ってたけど憂のサンダーフォースが恐ろしくて恐ろしくて・・・。

「が、楽器そのものは好きなのか？」

「ええ、これでも幼少期はピアノやってて指だけは自慢出来る細さです」

あ、そういや中野さんの時もピアノやってるよーとか言ったら指見せてって言ってそこから手を取ってもらって・・・

うひゃああああああああ。

思いだしたら顔から湯気出てきたよ湯気！

あんなこと今の関係じゃ2度とないだろうなあ、あの時もうちよっ



と中野さんの手の感触確かめてれば良かったわ・・・。

「じゃあむぎと一緒にだな、平沢君みたいにピアノをやってた子が今キーボードやってるんだ」

「ほえー、そうなんですか」

「これが凄く上手いんだ。ひ、平沢君もモノは試しにやってみるといい」

なん・・・だと。

これはもしや。

秋山さんから、軽音部に入ってキーボードやってみないかっていうお誘いを受けているのか!?

まさかそんな!?

生まれてこの方15年間キモオタフェイスで女性から声をかけられた回数も数える程、むしろ振られた回数とタメを張る程の回数この俺が!

こんな美少女からお誘いを受けているだとおおお!?

「それにほら、こんな綺麗な指をしているんだからそのまま捨てちゃうのはもったいないと思う」

「へ・・・?」



や、やべえ・・・なにコレ・・・秋山さんのエンジェルハンドの感触。

温かくて、柔らかくて、何かわけわかんないけど今になって大量の手汗が・・・！

「い、いえ・・・その」

「と、とにかく綺麗な指だからそのままだともったいないってことを言いたかったんだッ」

「は、はひ・・・ありがとうございます」

顔が桜の花びらのようにピンク色に好調した秋山さんと、手汗が凄まじく目が点になっている俺。

互いにその後は上の空の状態で、姉ちゃんがデコさんに連行されて戻ってくるまで開いた口が塞がらなかった。

何やってるんだろっ私!?(後書き)

超展開です、りんたん良かったね!

途中で倒れたら、困るから（前書き）

りんたんのプロフを、かなり前に削除しました。

後になってから、プロフを何の脈絡もなしに放り込むのはどうかな  
と思ひまして。

これが31話になります。

それではどうぞ！

途中で倒れたら、困るから

『L』、知ってるか。

世間一般では、キモオタは体力が無いと言われている。

それはそうだろう、イケメン爽やか系男子が部活動に勤しんでいる間、彼らはパソコンの前に座ってせつせとエ 動画、画像を漁り、アニメを見る。

目は悪くなり、無駄な 力を二次元に注ぎこみ、財政も圧迫、姿勢も猫背。

そんな彼らがイケメン爽やか（略）に体力勝負で勝てる訳がない。

いや、彼らキモオタがイケメン（略）に勝てる要素などあるのか？

神よ、答えたまえ。

答え・・・？ふ、そんなのは聞かなくてもわかっていさ。

答えは『NO』だ。

我らキモオタがイケ（略）に勝てる部分など無い・・・。



とても思っているのか!?

ふふふふ。

ふはははは。

いいかよく聞け世間一般でイ(略)と言われているにつつき男共よ。

女子の黄色い声援をその背中一身に受け、にやつきながら生活し、俺達キモオタを馬鹿にした、侮蔑の視線を送っている(略)共よ!

今日、貴様らに復讐してやる。

朝から晩までア二研の連中とキモオタトークを繰り広げ、運動セン  
スは並み、学力最悪、面構え逆の意味でブラックホールのこの平沢  
凜が!

貴様らを地獄の底へと突き落としてやるわあああああ!





「今日はマラソン大会の日だよ、お姉ちゃん！もう起きないと間に合わないよ！」

「うーいー、あと5分」

「もう4時半なのに！5時集合でしょ！」

上の階から姉ちゃんと憂の戯れるきゃっきゃうふふな声が聞こえてくる。

憂の奴・・ヴォイスだけならエンジェルなのに、マジで顔と声一致させろ。

いや、顔と声を性格と一致させるか？

だがそうなるを見ると見るも恐ろしい般若が出来あがってしまいそうだし。

「だってー、眠いんだよー」

「遅刻しちゃうから！」

とまあ、姉ちゃんと憂のエンジェルヴォイスを聴きながらにやにやしてるわけですけど。

今日は桜が丘はマラソン大会が行われる、梅雨も上がり期末テストに向けてこのからっからなお天と様の下を21km程頑張ってるのだ。

マラソンと言いなながら21kmしかないのは、この時期だと熱中症でぶっ倒れる俺ら（キモオタ）が多発するからだ。

ふ・馬鹿にされたもんだぜ？

ア二研の連中は既に知っているだろうが・俺は無駄に足が早い。

それはマジで無駄というレベルではない、短距離50メートルならば6秒台前半朝飯前。

長距離走ならば小中学と大会では9年間連続2位、永遠のナンバーツ―と呼ばれた男なのだ！

え？2位なら威張れない？うるせえ！細かいところを突っ込むんじゃないやねー！

とにかくだ！俺は入学してから・じゃないや、キモオタであることが全校生徒にばれて以来、ずっとこの日を待ち望んでいたんだ！

何時か目にモノ見せてやるぞ、イケメン共・と！

サッカー同好会の帰りで、可愛い彼女と一緒に帰りやがったあのZ！そして彼女待つてるから先に帰るわとかぬかしやがったX！そしてその他ももろの桜が丘にいるイケメン共！

てめえら一人残らず、サッカー同好会で毎回の如く綺麗に抜かれる怨みも込めて、さらに年がら年中侮蔑の視線を向けられているストレス発散のためにも、彼女の目の前で赤っ恥かかせてやる！

そしてこれから三年間、この大会が行われる度に味あわせてやらか

らな！

キモオタに抜かれるという、人生最大の屈辱をなあああああ！

「お兄ちゃん・・・？お姉ちゃん起きてきたから仕度して！」

「ほいよ、りょーかい」

いかんいかん、憂が怪しげな目で俺を見ているぞ。

此処は普段通り華麗にやり過ぐす。

「今日は暑くなるみたいだから、熱中症起こさないようにね？」

「大丈夫だって、憂も知ってたんだろ？俺は走るだけが取り柄の人間  
って」

「そうだけど・・・途中で倒れたら、困るから」

な、なんだと・・・!?

憂が、あの憂が俺の心配を・・・。

有り得ない、これはもしかすると競技中に槍が降ってきて、実はその槍には憂の日頃の怨念が込められていたりするの!?

・・・とか、前は思ってた訳なんですけど。

憂と昔話の件で和解してから、何だかこの娘全体的に柔らかくなつたんじゃないか・・・？

特にビリツンのアレとか、普通に考えて一週間は制裁が続くだろうと思つていたのに。

二日後には忘れたかのように、見た目エンジェルスマイルを俺に向けてくれてたもんなあ。

これはもしかして、マジで憂は心が姉ちゃんのように寛大になりつつあるのか。

そついやパソコン捨てる！彼女出来ないぞ！とかも最近全然聴かないなあ。

学力がないのはパソコンのせいだ！つて言われて1回捨てられそうになつたくらいか。

でもソレ以外は、特にビリビリ言うこともなし。

こないだだつて、姉ちゃんと二人で買い物行つて帰ってきたら不機嫌オーラ満開だろうと思つたのに、どうしたことか逆に元気がなくて、何だかこつちの調子が・・・。

つてこともあつたし。

ま、いつか。

憂が丸くなる 姉ちゃんと一緒に居られる パソコンは安全 初音  
クさん達をいっぱい拝める 平沢凜幸せ

なら何も問題ないよね！

途中で倒れたら、困るから（後書き）

りんたんの復讐が始まります！



だ、れ、が、の、ど、っ、ち、よ、誰が！

「ぐあー、ねみい」

「んあー・・・おい見ろ、今太陽昇り始めたぞ平沢」

「うわー、朝日が綺麗だねー・・・って何じじいみたいなこと言わせ  
とんじゃゴルアアア！」

「うつせーから騒ぐんじゃねーよキモオタが。俺は2時までI 見  
てたからねみいんだ」

「お前もキモオタじゃねーか！」

学校に着き、クラスに入るとアニ研の連中は死相を浮かべて机の上  
でへばっている。

それもそうだ、コイツらは基本夜行性でアニメを見るため朝は天敵。  
授業の四分の三は夢の中、夕方6限目からようやく頭が回り始め  
る。

まあそれは俺も一緒だ、こいつらと仲良くお眠りして教師からよく  
拳骨をくらっているが。

今日は違うんだぜえ・・・ククク。

「だりー一日が始まるな。何で高校生になってまで根性出さなきゃいけないーんだよ」

「お前みたいに無駄に太ってる奴がいるから、そういう奴がメタボにならんように学校側が配慮してんだろ」

「どうせ完走出来るわけねーって。またイケメン爽やか系男子共が黄色い声援受けて終わりだろ」

「お前ら馬鹿だな、今日は女子生徒の体操着が拝める数少ない日だというのに。平沢さんと中野さんの体操着見れるだけで幸せだろが！」

「確かに！・・・いやでもな、どうせあの二人もう彼氏いんだろ？俺ら以外の桜が丘の男子、マジイケメンだし。もうきつとあの二人は彼氏持ちに決まってる！」

「んなこと言ったら夢も希望もねーだろ！言わない鉄則だ！」

とかまあ、俺の周りにはもう葬式モードだが。

俺は違うんだよなあ、コレが・・・。

俺はこの日を待っていたのだ、イケメン共に復讐出来るこの日を・・・！

「つつか平沢はいいよな、無駄に足速いし、無駄に体力あるし、お

前無駄の塊だろ」

「負け惜しみ乙」

「うるせー！てめえちょっと足が早いからって調子乗ってんじゃねーぞー！」

「おいア二研の頭脳（笑）、んなこと言っても平沢が調子乗るだけだから。そしてお前は少しやせろ、一緒に居てむさくるしい」

「て、てめえら・・・！俺に逆らったら部費どうなるか分かってんだろーな！」

「だからてめえのコレクションのために払う金はねーよ！」

ア二研の頭脳（笑）が言った通り、俺は無駄に足が早く持久力も無駄にある。

そのおかげで、犬においかけられても、イケメン共からおいかけられても、絶対に逃げ切れるのさ。

にしし・・・体育祭じゃ一部のイケメンにしか悲しみを背負わせることは出来なかつたがな、今回はかりは全校生徒のイケメンに悲しみを背負わせることが出来る！

あいつらどうせ筋肉馬鹿だから、1位取ることしか考えてねーだろ。

桜が丘は部活動に入ることが義務付けられていて、俺らア二研の連中以外は皆体育関連の同好会や部だからな。

それでこそ、潰しがいいがあるってもんですよ！

今に見てるよイケメン共が・・・！ア二研の苦しみと怒りと、悲しみを思い知るがいい！

「ま、お前らの分までイケメン共追い越してやるって」

「あんまり期待してないぞ」

そう言っただけ俺らは着席し、先生が着たところで出欠を取り運動場へと出た。

うは・・・全校生徒の皆！女子の皆が体操服！可愛い！む、むね・・・  
げふんげふん。

と、とにかくお、お尻・・・げふんげふん。

皆スタイル良過ぎですから！鼻血出る鼻血！

ティッシュつめながら走るのだけはマジ勘弁な！

そついや体育祭はこうやって一度に集まることなかったら、じつくり鑑賞出来なかったもんなあ。

もういつそ可愛い女の子の後ろ、もしくは横で揺れる　　や

を見てるだけで幸せになりそう。

むしろそっちを目的にしたい。

「うわー、今から拷問レースが始まると思うと・・・漣、私やっぱり体調悪いから保険室に・・・」

「朝迎えに言った時もそう言って、測ってみたら平熱だったぞ。諦めるんだな」

「まあまあ。皆で走れば楽しくなるわよー」

「むぎちゃんの言う通りだよ！それに熱中症になっても憂が助けに来てくれる！」

「いやいや憂ちゃんは救急車か!？」

とまあ、そんな邪な思考をしていたら横から女神たちの声が！

軽音部「一行がお通りになるぞ！」

ええい、そこらへんに居る可愛らしい女の子達！道を開けてください！

「あ、りんたん！」

「おー、凜か」

「おはようございます、凜君」

「お、おはよう・・・平沢君」

ぐ、ぐあああああああ！

全員の体操服・・・やばい、彼女達の美しさ・可愛さは俺の目の用量を軽く超えてしまっている！

このままでは失明しそうだ！直視出来ない！

て、ていつか秋山さん！

あ、貴方・・・その、む、胸が！

「りんたんはね、すっごく足が速いんだよ！中学じゃ学校で2番目だったもんね」

「あ、ああ・・・はい、まあ。姉ちゃんの言う通りですけど」

姉ちゃんの声ではっとして現実に戻る。

やばいやばい、姉ちゃんとまゆげさんの体操服もかなりやばいが、秋山さんはそのスタイルの良さからしてやばいを通り過ぎて核弾頭レベルだぜ！

写真！携帯ないの携帯！？何やってんの俺ええええええ！

「へえー、じゃあ凜は今日は上位を目指して走るってわけか」

「ええ、まあ。偶には頑張らないとどっちが煩いんで」

「の、のどつち!?!」

「あ」

しまった。

つい、いつもの癖で・・・。

「だ、れ、が、の、ど、つ、ち、よ、誰が!」

「ぐふえ!?!」

後ろから凄まじい殺気を感じたかと思うと、拳骨を食らった。

「のどか・・・聴いてたのか?」

「ええ、さつき中野さん達と合流して。唯達を探してたら偶然」

「い、いてえ・・・」

く、くそあー・・・のどつちめ、何時の間に俺の死角に・・・。

つつかこの年にもなって拳骨はないわ、アンタは俺の母ちゃんかちくしょーめ!

「お姉ちゃん、ちゃんとタオルは持った?水分補給のポイントは覚

えてる？靴紐は結べてる？ズボンのゴムは緩くない？あとはー」

「大丈夫だよ憂」

「・・・平沢先輩を見てると大丈夫に見えません」

中野さんと憂がやってきた。

続々と美女たちが集まってくる。（憂&のどつちを除く）。

こうやって見ると、やっぱり憂のほうが姉ちゃんよか胸が大きいな。

何処で道を誤った、姉ちゃん・・・。

中野さんは・・・うん、何だか気まずくて直視出来ん。

大人しくしておこう・・・。

「お兄ちゃん、あんまり無茶しないでね。後で救護に呼び出されたりすると大変だから」

「あー、大丈夫だつて。昨日は11時には寝たしな。憂も気分悪くなったりしたら、すぐ休めよ」

「お兄ちゃんに心配される程自己管理が出来ない人間じゃないから」

「・・・そうでした」

「相変わらず憂は平沢君に敵しいんだな」



皆笑いながら俺と憂のやり取りを見つめているが、何だか見世物み  
たいで落ち着かねー！

まあ中野さんと秋山さんが笑ってるから許してやる！

姉ちゃんは平常運転で何よりだ！

ふふ、やっぱり唯の弟君だね。面白い

さて、あとスタートまで数十分ってところか。

走る距離は21km、中学時代は最高で10kmだったからざっと二倍だ。

まあ・・余裕だろう。

何せ俺はこの日のために、一週間前から 禁をしていたのだからな！

おかげで色々と爆発しそうなんだよね！だから女の子近づいてくると がマジでやばい！今日の女子の体操服は俺を間違いなく殺しにかかっている！

だがそのおかげで、パワーは溢れんばかりに湧き出ているぞ！

うおおおおお、早く生まれ！

始まって下さい！

「確かこれ上位10名は表彰されるんだよね遷」

「ああ、確か男子は上位5名、女子は上位10名で学校総会で色紙か何かを貰えるって話だ」

「まさかりっちゃん、狙ってるの!?!」

「ないってないって、私は凜に期待してるからな」

俺が猛っている隣では軽音部+般若妹+のどっちがきゃっきゃと喋っている、ちなみに後者二人はブラック偏差値75の猛者だ。

顔は可愛いが、顔と性格が一致していないことに関しては桜が丘の双壁を担っていると言っても過言ではない!

「俺すか?」

「凜君足速いんでしょう?期待しちゃうわー」

此処は・・・普段ならば、『まあ・・・ある程度頑張りますよ』とか言ううんだけど。

如何せん禁欲生活が続いており、いろいろ爆発しそうな俺は。

「ばっちり期待してください、軽音部の皆さんのために1位取りますから!」

とか眉毛さんの美しいおめめにやられて言っちゃまったようわああああああ!

今まで2位しか取ったことないのにー!

「ホント！？りんたん私のために1位取ってくれるんだ！」

「あんな、どう聴いたら唯のためになるんだよアホ」

「流石凜君だわー」

「ひ、平沢君・・・期待してるからな」

「平沢君・・・その、無茶はしないでね」

ぐ、ぐぬぬ・・・姉ちゃんだけならまだしも、眉毛の方や秋山さん、そして中野さんにまでこう言われちゃ・・・。

「まあ、私も凜が上位に入れたら何も言わないわよ。それだけの根性があるんだったら、体育祭で言ったことは謝るわ」

とのどっちまでこんなことを言いだす始末。

「お兄ちゃんは口だけの人だから、私は期待してないもん。安心して」

ちよ、この空気で一人ビリツンな憂に安心した！

何時も通りの憂はやっぱり辛口だぜ！

でもこんな大勢の中憂だけまともなこと言っても、掻き消されちゃうから！

「や、やります！サッカー同好会の奴らも、ソフトボール部の連中も、水泳部にも勝ちます！」

結局こんなことを叫びながら退散した！

何なんですかこの空気は！？

苛めか！？だから全員で俺を見ないで、恥ずかしくて死んじゃう！

「・・・むぎに遷、そして梓」

「はい？」

「な、なんだよ？」

「・・・なんでしょう」

「お前達乗せるの上手いなー」

「そ、そんなつもりはないって！」

「そうですね！私はただ平沢君に頑張ってほしいなって！」

「はい、だって凜君面白いんですもの」

「「「確信犯がいたー！！！」」」

「くっそー．．何でこんなことに．．．。これで5位以内に入れなかつたら秋山さんや中野さんに合わせる顔ないわ。てかのどっちの拳骨制裁がこえー．．」

結局1位取るとか言っちゃって、最低限ラインは5位以内入賞という無理難題を自分で言いだす始末。

まあ、イケメン共を抹殺するためには当然上位に入らないといけなわけだが、流石に5位以内はなあ．．。

高校入って、流石にまたすぐ2位とか取れんだろ常識的に考えて。

所詮中学の実績は、井の中の蛙みたいなもんだし。

やるだけやるか・・・。

「つたく・・・」

「お、平沢じゃん」

「よ、今朝は元気だな」

「げげえ、ZにXじゃん」

「げ、って何だよ。げって」

どんよりモードの俺に話し掛けたのはサッカー同好会のZとX、ちなみに両者ともに可愛い彼女を入学して2カ月でゲットしたリア充度1億の男だ。

要するに俺とは全く縁の無い奴らな訳だが。

「どうせお前ら筋肉馬鹿だから1位狙ってんだろ」

「まあな。彼女の前で情けないカツコ見せれねえ」

「ああ、サッカー同好会以外は雑魚ばっかだろどうせ。こりゃ身内で1〜5位独占も有り得るぜ」

「お前らが本当に筋肉馬鹿で安心した」



「キモオタに馬鹿って言われたくねーぞ」

こいつらの脳内は幸せ回路でも作動しているのか・・・不幸と言う名の抵抗　が足りてねえぞ！

どう考えてもこの時期プール開き前で走り込んでいる水泳部男子、外周を死ぬほど走らされているソフトボール部が最強クラス・・・

サッカー同好会はおそらく剣道部と同じレベルだ、もしくは野球同好会とかと・・・

「ま、精々頑張れ平沢。ちなみに昨日同好会での約束忘れんなよ」

「ああ、最下位は全員にジューズ一本だろ？忘れるわけねえから安心しとけ」

「じゃあな」

そう言っつてZとXは去っていく・・・

イケメンにざまあするだけなら、あの二人抜くだけで十分だったんだが・・・

入賞するとなると、敵は奴らではなく・・・

「よー、キモオタ。準備運動しつかりしとけよ？つて、いつも一緒にいるア二研は何処いった？」

「ああ？筋肉痲呆症が気安く喋りかけてくんじゃねーぞ。老人ホームにぶち込んでやろうか」

コイツ（ら）である。

奴の名前はＹ、ソフトボール部に所属し部では投手を務めている、さらにこいつはソフトボール部では猫被っており、実際は糞みてえな奴だ。

ちなみにそのおかげか、イケメンのおかげか知らんが、姉ちゃんと仲の良い立花姫子さんにえらく可愛がられている、なんてこつたい・  
・中身はアリエールじゃ洗い落としきれないくらい黒いのに！

さらに小耳にはさんだ話だが、こいつは上位入賞すれば立花さんから姉ちゃんを経由し、中野さんと二人きりで遊べないかとかいう話を持ちだしてきた！

何て奴だ！んなことは断じて許さん！

中野さんがＺやＸと付き合うのはまあ仕方ないと（それでも号泣するが）割り切れるが、こいつだけは絶対に駄目だあああああ！

「言つとけ。まあ、今日はお前みたいなキモオタには関係ない日だ

からな。ちゃんとゴールしろよ？女子にみっともねえ姿見られるくらいなら棄権しとけ」

「好きなだけ吠えてな」

そう言つて肉塊Yは去つていく・・・。

野郎・・・とにかくあの男にだけはマジで負ける訳にはいかん、中野さんのためにも。

きつと中野さんだつて奴と遊ぶよりは、俺が奴に勝つほうを喜んでくれるはずだ！

イケメンだから私Y君と遊ぶとか言つたら、もう俺2度とあのクラスに足を踏み入れん！通信制の高校に転入してやる！

とかまあ色々考えている内に、教員共のうんちくは終わった。

ちなみに俺を含め大概の男子生徒は聴いていない。

如何にして勝つか、それしか考えていない。

俺も一緒だけどね！

そして。

「それでは女子生徒の皆さん、準備はいいですかー？」

「準備出来てない！漣やっぱり私トイレ」

「自分だけ楽しない！」

「ひえ〜」

とか変な声が聞こえたが。

「では・・・スタート！」

空砲と共に、デコさんの声も漣さんのエンジェルヴォイスも聞こえて無くなった。

このマラソン大会は、やはり女子のほうが足が遅いため先にスタートさせる。

その20分後に男子がスタートするわけだ、希望者は男子と一緒にスタートしてタイムを競うことも出来るらしいがそんなことする方はいるのだろうか・・・。

21kmか・・・長いな、姉ちゃんはちゃんと完走出来るのか？

秋山さんや憂がいるから大丈夫か。

しかし男子だけになるとやっぱりむせえ。

ざっと30人強ってところか・・・。

サッカー同好会が8人、ア二研が5人、水泳部6人、ソフトボール部11人、剣道部2人、野球同好会4人・・・って感じだったか確か。

って。

女の人いるー！

スタートラインに並んでるの男子だけかと思ったら、まさかの女子！しかも俺の真横だ！何故今まで気づかなかった俺！

「あ、唯の弟君だ」

「は・・・？」

「私、立花姫子。唯のクラスメートね」

「そ、そう言えば・・・」

実は俺、立花さんの実物を見たことが無い。

写真とかの媒体を通しても見ることが無く、イメージは姉ちゃんの話だけだっただけに・・・。

ギャップが半端なかった。

もっとおしとやかかそんな格好をイメージしていたんだが、見た目モノ凄くぎやるぎやるしい。

だがたったこれだけの会話を通しただけで、見た目に反し中身は姉ちゃんの言ってた通り素晴らしい方だというのが分かる。

こ、こんな素晴らしい方を騙しているなんて・・・あの糞野郎め！

「私達ソフトボール部は男子と一緒にスタートするから。お手柔らかに頼むね」

お手柔らかに、か。

『それでは20分経ちました！男子生徒の諸君！そして男子の部参加の女子生徒の諸君！準備はいいですか！？』

残念ながらそういう訳には行かないんですよ立花さん。

軽音部のためにも、1位を私のために取ってくれと勘違いした姉ちゃんのためにも、そしてYの目論見を阻止し中野さんを助けるためにも（本人の意思知らない）、負ける訳にはいかんだ！

だからこう言わせて貰おうか！

「いえ・・勝負なので」

「ん？」

「やるからには、やりますから」

俺の言葉を聴き立花さんは少し目を大きくして、くすりと笑った。

「ふふ、やっぱり唯の弟君だね。面白い」

『それでは、スタート!』





ふふ、やっぱり唯の弟君だね。面白い（後書き）

立花さん登場。

立花さんは2年時で唯と同じクラスという無理やり設定にさせて頂きました・・・。

立花さんファンの皆さんごめんなさい……

あ、暑苦しいからだきついでくるな！

「み、漣・・・私もうダメだ、これ以上歩けない」

「何言ってるんだ、まだ半分も行っていないぞ？」

「ま、まだ・・・半分も!？」

「スタートして1時間も経ってないじゃないか」

「う、うそぉ・・・」

秋山漣、田井中律の両名は現在9km地点を経過した。

日頃から特に運動をしていなかった律は当然体中が悲鳴を上げ始め、6km過ぎには漣に泣きつきながら歩こうと提案。

しかし9kmを通過した今、それすらも困難になってきた。

「唯ですら10kmまでは走る!って意気込んだのに・・・」

「う、それを言われると・・・辛い」

軽音部の皆は揃ってスタートを切ったが、唯と紬は二人を置いて先

に走って行き、憂や梓は言わずもがな、和に関してはおそらく女性陣の先頭らへんを突っ走っているのではないだろうか。

憂や梓、和に関しては仕方ないかもしれないが、唯に負けるとは思ってもいなかっただけに律のメンタル面へのダメージも中々のもの。

「あいつらだつて軽音部しか入ってないはずなのに・・・何でだろ」

「律が酷過ぎるんだ」

「やっぱし・・・？」

二人は今女性陣の最後尾あたりをふらふらと歩いている。

漣は本当はもう少し走れるのだが、友人である律を一人放っておく訳にも行かずこうやって一緒に歩いている訳だ。

周囲には明らかに見た目運動不足と思われる人種の女の子達が律同様にふらつきながら、酷い表情で足を動かしている。

律は見た目ならば運動不足にも見られないのに、やはり人間分らないものだ。

「こ、こんなことなら最初から歩いていけば良かった・・・」

「今更言っても仕方ないぞ？私もペース合わせるから」

「み、みお〜」

「あ、暑苦しいからだきついてくるな！」

唯でさえ9km以上この暑い中歩いているので、肌は汗でべとべとだ。

そんなべとべとが合わさったらどうなるのか・・気持ち悪くて創造出来ない。

「あと1時間半くらいでゴールかな？」

「全然。2時間以上はかかると思った方がいい」

「うへえ〜・・・」

漣と律がぐだりながら街並木を通過していく。

今回のマラソン大会は学校のグラウンドでスタートを切り、学校の外に出て街中を走り、途中で折り返してゴールは学校ということになる。

10km地点過ぎが確か折り返しだったな、と漣が先を確認すると。

二人の横をさっそうと一人の男子が通り過ぎて行った。

「うわー・・・速いなあの1年男子。ゼッケンはソフト部か」

律が感心しながら呟くと、数秒遅れて他の部のゼッケンをつけた男子生徒達が駆けぬけて行く。

桜が丘の男子はまだ1年しかいないため、ぱつと見ですぐに何処の部に所属しているのか分かるようなゼッケンを部ごとに色で分けて

いる。

ソフト部は黄色、水泳部は水色、剣道部は紺色などなど。

残念ながら同好会である野球やサッカーはゼツケンの色は女子同様に白である。

何故そのような色分けを行ったのかと言うと、遠目からでは男子生徒が女子生徒の中に埋もれて誰が誰だか分からなくなってしまっためだ。

特に体育祭やマラソン大会のように全校生徒が参戦するイベントは大変で、体育祭ではこの策が中々の健闘ぶりを見せたと言う。

二人の隣を走り去っていく男子生徒はやはり色つきゼツケンの男子生徒ばかりだ、無職のゼツケンは全く見当たらない。

有色ゼツケンの中でも多いのがやはり水泳部とソフト部、水泳部はプール開き前で死ぬほど走り込まされ、ソフト部は下積みとして外周を毎日走っている。

それだけの修練を積みばこのスピードも納得といったところか。

こんな猛者だらけの中で、彼は5位以内に入ることなど出来るのだろうかと二人が思っていたところに。

「あ、秋山さんに・・・ええと、デコさん」

彼はすぐ横に来ていた。

「凜!？」

「は、はい、もう来たのか!？」

二人の驚きっぷりに平沢凜は頭を掻きながら、額に汗を垂らして笑う。

「ま、まあ・・・はい。お二人も頑張ってる」

そう言うと凜は頭を軽くぺこりと下げて、前を走って行った有色ゼッケンの選手たちを追いかけて行く。

そのスピードは前に行く選手達に見劣らない程の速さで、背筋とストライドは伸び、きびきびと動く身体からは無駄を感じさせない。

何処からどう見ても、走っている姿は普段の彼からは想像出来ないくらいに鮮やかだった。

二人の中では平沢凜はどちらかというところ、しっかりしているというよりもおちゃらけていて、唯のように面白いが何処か頼りない存在。

だが、今の彼の姿はそんなモノは微塵も感じさせない。

「人間・・・分からないモンなんだなあ凜」

「あ、ああ・・・」

「ま、ただアホなだけじゃ唯や憂ちゃんからあそこまで好かれる訳ないか」

「確かに・・・そうだな」

確か平沢凜の前を走って行った選手は7名程。

あと二人を抜けば、5位入賞。

もしかして・・・本当に1位まで行ってしまつのではないか？



ひ、平沢君ってあんな感じの人だっけ

「だ、大丈夫憂？」

「大丈夫、まだまだ半分だもん」

「で、でも。憂元々あんまり走るの得意じゃないみたいだし・・・」

息を切らしながら街並木を駆け抜けていく桜が丘の女子生徒が二人。

一人は綺麗な黒髪のツインテールを揺らしながら、もう一人は栗色の髪をなびかせて走る二人は、中野梓と平沢憂だ。

二人が走っているのは折り返し目の前の10km地点、周りにはご近所の人々や商店街の人々が応援にやってきている。

彼女達の前後を複数の女子生徒達が走っていることから見てわかるが、此处が調度順位としては真ん中程の位置。

「ううん、こんなところで歩いてたらお兄ちゃんに馬鹿にされちゃう。それにお姉ちゃんだってまだ頑張ってる私達の先を走ってるんだよっ。」

「そ、それは・・・そうだけど」

憂の言う通り平沢唯は二人の先を琴吹紬と一緒に走っている。

紬はお嬢様として育てられていたことから、スポーツにもそれなりに精通していると思っていたし、体力があるのには納得がいく。

だがもう片方の唯に関してはとてもじゃないが納得出来ない。

彼女の体力の無さは有名だし、運動は何をやってもダメだということも周知の事実。

なのに今回に関しては軽音楽部ではトップを守っているのだ、間違いであってほしい・・・。

「で、でも本当に無理だと思ったら私に言って。途中で憂が倒れちゃったら元も子もないよ・・・」

憂は見るからに辛そうな表情をしており、口は半開き、上半身は左右に揺れ足のストライドは走り始めた時の半分もない。

拳句坂道では顔を上げられずずっと下を見ている始末、このままでは何時か倒れてしまうのではとはらはらする。

「ほら、・・・折り返しだよ！も、もうちょっと頑張ろ！」

「う、うん・・・」

喋るのも億劫になり始めている、これはあと1km程で限界かと梓が思い始めたその時だった。

彼女の達の真横を複数の男子生徒と、一人の女子生徒が颯爽と駆け抜けて行った。

「速い・・・」

「凄いね・・・」

男子生徒の集団と+ の女子生徒は見事なコーナリングで折り返し地点を曲がり切ると、速度を落とすことなくグングンと進んでいく。

憂と梓はその中に自分の知っている人間が居ないか、と目を凝らす  
が・・・。

「お兄ちゃん・・・いないね」

「い、居た方が凄いなと思う」

目的の人物、平沢凜は居なかった。

それもそうだ、彼女達を追い越して言った男子生徒のゼッケンは全て有色で部活動生。

所詮お遊びレベルのサッカー同好会では手の打ちようがないと言ったところだろう。

スタート前では、二人の目には高らかに上位入賞を果たすと、優勝すると言っていた平沢凜だったが現実はこのかなものか。

落胆のため息と、まあ期待はしていなかったという予想通りの展開に安心したような残念なような。

「もしかしたらすぐ後ろにいるのかも」

「それはないよ憂」

憂が最後の確認、と視線を背後へと向けた。

すると。

「お、お兄ちゃん!？」

憂の声に釣られて梓も思わず振り返った。

「う、うそ!？」

折り返し地点を曲がり始めようとした二人のすぐ後ろに、探していた人がいた。

「ああ・・・!？憂に・・・中野さん」

額から大量の汗を噴き出しながら凄まじいスピードで走ってくるのは平沢凜。

その表情は憂と同じくらいの苦痛の色に染まっているものの、身体はふらついていないし、口も開いていない。

「ほ、ホントに此処まで頑張っちゃうんだ・・・」

「平沢君じゃないみたい・・・」

二人が口々に驚愕の言葉を述べるが、凧はそんなことはお構い無しと言わんばかりのスピードで二人を追い越すと、前を走る先頭集団に標準を定めたようだ。

残りは半分の10km、前に行くのはソフト部と水泳部の男子生徒が数人。

彼らを追い越せば上位入賞も見えてくるし、3位以内・優勝だつて夢じゃない。

凧のスピードを見るに、先頭集団より少し早く、まだまだ余力はあるように見える。

本当に・・・本当に行ってしまうのか？

二人がそんなことを思っていると、凧が不意に振りむいた。

「あんま無茶すんなよ憂、中野さんも」

それだけ言い残すと、凧は更にスピードを上げて前に行く集団を肉迫していく。

あっという間に凜と二人の距離は数メートル、数十メートルと離れて行き、角を曲がって凜の背中は見えなくなった。

「ひ、平沢君ってあんな感じの人だっけ・・・？」

「中学の時は、あんな感じだったけど・・・」

「そ、そうなの？」

「う、うん・・・でも最近はホントあんな顔してることなかったのに・・・」

息が上がる憂と梓。

だが、二人はもう少し走ってみようかと思った。

目の前であれだけの姿を見せつけられたのだ。

自分達だけで楽な方に流れて、歩いてしまうというのはそれこそ凜に失礼だ。

私のために一番取ってくれるんだ

此処は桜が丘高校マラソン大会の休憩地点。

スタートから11kmの場所に設けられたこの休憩所では残り半分を切った闘いに向けて生徒達が英気を養う場所だ。

平沢唯と琴吹紬の二人は此処まで休憩無しで走り続け、今は水を呑んだりおにぎりを食べたりと、次の闘いへと備えている。

「まさか私此処まで走り続けられるなんて思ってなかったな」

「唯ちゃんも、やる時はやるものね」

「むぎちゃんだって、走り方凄い様になってたし普段から走り込んでいるの？」

「はい、運動もたしなみ程度に」

運動音痴で知られている平沢唯だったが、彼女が此処まで頑張るとは琴吹も考えていなかったのだろう。

何せ唯は律や憂を置いて軽音部ではトップを走っているのだから。

特に憂よりも足が早いのは意外だった、あれだけしつかり者の妹さんなのだからそれは運動も出来るだろうと思っていたのに。

だが現実にはギターのように上手くはいかなかったようだ、流石に体力は数日でつくものではないし・・・。

「唯ちゃん、体育祭でももっと活躍出来たんじゃない？」

「ううーん、あの時は全然練習してなかったもん。今日は1カ月前から準備してたんだー」

「一カ月前から？」

「うん、りんたんにあんまりみつともない姿見せられないな〜って」

「ああ。凜君、足凄く速いわよねー」

「足の速さだけは中学の頃から変わってないんだよ〜」

「だけ？」

苦笑しながら問い返す琴吹に唯は笑いながら応える。

「りんたんはねー、中学の頃に比べるとすごい変わったんだあ。今みたいに丸くて可愛い子じゃなくて、もっとツンツンしてたんだよ」

「凜君が？想像つかないかも・・・」

「でしよー？」



「具体的にはどんな感じだったのかしら？」

「えーとね、とにかく意地っ張りですぐに怒ってて。でもそこが可愛かったりも思っただけど・・あれ？」

「ぜ、全然具体的じゃないかも・・」

「あはは、そうでした」

平沢凜の中学時代を琴吹達軽音部は全く知らない。

その理由は至って単純で、自分達が唯の家に遊びに行った時に彼が何時も居なかったのだ。

自分達が入学してから1年ずっとその現象が続いていたため、律に至っては『神秘のベールに包まれた平沢凜』などと言いだす始末。

だが実際会ってみると正に唯の弟らしく、何処かが抜けていて頼りないが、一つの長所を持っている少年だった。

まあまさにこの姉あってあの弟ありと言って間違いないだろう。

「私は中学の頃のりんたんも好きだけど、今のりんたんはもっと好きだし・・自慢の弟です！」

「私も兄妹欲しかったなあ」

「そっか、むぎちゃんは一人っ子だもんね」

「澁ちゃんは梓ちゃんも。時々律ちゃんと唯ちゃんが羨ましく思っちゃうわー」

のほほん、としながら二人が休憩所のブルーシートの上に座りお茶をすすっていると。

周囲がざわめき、一際大きな歓声が上がった。

「あ、男子が来たみたい」

「ホントだー」

休憩ポイントに目もくれずに通過していく男子生徒数人、ゼッケンを見ればソフトボール部が二人に、水泳部が一人。

そして・・・

「りんたん!」

「凜君!？」

先頭集団の3人から遅れること数秒で平沢凜がやってきた。

顔は苦痛に歪み口は半開きである、前の三人と比べると若干きつそうだ。

だが足の回転速度は落ちていないし、身体もぶれていない。

平沢凜も先頭の三人同様休憩はせずに、給水ポイントで水をひったくると一気飲み、そのまま走り去って行った。

スピード自体は前を走る集団よりは速い、となると後はスタミナの問題か。

「確かソフトボール部の二人エースなのに、よく食らいつくわ〜」

琴吹が感心し、小さくなっていく背中を見つめる。

そこに普段の平沢凜の姿はなく、唯が言っていたようにピリピリと張り詰めた空気を纏わせた人間の姿があった。

「流石りんたん、私のために一番取ってくれるんだ〜」

「でもこのままだと本当に1位取っちゃうかもしれないわね」

「うん、1位取ったら憂も御馳走してくれるし良いこと三昧だね！」

「も、目的はそっち？」

現在先頭集団はソフトボール部でエース候補の二人と、水泳部で期待の新人と目されている一人。

その後ろに食らいつついているのは名前も決まっていない、部活にすら成れなかったサッカー同好会の一人。

砕いて言えば、リア充三人とキモオタ一人。

いったい誰が、栄光のゴールテープを切ることが出来るのか！



え・・ホン、ト、凄、い（前書き）

此処でマラソン大会に登場したアルファベット表記人物の詳細を少し。

Z、X・・・サッカー同好会のイケメン、ちなみに二人とも彼女持ち。根は良い奴ら。

Y・・・・ソフトボール部のエース候補、剛腕。りんたんとは犬猿の仲。

W・・・・ソフトボール部のエース候補、変化球主体。りんたんと仲はよろしくない。

V・・・・水泳部期待の超新星、りんたんとの間接点は無し。

え・・ホン、ト、凄、い

平沢凜15歳、只今全速力で走っております。

はっきり言って足がやばいです、感覚がなくなってきました。

というか・・汗！汗凄いんだけど！染みるわ！

たぶん此処はスタートしてから15km過ぎくらい・・レースも終盤で俺の乳酸菌もマッハになってきた。

「んげえ！？ひ、ひら・・さわ！？」

「ふ・・ハハ！わりいが先にいかせてもらおう！」

「ば、馬鹿な・・！？」

たった今ソフトボール部のエース候補の一人、Wを追い越した。

ふふふ・・・ふはははは！

ざまあああみやがれえええ！

ぐええええへっへ！今てめえの脳筋破壊してやったぞ！

普段から俺らアニ研を馬鹿にしてる連中筆頭だもんなお前は！もちろん女子にその情報横流ししてるのも知ってたんだぞ！

あとソフトボール部で胡麻すって立花さんに、にへら顔してるっていう裏情報ももう抑えてんだよ！

さらにてめえが中野さんに邪な思いを寄せているということもなああああ！

ソフトボール部はマジで中野さんラブ率高過ぎだろ！俺が勝てる要素ねえんだからもつと身をわきまえとけ！

「オタに・・・負ける訳にはいか、ねえ！」

「ぐぬぬ!? し、しつけえぞ、て、めえ!」

こ、コイツめ・・・唯でさえ体力がやばいのに喋られせて余計な力使わせてんじゃねー!

俺の前にはあと水泳部のイケメンと肉塊Yが居るんだよ、お前如きに無駄な時間は避けんのだ!

Are you understand!?

てめえらに分かりやすいように英語で言ってやるつかこんちくしょーめ!

文法間違ってるのはわざとだよ! 笑うんじゃねー!

「ぐおおおあああ!」

「うおおおらあああ!」

俺の願いを叶えるためには、貴様は障害に過ぎん!

さっさと諦める! 諦めて下さい!

が、そんなことやってる間に先頭を走る男子生徒二人が見えてきた。

あのゼッケンの色・・・見間違える訳がない!

ソフトボール部の暗黒物質肉塊Yと、水泳部で期待の超新星と目されるV!



つて・・・隣に女の人もいるー！

あれ立花さんじゃん！？

「ひ、ひら、さわあ！？」

俺とWの気配に気付いたのか肉塊Yが振り返る、その顔は正に今見た光景が信じられないと言いたげだ。

ぐへへ、言っておくが今からてめえもキモオタの餌食になるんだぞ。

そして、てめえが目論んでいた中野さんとのデートも取りやめだあああああ！

「え・・・ホン、ト、凄、い」

Yに釣られて立花さんも振り返る、いやお褒めの言葉大変嬉しいんですが貴方本当に女性ですか。

コイツらマジで洒落にならんくらいのスピードで走ってるし、たぶん時速12kmくらい。

俺もこのスピードは限界だが・・・イケメンに対する激しい憎悪と怒りと妬みが原動力となった今！余程のことが起こらん限り負ける気はせんわー！



「こ、コイツ・・・！」

そして俺は遂に先頭集団に追いついた、見れば肉塊Yは顔面崩壊、Vは無言でヒタヒタ走る、立花さん運動して汗を流している貴方はとつてもキュートです写真取っていいですか！？

これで栄光の1位に輝けるのはこの男子三人の中で一人・・・！

しかしおそらく立花さんも此処まで来たのならば三人に負けるつもりはないのだろう、一向に食い下がらない。

「平沢君、驚き、ました」

横に並んだ俺に声をかけたのは寡黙していた水泳部の超新星V。

コイツまだそんな余裕があんのか・・・やばい、何かコイツだけ俺らの中で一人飛びぬけている気がしてきた。

「で、も、勝ちます」

んな！？・・・勝利宣言してきやがった！

確かに顔面崩壊肉塊Yはおそらくもうすぐ離脱、Wと同じ末路を辿るのは目に見えている。

となればこの争いは俺とV、そして立花さんに絞られてくるのだ。

「ふひ、ひ・・・！て、めえもすぐに『こんな絶対おかしいよ』、っ、っ、っ、言わせてや、る！」

今のセリフ覚えとけよ！めちゃくちゃ息苦しい中頑張ってたんだから！

魔法 女の超有名なセリフだからな！言った後の女の子運命はそれは悲惨で涙無しには語れない超展開ストーリーなんだ！てめえも後でDVD貸すから見とけ！

「楽し、み、に、しています」

と言つてにやりと笑う超新星。

こ、この野郎・・・！どうせコイツも腹の中じゃ俺らキモオタを差別して世間のみ出しモンだとかロリコン（ だいたいあつてる）だとかシスコン（ 真実）だとかニート候補生（ のどっちに言われた）だとか犯罪予備軍（ 憂にその画像は犯罪だと指摘される）だとか思つてるに違いない！

そして優勝したら彼女と しようとか、好きな人に告白しようとか、デートしようとか思つてんだろ！？

そんな奴ら『リア充』は俺らキモオタが最も嫌う属性つてのが分かつてねーようだな！

キモオタ代表として絶対に負ける訳にはいかなーぞごるあああああ  
あ！



え・・ホン、ト、凄、い（後書き）

いよいよ大詰めです！

もしアルファベットキャラに名前を付けて欲しい！と思う方がいましたら、感想などでお知らせください。

凜！

16km地点過ぎ、Yの身体がふらつき始め開いた口が閉まらなくなる。

しめしめ・・・いいぞ！もう少しだ！

「ふ、ふぐうううう」

そして、終に肉塊Yが絶命した。

Yの顔は苦痛に染まり、Yは目の前が真っ暗になった！

「ぎ、まあー！」

とは言ってみるけど私平沢凜も限界が近い！

Wの時みたいに叫ぶ余裕がなくなっている！

それに比べて前を走るVはまだまだ動きは鈍らない。

ええい、水泳部の新兵器はバケモノか！

隣を走る立花さんも息が上がり始めた、やはり水泳部の超新星は4

人の中では別格だったのか!?

「や、やろっ・・・!」

こ、此処で引き下がる訳にいかん!

奴は俺らア二研、つまりキモオタの天敵であるリア充なんだぞ!

キモオタ代表であるこの俺が此処で引き下がっては、全面敗北を認めざるを得ない状況になってしまう!

それだけは・・・それだけは!絶対に避けねばならぬう!

18km地点を通り過ぎた、あと3km。

集団の先頭に行くVが更にスピードを上げた、もう後方を振り返ってもYの姿は捉えられない。

それどころかとうとう立花さんも力尽きた、走るのを止めてはいないもののスピードがガクンと落ち、二人から離される。

18km地点過ぎ、終に俺とVの一騎打ちだ!

「や、りますね」

こ、コイツ・・・!まだ喋る余裕あのかよ!俺はもう息が上がってとても喋れねーってのに!

だがしかし!リア充への怒りと悲しみと妬みがマックスになった俺はそう簡単には引き下がらねー!



コイツが優勝する 彼女が居た場合彼女に優勝おめでとう、と言われ幸せ指数が俺の100倍になる その後は彼女と愛を確かめあうためにドンガラガツシャーン！

うあああああああああああああああああああああ！

やめてくれ！死ぬ！あまりのリア充の輝きに失明するわ！

コイツが優勝する 彼女が居ない場合これをきっかけに好きな子言い寄る イケメンで運動神経抜群 女の子惚れる 付き合い始める

なんだこりゃあああああ！

どっちでも最悪じゃねーか！そんなことは断じて許さん！許して溜まるか！

俺らキモオタが一生かけてでも不可能な幸せを一瞬で掴み取るなんて、許せる訳ないでしょう常識的に考えて！

今たぶん俺らは時速14km、つまりかなりのハイペースで走っている。

足はふらつき、口は半開き、腕を振る筋肉も痛み始め膝が笑う。

対してVは疲れた素振りは見せるものの、ストライドの伸びもいいし背筋もピンと伸びている。

強がりかどうかは分らんが、コレでポーカーフェイスじゃないならもう俺の勝ち目は相当に薄い！

はつきり言っただけ以上スピードを上げられたら俺もWやYと同じような末路を辿ってしまう！

残りは3km、要するにあと十数分でゴールということ・・・。

市内のジムのルームランナーを使ったとき、俺が時速14km以上で走れたのは僅か数分・・・！

まだ、まだ賭けに出るには早いはず！

此処で馬鹿みたいに走って途中で倒れ、担架に運ばれでもしたら憂にそれ見たことか！って言われるに決まってるしな・・・。

「ッ、こ、んの、野郎！なー、に、笑、って、ンダ！」

そんな俺の策を見抜いたのかは分らんが、Vが振り返って不適な笑みを浮かべている！

マジでバケモノかコイツは、同じ高校生に見えない！同じ次元を生きているけど、実は重力がこの世界の数倍あるパラレルワールドからやってきた異世界人ですか！？

そんな人は未だに八　ヒにすら登場してねーよ！先に未来人と超能力者、あと宇宙人が先だっつーの！

「・・・ッ！」

「・・・」

な、何も言わねえ・・・。

どうして何も言わないなんて知りたくもないわ！もう勝利が目前で優勝後のことを妄想してんのか！？

彼女とドンガラガツシャーン！なことが！？それともデートに誘う場所でも考えてんのかお前はあああああ！

もう理由なんざどうでもいいわ！

と俺が吼えていると、Vが先を見る、と目配せした。

うは、学校じゃん！桜ヶ丘来た！あと2km切った！これで勝つる！

残り2キロならば、全速前進DA！海馬　社長よ、俺に力をくれ！

俺が力を入れると同時にVも速度を上げる！

野郎・・・、やっぱり力を温存してやがったな。

校門をくぐり、運動場に出ると先にゴールした女子生徒達が歓声を上げる。

だが女子生徒たちの黄色い声援も、豊満な肉体も俺の目には入らない！

あとは運動場を二週半するだけだ！栄光のゴールテープは目の前だ  
ああああああ！

あれを俺が切れば！桜ヶ丘の全てのイケメンは俺に敗北したこととなる！

つまりそれは！

この学園においてキモオタが覇権を握ることとなる！

今まで日の目を見てこなかった俺らキモオタが、イケメンに代わりこの学校の支配者になるのだ！

名付けて桜ヶ丘クーデター！

キモオタとイケメンの立場が逆転する学園なんざ聞いたことないだろ！今から地球上にその最も摩訶不思議な高校が誕生するのだ！

もちろん来年から入学してくるイケメン共は全員丸坊主じゃ！携帯のアドレスに女子を入れることは禁止！

体育祭の雑務は全部イケメン！トイレ掃除も！給食当番も！何もか

もなああああああ！

俺の野望を打ち碎けるものならば、この俺に勝ってみやがれえええええええええ！

「ッ！？やりますね！」

「しるあああああ！」

俺とVが並ぶ！歓声上がる！

あと一周だ！もう800Mも無い！

第3コーナーを曲がった、俺が少しリード！

息が・・息が出来ない！頭がくらくらする！足を地面についでいる  
感覚も無い！

照り付ける灼熱の太陽が何故か二つに見える！

だが気持ちと燃え上がる嫉妬の炎は劣えないぜ！

「ハアツ！」

「うあああああ！」

Vがまたもやギアを上げて前が出る！コイツ人間か！？

俺は引き離されまいと必死に食らい付く！

第四コーナーを回った、後は直線100M！

目の前が真っ白になり始めた、何も聞こえなくなってきた、頭に酸素が回ってないのかもしれない。

俺は最後の力を振り絞って走る

！

「凜！危ない！」

誰かが、俺の名前を呼んだ気がした。

だが、俺は止まることはない。

目の前に栄光のゴールテープがあるんだ、アレを切ればイケメンは俺らキモオタに跪き、アニ研は世間から疎まれることもなくなる。

のどっちだって喜んでくれるだろうし、デコさんもまゆげさんもきつと。。。

中野さんも秋山さんも、少しは俺を見直してくれると思う。

今思えば、中野さんにはこれっぽっちもいいところを見せていない。

秋山さんに関しては高校で再会したときから既にマイナスイメージしかなかった。

でも、その二人に対して少しでも頑張ってる姿を見せたならば、今の関係を変えられるかもしれない。

そして・・・憂も、姉ちゃんも。

日頃からあの二人には迷惑ばかりかけてるから、俺が優勝すること  
とで『自慢の弟(兄)』って言えるようになって欲しい！

平沢凜と同じ家族で良かったって言えるように  
。

そこまで考えて、俺の思考は途絶えた。

何故なら。

「ぐぶええええええええええ！？」



こけました、それはもう壮大に、たぶん人間がこける時のお手本となるくらいに。

犯人は靴紐、右足の靴紐が解け、それが足にひっかかったのだ。

ゴールテープを目前にして、こけました。

顔面が地面に激突した、隕石が衝突したかのような気がした、そして。

目の前をVが駆け抜けて行く、テープを切った。

この瞬間、桜が丘のキモオタによる反乱は終わりを告げた。

イケメンにひれ伏しなさいよこの粗大ゴミ！

本日は、晴天ナリ。

今日は7月第2週の月曜日、要するにマラソン大会明けの週である。

「うおい、平沢。何してんだ」

「うるせえ・・・」

「マラソン大会で2位取ったのに何だこの不貞腐れたキモオタは・・・」

そう、平沢凜。俺は先週の土曜日に行われたマラソン大会で男子の部2着。

数多のイケメン共の屍を積み上げ、結果もぎ取ったのは1番ではなく2番。

最後の最後で、靴紐につまずいてこけたばかりに・・・。

あれは、はっきり言って最悪だった。

何が最悪だったのかはもちろんこけたことにより1位を逃し、イケ

メン共に全面降伏を喫したことだけではない。

大衆の目の前で、可愛らしい桜が丘の女子生徒達の目の前でゴールテープを目前にしてこけるアホなど前代未聞。

つまずいて立ち上がった俺の顔はそれはミイラのように死んでおり、餓死直前のように精気が感じられなかったらしい。

そしてすぐ横には1着でゴールした水泳部期待の超新星Vがリア充を満喫していた、それでさらにメンタルダメージが加速。

物理法則を無視した速度で俺の精神は削り取られていき、酔っ払いのような千鳥足でなんとかゴールを切ったところまで思いだした。

ああ・・何だかストレスで禿げる、いや禿げるじゃなくてもげる、髪が全部、全身の毛も含めて。

そして俺はその後先にゴールしていたのどっちに怒られた。

『だからあれだけ靴紐はしっかり結びなさいって言ったでしょ！私の言ったこと右から左だったんじゃないの！』

と、これまでの健闘など一切讃えてくれることもなく、ガミガミとお得意のマシガントークを如何なく発揮してくれた。

これだけならまだ良かった、まだマシだった。

これだけではなく、その後周りの女子からヒソヒソ話で噂されていたのもだいぶ応えた。

『ね、ねえ。あの人・・・V君の後にゴールした2着の人？』

『そ、ゴール目の前にしてこけるなんて漫画みたいよねー』

『ちよ、ちよつと！失礼だよ！聞こえるかも！』

『いって、どうせあの人キモオタだもん。悪口雑言には慣れてるし』

『で、でも・・・』

全部聞こえてるんですけどね、一字一句漏らさず。

くそう・・・あそこでVに勝っていれば・・・きつと今喋っていた桜が丘のギャル達も俺のことを見直していたはずなのに・・・。

そして追い打ちはこれで終わらなかった。

数十分後遅れてゴールしてきた軽音部の方々が、俺の結果をのどつちに聞きに行ったのだ。

当然のどつちは事実をありのままに伝え、それプラス で悪い尾ひれをたんまりとつけてくれる。

『なんだー、凜。お前こけるなんて間抜けだなー』

『でもゴール直前でこけるって凜君らしいわー』

『ひ、平沢君・・・その、残念だったな』

『2位でも、・・・頑張ったと思う』

と労わりの言葉をかけてくれた二名と、どう考えてもこちらをおちよくっているようにしか見えない二名はおいといて。

やばかったのは身内のお二人である、特に姉ちゃんの落胆っぷりと憂の噴火具合が半端なかった。

『りんたあん・・・1位』

と涙目で訴えてくる姉ちゃん、そんなに残念だったんですか・・・ごめんなさい。

と思っていたが違ったようで。

『私が変なプレッシャーかけるから・・・ごめんなさい!』

と泣いて謝りだす始末に、唯でさえワナワナしていた憂の怒りが爆発。

『だから言ったでしょ! 靴紐、水分補給、折り返し地点! 全部確認したのかって!』

な、何故にこの妹は俺の頑張りを全く評価してくれないのか・・・。

そんなにお前はお兄ちゃん嫌いか！お兄ちゃん家出するぞ！キモオタを引き取ってくれるような人いないけど！

まあ、そんなこんなで褒めてくれたのは秋山さんと中野さんの二人だけ。

全校生徒の女子生徒の笑い物にされ、イケメン共には馬鹿にされ、のどっちには叱られ、デコさんには冷やかされ、眉毛さんには弄られ、姉ちゃんを泣かし、最後に憂のサンダーフォースをその身で受け止めた俺の疲労は限界を突破したのである。

日曜日は死んだように眠り、今現在もこうして休み時間は机に突っ伏して疲労回復に勤しんでいる。

そう言えば俺がこける直前に、声を張り上げて危険を知らせてくれたのは他でもないのどっちだった。

俺の日頃のアホっぷりを見ているのどっちは何処かで馬鹿をやらかすんじゃないかとハラハラしていたらしい、そして案の定心配した通りの結末になってしまったと。

流石に靴紐が解けてこけるなんてアホ過ぎるよね・・・ごめんよのどっち。

2位を取ったのだからあれからクラスでの扱いも少し変わるかと思っただが、相変わらずエンジェル女子達は俺達キモオタを避ける。

2位おめでとう！という言葉よりも先にきつと『キモオタが変に頑張るから罰が下ったのよ！大人しくイケメンにひれ伏しなさいよこの粗大ゴミ！』とかの言葉が喉に突っかかっているんだろうなあ・ハア。

俺の想像としては『平沢君お疲れ様！凄かったよ！』とか『見直しちゃった、かつこよかった・かも』とか・。

うひひひひいー！な展開を期待してたんだよおおおおお！  
ぐすつ・。。

あー、もうダメだ今日は。

ヤル気でない、2限目も寝る、夢の中でミさんに慰めてもらおう、悲しくなんてないやい！

ピリツンの御坂 琴が出てくるのだけは簡便な！

と俺が机に突っ伏す直前に、黒板の横に押しピンで止まっていたカレンダーが目に入った。

今日は7月の第2週目の月曜日だよな・あれ？

来週の月曜日に何だか赤い丸が・ついてるぞ？

あれは何だね？

「つつかもう来週テストかよ、またアニメが見れなくなる」

「おいアニ研の頭脳、それはテスト期間中に勉強をする奴だけが言っている言葉だ」

「るせー、テストが気になって思い切りアニメを見れないのが問題だろ」

とキモオタ・・・じゃなかった、アニ研の連中の言葉が耳に入る。

テス・・・テス・・・あーあー、マイク・・・じゃなかった。

「テスト・・・？」

「あ、何だ起きてたのか平沢。お前来週からテストだけど何か準備したのか？」

赤い丸・・・7月の半ば・・・夏休みの前・・・焦るアニ研のキモオタ。

これだけの情報があれば十分です、来週の月曜日行われるのは。

「期末テストあるじゃあああああん！」



澤ちゃんとあずにゃんが来ないから活動休止なんだって

時刻は17時、場所は図書館、周りには数人の生徒、隣には姉ちゃん。

お分かり頂けたらどうか？

そう、私キモオタこと平沢凜は今図書館で期末テストの猛勉強中・

何故柄にもなく図書館なのかって？

ふ・・そんなことを聞くのは野暮というものだよ。

私のような頭の良い学生にとって図書館はマイハウス、マイルームと同じなのだ。

何時もいかなる時も数式を頭に思い浮かべ、英語の単語が脳内を渦巻いているような学生。

それが、この私・・。

それが、この私・・・と

この俺と正反対の人物像だっつーの！

図書館がマイハウスだとかマイルームとかアホか！発狂するわ！

此処にはPCもミ　さんもMegp　idさんもいねーじゃねーか！

あるのは瓦礫の山と化している可燃物！もとい本！

俺は学校が終わってア二研もサッカー同好会もないんだったら速攻で帰宅して自室に入りPCの電源を付けて、手を洗ってPCのpasswordを入れて、着替えてる最中にPCが立ちあがって、すぐにでもクさんのエンジェルヴォイスを聞きたいのに！

妹が家に入れてくれないんですっつうっつうっつう。

憂ちゃん曰く『お兄ちゃん、次の物理で青点、赤点とったらホントに危ないから！』らしい。

憂の言う通り今回の物理は滑車がやら力学やらようするに俺の力が全く及ばない範囲に突入している。

俺は物理の時間にはお眠りすることに定評があつて、毎度ながら隣で同じくぐーすか惰眠を貪っている、『前回俺の地獄耳によって会話を聞きとられて可哀そうな』C子と一緒に教師に机を叩かれまして。

その反動で俺は背中をピン、と伸ばしガバっと起き上がり、跳ねあがった。

まあ、その時教師さんは俺を覗きこんでいる訳で。

俺の後頭部と教師の禿げデコが運命の出会いを果たしました。

ちなみに教師の眼鏡は無事でした。

キモオタと禿げが見つめ合う瞬間、素敵なお話が始まったとき、めでたしめでたし。

とまあ、こんな感じで俺は物理の時間はまるで駄目なんです、無理です。

どれくらい駄目で無理かと言うとの た君がド えもんに一週間助けを借りないくらいに無理です、要するに不可能なんじゃない。

そんな俺の現状を見て憂はサンダーフォースを詠唱、こうやってテスト前は図書館に拉致監禁されてしまうのだ。

「りんたん、勉強頑張ってる〜?」

「回答欄を白黒で埋める作業なら任せろ!」

んで、何故姉ちゃんがいるんだろうか。

軽音部はテスト前は部室で勉強とかしてた気がするんだけど。

あ、勉強会という名のお茶会でした。

「姉ちゃん、軽音部は？」

「うーん、今日は澪ちゃんとあずにゃんが来ないから活動休止なんだって」

何故にあの二人？

軽音部から皆勤賞貰っても良いようなあの二人が同時に休むとは・・・  
明日はまさか俺告白されるのか。

ふへへ、明日どんな格好で登校しよう。

あ、要らない心配ですかそうですかそうですよねー。

あー、空から女の子降ってこないかしら・・・それで俺の部屋に落ちてきて、実は宇宙人で皆に見られちゃいけないから俺の部屋に住みついて、二人のドキドキワクワク同棲生活がスタート！とか・・・。

が、そんな俺のキモオタ全開モードも姉ちゃんの次の言葉で一気に現実に戻された。

「今日二人は水泳部のV君とソフトボール部のY君と一緒に帰るんだって！」

「・・・は？」

FFのストップが発動したかと思った。

い、今・・・このお方は、マイシスターは・・・なんとおっしゃった？

「りっちゃん達はデートだデート！って言ってたけど」

「で、DATE？」

「ちがうよ、デートだよ」

で、デート・・・？

データじゃなくて、デート・・・？

デートとは。

以下広辞苑より抜粋。

日付と場所を決めて異性と

なんちゃらかんちゃら

うおおおおあああああ！？

デート！？？マジでデートなの！？？デートってあのデートでしょ！？？

俺が毎日ミィさんとやってる奴でしょ！？PCの中で！

そのの三次元版なの！？液晶の味がないデートってどういうことだ  
ごるあああああ！

意味が分からん！誰か説明してくれ！よりによってなんであの二人  
なの！？

Yの目論見は俺がマラソン大会で阻止したはずじゃん！直接じゃな  
いけど！

つうかVって何だ！何でVが此処で出てくんの！？

Vはマラソン大会でたくさんのお可愛らしくて美しい女子共に囲まれ  
ていたじゃねーか！

あの中に彼女いねーの！？いねーんだったらあの中から作れよアホ  
たれえええええええ！

「姫子ちゃんも一緒に帰るって言ってたかな」

ひ、姫・・・子。

ということとは立花さん！？

ば、馬鹿な・・・VはともかくYは立花さんの目の前で奈落の底に落  
ちて行ったはずなのに・・・。

Yが中野さんと一緒に放課後デートとかいうリア充度一千億のプラ  
ンは俺がへし折ったはずなのに・・・。

ぐぬぬぬ。

こ、此処であーだこーだ言っても意味がない！

とにかく行動あるのみだ！

物理の勉強なんてしてられるか！

「姉ちゃん！」

「どうしたの？」

「俺ちよつと用事思い出した、先帰る！」

「り、りんたん？」

「クさんと同じくらい大切なお方がピンチなんだ！」



お兄ちゃんは晩御飯抜き！

なんといつごとでじょう。

平沢凜の視線の先に居る男女4人は、彼が100年かけても一生味わえないであろうリア充を満喫していた。

嗚呼、キモオタの神様よ。

貴方の力でリア充の神様をやってください、それはもう思いつ

きりに、跡形も無いくらいに・・・。

ああ、単純な力関係でキモオタの神様がリア充の神様に勝てる訳ないよね・・・。

ならば俺が神に代わって天罰下してやるーかちくしょおおおあああがあああああ！

「YとVの野郎お・・・！」

今、俺の視線の先には先ほども述べた通りリア充を満喫している男女が4人。

俺は姉ちゃんと別れた後速攻で学校を出て、チャリで周囲を散策した。

死に物狂いでチャリをこいだせいか足が痛い、これは明日は筋肉痛だな学校さぼろう。

まあそのおかげでターゲットは思いのほか早く見つかった。

YとV、そして・・・み、認めたくないのだがあのお美しい後ろ姿は

間違いなく秋山さんで、揺れるツインテールが超キュートなお方は間違いなく中野さん・・・。

くおおおおおおあああああ！？

こ、この事実を認識しただけで頭が爆発しそうだ、どうにかしてくれ。

4人は商店街の街並みを歩いていて・・・それはもう、絵になっていました。

そりゃあそうだよな、内面真つ黒東京湾のヘドロ級に汚いあのYだって見た目はジャーズ級だもんね。

Vに関しては言うまでも無いでしょ、ていうか言ったら自分が惨めだから言いたくないわい。

ちくしょう、とある国に行って顔面舗装して貰おうかな・・・。

ああ！？Yの野郎・・・！

何ジューズ渡しながらさりげなく中野さんのお美しいお手を触つてやがる！そのお手手を触るんじゃないやねえ！エンジェルハンドが穢れるだろーが！

う、Vの奴そんなイケメン度120%の笑顔で秋山さんに話しかけないで願います！もう二度と俺の汚い顔見てもらえないかもしれないじゃないか！

つつか男女4人でコンビニに寄ってジューズやアイス買って喋って

るとか何処の青春ドラマですか！？この現実はいくシオンなんですか！？いや現実がフィクションておかしいだろ常識的に考えて！？

一人でこうやってサングラスかけてペットボトル片手に4人をガン見してる俺はストーカーですか！？変態ですか！？それともそういう星の下に生まれた可哀そうな奴なんですよね本当にありがとうございましたあああああ！？

うわ、秋山さん顔真っ赤にしてる、そこにいるVは貴方より一ツ年下のチエリーボーイなんですよ！何もじもじしちゃってるんですかあああああ！？

そのイケメンに惑わされないで！奴はきつとマラソン大会で優勝した際に他の女の子にも手を出している！そうに違いない！

な、中野・・・さん？

ななななな、何をしているんです？

Yとあど、あどれ・・・アドレス交換・・・だとおおお！？

止めてええええええ！

中野さんの神聖なる携帯電話に、Yの暗黒ウイルスがああああああ！

うわあああああ。

Y、てめえも『送信完了だね（ほし）』みたいな気持ち悪い笑みを中野さんに向けるんじゃないやねえええええええ！

お、俺が・俺が、俺がイケメンならば！イケメンならばあの場に飛び込んで行って邪魔出来るのに！

ていうか秋山さん、貴方さっきから間違いなく表情がきらきらしてますよね！？

俺の前じゃ絶対そんな表情してくださいませんでしたよね！？

顔真っ赤にして俯いてても俺の目は誤魔化せないですよ・あはは・。

現実は・現実、フィクションよりも残酷でした。

おかしいな・悲しいのに、笑っちゃうよ・ふはあはは。

ミさん・俺はもうダメかもしれない。

現実世界に、挫けそう・というか、挫けました。

立花さん・居ないし、こんな地獄絵図（自分にとって）を作り出してしまった理由を問いつめたかったけど。

というかYの野郎は確かマラソン大会で1位になったら、そのご褒美として立花さんから姉ちゃん経由で、中野さんと一緒に帰る約束をして貰うんじゃないの？

。 奴はWと共に俺の目の前で奈落の底に落ちていったじゃんかよお・。

もしかそこで慈悲を・要らぬ情けをかけたんですか！？

『3位だけど、頑張ったね。唯にお願いしてみるよ』

とかメラゾーマ級の一撃を放ってしまわれたのですか!?

Yの野郎・・立花さんの優しさにつけ込んで、泣いてお願いしたに  
違いない!

何処までも汚い野郎だ、そしてどうしてこの場にVと秋山さんが紛  
れ込んでしまっているのかは検討もつかねー・・。

もうこれ以上は見てられん、俺の目がリア充の輝きで失明しちゃう・  
。。

帰ろう・・帰ってミさんに慰めて貰おう・・。

液晶の味しかしないけど・・。

「お帰り、りんたん！もう用事は済んだの？」

「お兄ちゃん、勉強は！？ちゃんと図書館で物理の滑車のところ復習した！？」

「……ごめんなさい」

「……お兄ちゃんは晩御飯抜き！」

「うそおおおおお！？」

お兄ちゃん買ってきてくれる？

「ぐぬう・・・」

只今土曜日の午前11時22分。

俺は眉間に皺を寄せまくって居ます。

何故か？答えは簡単、今俺は天敵である物理のお勉強をしているのです。

来週の月曜日から期末テストという名の怪物が襲いかかってくるからな、その下準備はしっかりせねばならん。

ならんのだが・・・。

「わからねええええええ！」

分からん！今更分からんものを分かるうとするこの努力全て無駄に思えてきた！どうしよう！

だいたい何なんですかこの学校は！理科系科目の化学生物物理1年の時に全てやらせるって！発狂するわ！



化学は『すいへーりーべーぼくのふね』までしか覚えていない！生物に至ってはミトコンドリアが単細胞生物か多細胞生物かも把握してない！物理に関しては言うまでもなかるうが！

不味い、今回赤点をとってしまったら、1学期で既に年間の赤点許容範囲である半分を使ってしまうことになる。

青点なんて考えたくも無い、どうしてこの世は学力と顔に関して此処まで不公平なのか・・・。

憂にヘルプを頼みたいところだが、今アイツは忙しいし。

実はこの平沢家に軽音楽部の全員が勉強会、という名目の下に集まって本日せつせと勉強している。

2年生は姉ちゃんの部屋で、1年生は1階のリビングで。

男は俺の部屋で。

あ、俺一人でした。

まあそんな訳で、朝の9時から各々頑張っているわけだが・・・やはり俺には不可能な気がしてきた。

だって授業中全部寝てるし・・・ノート取ってないし・・・教科書はよだれでぐちよぐちよだし。

と、とにかく12時になれば憂ちゃんが昼ごはん作ってくれる、それまで頑張ろう。

流石の憂も軽音部の方々の前では俺の勉強の進行状況を聞いて噴火することなどあるまい、そう信じている。

「だから！何回間違うんだ律！微分と積分の区別をつけなさい！」

「だ、だつてえ〜・・・」

「唯ちゃん、此処・・・ほら、また過去形と過去完了形間違ってるわ」

「あ、あれ・・・そもそも過去形と『かこかんりょうけい』って何が違うの？」

まあ苦戦してるのは俺だけじゃないらしい、隣ではマイシスターとデコの方が如何なくその低学力っぷりを発揮してくれている。

力強い味方だが、同じ学年じゃないだけに空しい・・・。

同学年の憂と中野さんはそりゃ凄まじい頭脳の持ち主だし・・・。

「お兄ちゃん、ちよつといい？」

「うにゃ？いいぞ」

噂をすれば何とやら、妹のご登場だ。

俺が机に参考書やらをほっぴり出して立ち上がると、憂が入ってきた。

「勉強はかどってる？」

「まあー・・・物理以外は、ぼちぼち」

「数学も？」

「数学はそこまで難しくはないなー、関数は中学の頃ある程度出来たし」

まあ、一番問題である物理が出来ないことには俺の未来に希望はないんだけどさ。

「そろそろご飯作ろうと思うんだけど、食材が足りなくて」

「何が足りねえの？」

「えつとね・・・ちょっと今みりんを切らしちゃって。お兄ちゃん買ってきてくれる？」

「ん、りょーかい。近くのスーパーに買いに行ってくる」

まあこの手のお使いは慣れたもんだ、あと30分くらい無意味な物理の勉強なんてかつたるいし。

少しはいい気分転換になるはず。

俺は憂からお小遣いを貰い、靴を履いて外へと出た。

しかし・・・。

実は俺は、この時自分が犯した重大なミスに気付いていなかった。

おそらく、自分の部屋に居て数時間違うことをしていたからすっかり忘れていたのだろう。

自分が部屋に居る時は十中八九、アレの前に居る訳だ。

そして今日の朝も同じだった、軽音部の美女達が来る前まではしっかりとソイツの前でハアハアしていたんだから。

でもその後は、机に向かって勉強するという非日常の世界・・・。

俺が忘れてしまうのも、最もだろう。

そして憂が来たのがいけなかった。

憂が着たことにより、俺の全神経は憂に余すところなく集中される訳であって、それ以外のモノに対して注意力が散漫になってしまう。

そんな憂と一緒に階段を下りて、靴を履いてお金を貰って・・・。

もう此処まで言えば皆分かるはずだ、俺が何をやらかしてしまったのか・・・！

次回に続く！

ちよ、し、失礼ですよ律先輩

「えーと・・・みりん。あ、そっぴや料理酒も」

俺は近場のスーパーで憂に頼まれたお使いをせつせとこなしている。確かみりんだけじゃなくて料理酒も危なかったはずだ、こないだ生姜焼きをした時デッドラインを切っていたはず。

言っておきますけど俺も一応料理出来るんですよ！人並み程度とは言えませんがある程度は！

憂が風邪引いた時とかは姉ちゃんじゃなくて俺が作ってるんだからね！

姉ちゃんと憂はいつも半目になりながら美味しいって言うってくれるよ！

言っておくが憂が上手すぎるだけだぞ！二人とも味覚がいかれちまってるんだ！

とりあえず買うモンは全部買ったし・・・帰るか。

「いらっしやいませー、お会計　円になります」

「へーい」

うは、今日のレジのお姉さんは大学生の美人系。

こないだは可愛い系の大学生だったけど、美人系も・・・良い！

凜は相手の顔に穴が開くかと思われる程の目力でレジのお姉さんを見つめた！

効果は抜群だ！

お姉さんは不快そうに表情を歪めながらも、営業スマイルで頑張っている！

「あ、ありがとうございます・・・」

「うへーいひひ」

あー、いいもの拝めさせてもらいました。

目の保養になります、これで今夜の  
ゲットだぜ！

「あー・・・疲れた」

「む、むぎちゃん・・・頭が痛いよう」

場所は変わってここは平沢家、唯の部屋。

今1階では平沢家の末っ子憂が昼ごはんを作っている。

「まだ2時間ちょっとしか勉強してないぞ？」

「そんなこと言ってもなー、使わない部分を使うのは思っている以上疲労が伴うものなんだぞ」

「おい」

「律先輩、日頃勉強してないことを暴露しちゃってますよ」

唯の部屋には憂以外の人間、つまり軽音部が集合している。

彼女達は来週の月曜日に迫った期末テストへ向けて猛勉強中だ、中でもとある二人が周りに比べてぶっちりに学力が低いため、こうして学習会を開かなければ何処ぞの弟のように赤点や青点を取ってしまう。



テストの度に漣と紬はこうして教師として召集される訳だが、その場凌ぎの勉強をとある二人は行っているため、一向に学力が向上しない。

「そう言えば凜君は何処に？」

「りんたんは憂に頼まれてお使いにいったよー、みりん切らしてるの」

「へえー、上手いこと使われてんなあ凜の奴も」

律が下敷きで首元を仰ぎながら感心したように言う。

「平沢君も部屋で勉強してたんだよな」

漣が唯に尋ねると。

「そうだよー、りんたんも私と一緒に通知表に赤や青の印がついてくる子なんだー」

えへへー、と返す唯に。

「それって馬鹿じゃん！」

突っ込む律の言葉に対して。

「ちよ、し、失礼ですよ律先輩」

フォローする梓だったが。

「やっぱり唯ちゃんの弟だわー」

紬の容赦ない一撃が降り注いだ。

憂の唇ごはんが出来るまで時間を持て余していた5人。

だらんとしていた空気の中で律が声を上げた。

「そついえばむぎ、夏合宿の別荘は何処にあるんだ？」

「ああ、それなら・・・えっと、  
x県 市xyz丁目」

「わ、わからん」

「地図はないんですか？先輩」

「じゅめんなさい、今日はちょっと持ってなくて・・・」

今話題に上がっているのは夏の合宿の件だ。

軽音部は去年合宿というなのキャンプを紬の別荘で行っており、練習なんてほったらかして遊び散らした楽しいイベントを今年も企画している。

今年は去年とは違う別荘をまた紬が借りてくれたらしいが、さて。

「別にまた今度でいいんじゃないか？」

「待て溲。部長として知っておくべきことがあるんだ！」

「いや意味が分からないぞ」

「パソコンとかないのか？唯」

今の時代には地図よりも遥かに便利なパソコンというものがある。

google 地図大先生に住所を入力してワンクリックしてしまえば、あら不思議。

探していた目的地が一瞬で表示されるのだ。

「パソコンはりんたんの部屋にあるけど」

「凜の部屋か・・・でも今アイツ外出中なんだろう？」

「みたいですね」

「流石に無断で使っつていうのは悪いぞ律」

律は凜のパソコンを使う気満々だったようだが、やはりそれを良しとしないのは他のメンバーだ。

むう、と唸って律は手を組んで考える。

要するに此処は身内である唯を納得させればいい訳だ。

お菓子で釣るか・・・？駄目だ、すぐに憂の昏ごはん。

モノか・・・？これもダメだ、お金を持っていない。

となれば・・・言葉で納得させるしかない。

「うーん・・・ダメか唯？」

「やっぱり駄目じゃないかなあ・・・。難しいけど、『ぶらいばーのしんがい』になるもん」

「じゃあ・・・使ってる間ずっと唯が見てるのはどうだ？」

「え？」

「身内なら別に大丈夫だろ？そこで唯が駄目だと思ったら、ストッブをかければいい訳だしさ。別にちよつと地図見るだけだから、携帯電話のメールとか見るわけじゃないんだしさー」

「うーん・・・そういうことなら大丈夫なのかな」

「え、唯先輩いいんですか!？」

「そつだぞ唯」

少しばかり唯が揺らいでいる、これは了承を得られるまでもうひと押しだ。

律は唯の気持ちが変わらない内に畳みかける。

「別にやましいことをしようって訳じゃないんだし、地図見るだけだ」

「地図見るだけなら・・・確かに私や憂も時々やってるし、大丈夫だと思っ」

「いいの？唯ちゃん」

「うん、私も憂もパソコンは使わせて貰ってるし、それくらいなら」

「やった！」

「おい・・・本当にいいのか唯？」

こうして軽音部一行が凜の部屋へとゲルマン民族よろしく大移動することとなった。

## 唯先輩、パソコンは

「おお、此処がかの平沢凜の部屋かあゝ！」

「お、大げさですよ律先輩」

今律を先頭とした軽音部ご一行は平沢凜の部屋にやってきた。

皆それぞれ早速物色を始める、最初は乗り気でなかった漣や梓もいざ入るとなれば話は別。

なんせ二人は初めて同年代の男の部屋に入るのである、興味が湧かないと言ったら嘘になる。

しかし・・・。

「案外何もないんですね、凜君のお部屋」

「というか唯の部屋より綺麗に片付いているのが意外だ」

「り、りっちゃん！それどういう意味!？」

そう、平沢凜の部屋は特に変わった点はない。

目に付く点と言えば、地元サッカーチームのポスターと、DUNL Pのバイクポスター。

そして唯が憂からプレゼントされたと思われるぬいぐるみが多数、それ以外は特におかしくもなんともない。

律は友人から平沢凜が凄い趣味を持った子だと聞いたことがあったのだが、この部屋模様を見れば高校生らしい趣味を持っていると思う。

「これは・・・バイクのヘルメット？」

「お、なんだ溌。被りたいのか？」

「い、いやそんなことは」

確か凜はバイクを持っていなかったはずだが・・・。

「そのヘルメット、りんたんがお父さんから借りてるんだ。二人で『ツーりんぐ』とか偶に行くみたい」

「ツーりんぐ?」

「むぎ、ツーリングってのはバイクに乗ってドライブするって考え

「いい」

なるほど、だからバイクのポスターか。

しかしところどころ凹んでいるような気がするの……目の錯覚か？

まるで何かで殴られたような跡だが、気にしない方がいいだろう。

決してその原因を唯に聞いてはいけないと律の直感が叫んでいた。

「唯先輩、パソコンは」

「あ、うん。それっ」

唯の人差し指が電源ボタンを押すと、画面が光り出した。

「あれ……でも確か、パソコンってだいたいロックがかかってるよな？」

「あ……」

「言われてみれば確かにそうですね」

盲点だった、と溻に指摘されて律はでこを抱える。

確かにパソコンは他の誰かに使われないようにロックがかかっている場合が多い、当然と言えば当然だが……。

「あれ？でも大丈夫みたいだよ！」



「きつと『省エネモード』とかいうのになつてたのよ、最近のパソコンは賢いから人が居ないとそのモードになるんだって」

「よかったです・・・あ」

此処で梓はふと気付く。

確か平沢凜は『アニメ同好会』という同好会に入っている。

そこでは俗に言う『オタク』文化の研究が日夜行われており、残念なことに良い噂を聞いたことがない。

同じクラスに凜を含め数人のアニメ同好会が在籍している梓だが、その光景を思い浮かべてみると・・・。

休み時間中には声を大にしてアニメキャラクターの×が可愛いと叫び、ブルーレイやDVDの取りあいで喧嘩、授業中に取り上げられたノートには美少女キャラクターのお絵かき、おまけの情報教室を放課後陣取ってパソコンを部活動の申請無しに無断使用・・・。

とてもじゃないが褒められる内容ではない。

そしておそらくこのパソコンの中には、そのアニメ同好会に関するデータが大量に入っているはずだ。

梓は具体的に彼らがどんなモノを見て興奮しているのか知らないが、

純から聴いた所によると『気持ち悪い』と一刀両断。

アニメに出てくる美少女キャラクターを『俺の嫁』とか言っているらしい。

それを聞いた時は流石の梓も頭にくらつと来たのをよく覚えており、その時から段々と平沢凜との間に壁が出来あがり、無意識のうちに距離をとっていたような・・・。

周りを見渡せば、唯を始めとした他の先輩たちは画面に釘付けで、今から何が起こるのか知る由も無い。

と、止めるべきなのだろうか。

自然と嫌な汗が額に滲んだ、このままでは何だか取り返しがつかないことになるような気がする。

「梓？どうしたんだ、体調でも悪いのか？」

優れない梓の表情を見て漣が声をかけてくる、その優しさが今は余計に焦りを増長させる。

「い、いえ・・・そ、その」

ど、どうすればいいんだろう。

おそらく軽音部の先輩たちは唯を除いて平沢凜が『オタク趣味』の持ち主であることを知らない。

そして平沢凜が伝えていないということは、この趣味はきつと軽音部の人達には知られたくない内容なのだろう。

普段クラスであれだけ『自分はオタクです』と豪語し、オープンになっている彼がそこまでひた隠すというのならば、そうに決まっている。

それに自分だってあの趣味は、その・・あまり好きではないし、やっぱり気持ち悪いと思う。

気持ち悪いものとは流石に梓だつて避けたいと思う、まあそれが此処1、2カ月の間態度となつて出てしまい、平沢凜と疎遠になつてしまったのだが。

しかし最近はそういう趣味を持っている知つていても、何だか普通に話せている自分が居た。

梓の場合同じクラスのため嫌でも同じ時間を過ごし、同じ場所で過ごすのだから、オタクだから嫌い、気持ち悪いという一言では済まされなかつたものもある。

それに平沢凜はあのサッカー同好会に所属しているのだ。

オタクの話題にと関係性が皆無な彼らと一緒に話して、サッカーをしているのだからいいところだつてあるだろう。

・たぶん。

だが先輩達はそうもいかない、そもそも一緒にいる時間は皆無、部活動は違うし、学年だって。

もしこれだけの人数から一気に嫌われたら、梓だって嫌になるところか不登校になってしまいかもしれない。

止めたほうが、いいだろう。

此処は身内である唯に頼って、なんとか凌いで貰わないと・・・。

だがしかし、現実はその様な梓の苦悩などお構い無しだった。

「お、画面が映っ・・・」

「え・・・？」

「これは・・・？」

梓が一人であれこれ考えていた内に、パソコンが立ち上がってしまったのである。

えへへ、あずにゃんもりんたんが大好きなの？（前書き）

月4回更新と言いながら9月は3回となってしまいました、本当にすみません。

10月は少なくとも5回は更新します、ご迷惑をおかけしました。

今回は9月分ということので、規定時間外の投稿となります。

えへへ、あずにゃんもりんたんが大好きなの？

「あ、立ちあがったね」

唯が早速パソコンに手を伸ばすが、皆が発す空気が変わったのを肌で感じて動きを止める。

「皆どうしたの？りっちゃん早く調べようよ」

「なるほど、こういうことか。私の弟もアニメ好きだしなー。じゃあ、むぎお願い」

「はい、でもその前にこの画面に映ってる女の子は誰なのかしら？」

「これはねー、初音クって言って、りんたんが大好きなキャラクターなんだよっ」

「アニメか何かに出てるの？」

「ううん、確か×　　ってキャラクターで、『でじたるおんせい』で歌ってくれるキャラクターなんだって」

「へえー・・・今はデータが歌う時代なんだな」

漣が感心したかのように頷き、画面を見つめる。

律も袖もさして画面に映っている女の子に対して何も言わず、すぐにGo gie先生を立ちあげて夏の合宿所を探し始めた。

自分の予想と違い全く画像に突っ込まない先輩達の姿にしばし自分を見失っていた梓だったが、はっとして声を上げる。

「せ、先輩？」

「ん、何？」

梓は隣に立っていた律に声をかける。

「そ、その・・・この画像についてなんですけど」

「ああ、凜の趣味が反映されてるよなー」

「あ、はい・・・そうなんですけど」

「私の弟もアニメが大好きでさ、こういうキャラクターよく登場するんだ」

「え・・・はあ」

どうやら律は凜のパソコンの壁紙については本当に何も思わなかったらしい、趣味の一環であると位置付けているようだ。

だが梓としてはやはりそれを趣味の一環としては片付けられない、画面に映っている女の子はそれは確かに可愛いが、髪の色は緑だし手にはネギを持っているし、その周りに女の子をデフォルトしたか



のような小さい子がいっぱい映っている。

どう考えても非現実的であり、これが所謂オタク文化・想像していたのとは違って気持ち悪いとは思わないが、多少引き気味になっ  
てしまう。

それに対して律達は全くそんな様子を見せない、気にする素振りさ  
えない。

紬は今まで除いたことのない世界に興味津津、漣に至ってはデー  
タが歌うという事柄に感心してしまっている。

「あずにゃんどうしたの？」

そんな落ち着かない自分の態度を見て気にかけてた唯が尋ねてきた。

「そ、その！先輩たちはこ、この画像について何も思わないんです  
か？」

「この画像？」

「はい、この初音 クです！」

その問いにいち早く答えたのはやはり身内である唯だった。

「りんたんはオタクだから、こういうの大好きで壁紙にしてるんじ  
ゃないのかな？」

だが若干論点がずれている。

「そ、そういうことじゃなくて・・・」

「む、さては梓。こういうアニメとか苦手なのか？」

「え、えっと。そんな感じですよ」

自分の気持ちを代弁してくれた律に感謝しつつ、どうしてこんなことを聞いてしまったんだろうと頭を抱えながら梓は続ける。

「唯先輩も言ったけど、こういうのってオタクの文化じゃないですか。嫌だな〜とか、思ったりしないんですか？」

「「「「・・・」」」」

静まり返ってしまった、なんて馬鹿な質問をしたんだろうと、今度は頭が痛くなり始めたその矢先だった。

「あはは、そんな訳ないよ〜」

「そうそう、そんな小さなこと気にしてたら溼のメルヘン成分なんてどうするんだ？」

「り、律！これとそれとは話が別じゃないか！」

「でも皆の言う通り、個人の趣味なんだから何も思わないわね」  
先輩達は皆笑ってその問いに答え、話は済んだと再び画面へと目を移す。

一人だけ場違いな空気を纏ってしまった梓は居たたまれない気持ちになってしまった。

先輩達の言う通り、クラスの皆が言っていたことは小さなことで、鼻で笑い飛ばせるくらいどうでもいいことなのだろうか？

いやでも、そうじゃないから皆はアニメ研究会のことを煙たく思っているわけだし・・・もしかしたらこの人達が異端なのか！？

それとも自分を含めたクラスの皆は、鼻で笑い飛ばせることに固執している小さな人間ということなのか！？

ぐるぐるとまるでハツカネズミのように考えが回り始めて纏まらな  
い、一人浮いてしまっている。

「あずにゃんは嫌って思うの？」

表情が優れない梓に気付いた唯が尋ねる、他のメンバーは大先生の  
地図に釘付けだが・・・。

「いや、その・・・嫌って訳じゃ・・・」

「あはは、憂もあずにゃんと同じ感じだから気持ちは分かるよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん、憂も何度もりんたんからパソコン取り上げようとして、その度にりんたんが泣きながら憂に謝ってて凄いなあ」

「は、はあ・・・」

パソコンのプラグを抜きとって外に持ち去ろうとしている憂、それだけはやめてくれと泣き叫びながら憂の足に捕まって引きずられていく凜。

想像出来てしまうのが怖い、外でも中でも彼は憂の尻に轢かれてい  
るのか・・・。

「でもさ、何回目かの時にね、りんたんが『これが無くなったら俺  
が俺じゃなくなっちゃうんだあああ！』って叫んで」

「うっ・・・」

「それからね、憂はパソコンを持ちだそうとすることはなくなった  
んだよ」

「ど、どうしてですか？」

「だって、憂はりんたんが大好きなんだもん」

「え？」

意味が分からない、今の話からどうやって憂が凜のことが大好きで  
ある、ということに繋がっていくのか。

「こーいうの全部含めて、りんたんだから。何か一つでも欠けちゃったら、りんたんじゃなくなっちゃうでしょ？」

「それは・・・そうかもしれないけど」

「だからだよ、憂が止めたの。バイクが好き、女の子が好き、アニメが好き・・・そーいうのも全部ひっくりくるめたりんたんが、私達は大好きなんだあ。りんたんが、変わっちゃったら嫌だもん」

「・・・唯先輩」

彼女の言う通りなのか。

細部の小さなこと一つ一つが気になってしまった、全体像を見ていない。

もう遠い昔のことのように感じるが、一緒に音楽室まで行った凜も、補修の英語が分からなくてさりげなく自分に教えてくれた凜も、マラソン大会で最後にこけたけど2位に入った凜も、アニメオタクで学校で騒いでいる凜も、全部同じ平沢凜なのだから。

自分は今までの全部をひっくりくるめた平沢凜が嫌いなのか・・・？

いや、そんなことはないはずだ。

嫌いじゃないから、彼が嫌われるようなことは避けようとパソコンの起動を止めようとしたのではないか？

むう、と考えていた梓が微笑ましかったのか、唯は突拍子もないこ

とを尋ねてきた。

「えへへ、あずにゃんもりんたんが大好きなの？」

「えッ！？な、なな何を！？そ、そんなことないです！」

えへへ、あずにゃんもりんたんが大好きなの？（後書き）

私の経験上りんたんと同じように、女性がオタクの趣味を受け入れてくれたケースはあんまりないですねえ〜・  
パターンとしては

確率高：彼氏がオタクである

確率並：自分がオタクである

確率低：極度のジャニオタ、ロックなど、多少一般人とは違う趣味を持っている

確率神：素晴らしい女性である

番外：自分がイケメンであり、オタクでも許される

V君の後にゴールした2着の人？（前書き）

一気に場面が飛びます。



V君の後にゴールした2着の人？

.....。

.....。

夏休みのとある猛暑の昼下がりに、平沢凜が所属するクラスには生徒の影があつた。

普段はたくさん生徒達で溢れかえっており、やれサッカーの話だとか、やれ流行の話だとか、やれ　　は俺の嫁だとか、こういう話題で活気が満ちている。

それが今は夏休みが始まつたばかりということもあり、クラスにはたったの二名しかおらず普段の騒がしさは成りを顰め、蝉の声と部活動生の掛け声だけが木霊のように響く。

クーラーも止められてしまったこの教室で、その二つの影は何をしているのだろうか。

そして、何故こんなことになってしまったのか理由を知りたい、割とマジで。

「あちい・・・」

何なんですかこの地獄は。

あの、呼吸する度に汗が滴り落ちてくるんですけど何の間違いですかね。

今俺は自分の席に座って、物理の問題を解いている、要するに物理の補修。

どうしてこんなことになってしまったのか、説明するまでも・・・ない。

赤点取りました、見事に、一番取ってはいけない科目で。

事の発端は期末テストが行われた7月の月曜日まで遡る。

夏休みが来週に迫った週に、我々一般庶民に襲いかかってきたのは期末テストという名の人災。

俺は必至の思いで勉強したんだ！滑車だってやったしニュートンの法則だって初音　クさんしかない脳みそに思い切り叩きり込んだんだ！

なのに、なのに・・・何で電気抵抗の問題が半分出たんだよおおおおお！？

ふざけんな、俺は滑車が出ると思って、憂に泣きついて何とか教えて貰ったというのに、この酷い仕打ちは何なんですか！

もちろん俺は滑車の勉強しかしておらず、電気抵抗の応用問題なんか一問も解ける訳がない。

結果は見ての通りである、終業式の直前に全ての科目の答案用紙が返却されたんだが、即座に物理のテストは焼却処分しました。

だがしかし、今回は難問と言われていた数学では赤点を取らなかったんだから、そこは褒めて欲しい。

物理の返却が行われた時俺を指さして『ざまあ（笑）』とか『他人の不幸で今日もご飯が美味しいです（笑）』とか『単細胞体力馬鹿（笑）』とか散々馬鹿にしてくれたア二研の連中は、その後返却された数学のテストで顔面ブルーレイになりやがった訳だ。

もちろんその時は『ぶぎゃあああああ』って言ってやってたけどな！周りの視線がまるで汚物を見るようなモノだったとかは、気にしてる訳じゃないぞ！

そしてまあ、そんなことがあつたら雷神憂が黙っている訳が無い。

その日は俺が大嫌いなピーマンの肉詰めでした、そしてその後パソコンの件がまた出て泣きそうでした。

パソコンにサンダーフォースが落ちなかっただけマシか・・そのかわり俺のヘルメットにまた一つ新たな歴史（傷）が刻まれたけどな！

その後は無事に終業式を終えて夏休みスタート、そして一週間立つと補講もスタート。

これから補講が一週間毎日ある、というか物理だけを一日150分もするなんてこれは何の罰ゲームだよ、赤点の罰ゲームなんだけど。

校庭では部活動に所属している女子生徒達が黄色い声を上げ、ソフトボール部にはあの憎たらしいYもいた。

グラウンドの横に設置してあるプールではイケメンVが平成のトビウオよろしく泳いでいる、アイツ本当に日本の高校生か、パラレルワールドから来た異世界人に見える。

奴らが青春を謳歌し、アニ研の連中がクーラーの効いた自室でアニメを堪能し、軽音の皆さんはどうしてるか知らないがお茶会満喫してるのか・・。

こっちはクーラーも止められてしまった部屋で汗水たらしながら物理の問題と睨めっこしてゐるってのに。

この格差社会に俺は疑問を呈したい！誰が清き一票を！

と、此処で授業終了の鐘の音が。

この補講は4時間目から始まり、それがお昼を挟んで5 - 6と続く。

その間には当然昼休みがある訳だ、普段ならばア二研の連中と一緒に昼食を取るんだけど・・・今回は。

「お、お疲れ様平沢君」

「お疲れー・・・Cさん」

まさかの女子Cさんと二人きりである。

Cさんは、俺がVを始めとしたイケメン共に全面降伏を喫したあのマラソンの日に、俺のガラスのハートに容赦なくマシンガンを打ち込んだ張本人。

「ね、ねえ。あの人・・・V君の後にゴールした2着の人？」とか「ちよ、ちよっと！失礼だよ！聞こえるかも！」とか。

一字一句漏らさずまだ記憶してるんだよなあ、うばあー。

とうか今日の朝教室に入った時に、Cさんしかクラスに居ない時はマジでこれ誰かの策略か？俺の精神を勉強の前に削り取るうといあの禿げ教師の陰謀か？とも考えたくらい。

まあCさんは、物理の時間は俺と同じでスリーピングタイムだったからなあ、でもマジでついてない。

Cさんもクラスでぶつちぎりのキモオタである俺と一緒に補講とか拷問だろ、かわいそす。

普段の俺なら女子と二人きりだと超ハイテンションになるんだけど、いくらCさんが可愛くても露骨にこう避けられている人と一緒にいたら、その空間は唯の牢屋と一緒になんです。

案の定Cさんは引き攣った顔で何とか笑おうと口角を上げている。

頑張らないで！俺って一人の女性が頑張っても笑えないくらいに酷い顔なのかって思うじゃんか！

「それじゃ、私部活やってる友達とお昼取ってくるから」

「うーいよ」

そうやってやはりCさんはそそくさと退散する、クーラーの効いていない蒸し暑い部屋に取り残された俺は、一人寂しく憂が作られてきたピーマン弁当の風呂敷を開けて、空腹を処理することに。

つつかこれが後一週間も続くのか、何なんだこの悪夢は・・・。

と、りあえず、ピーマンを食べないと、憂がまた怒りだすし・・・はあああ  
あああ。

うわっ、平沢！

時刻は16時19分50秒。

16時20分まで、あ、あと・・・あと10秒だ！あと10秒でこの悪夢から解放される！

早く・・・早く鳴ってくれ！頭のネジが、溶け落ちそうだ！

「ん・・・もうこんな時間か。よし、今日の分は終了だ。明日も遅刻しないように」

終礼のチャイムと共に目の前の教師がようやくこの言葉を言った。

うはー・・・終わった。

「あとこの補講も半分だ、最終日はテストもあるから気を抜かないように」

「はい」

「うっ、うっ・・・」

そう言って教師は教室から出て行く。



ああ・・・夕日によって照らされる貴方のオレンジ色の禿げデコがとっても芸術的に見える・・・地獄が終わったと実感出来る・・・。

今日は補講が始まって3日目の水曜日。

月曜日から始まったこの地獄の補講も残すところ木曜日と金曜日の二日のみ。

俺がこのクーラーも聞かない熱帯教室で物理の補講を受けている間、姉ちゃんは軽音部でお茶会、憂は鈴木さんと一緒に買い物。

憎たらしいYはソフトボール部の女子部から黄色い声援を受け、イケメンVは相変わらず異世界人ぶりを発揮し続けている。

はつきり言ってもしYやVが教室から見える範囲で部活動をしてなかったら、精神的にもっと摩耗していたような・・・。

そりゃ物理だけを永遠考えるよりかは、Yに悪態ついたりVのイケメンに嫉妬とか色々してる方が精神衛生上良いのは当然ですよ。

少なくともあの二人に今どれだけ文句言っても何もないからなあ、目の前の物理に文句言ったらデコから火花が散るから！

「それじゃお疲れ様、また明日だね」

「ういすー、お疲れ様」

Cさんも席を立ち、服をパタパタと叩きながら暑苦しそくに教室から出て行く。

最初は拷問にしか考えられなかったCさんとの閉鎖空間も、だいぶマシになった。

一日目は『おはよう』『お疲れ様』しかなかった会話が、今じゃ休み時間に少し話せるようになったんだし。

このクラスで俺とまともに口を効いてくれるのは憂とCさんだけだよ！中野さんも加えちゃっていいかな！？

でもホントCさんの慈悲溢れる寛容な心には感服しました、こんなキモオタに喋る人権を与えて下さるとは・・・。

もうマラソン大会の直後俺に止めさしちゃったのとかどうでもいいよね！

もしかして明日とかは二人で一緒に帰っちゃうシーンとかあるんじゃない？

そして最終日には俺とCさんが一緒に帰って、嬉し恥ずかしながら手を繋いだりしちゃって・・・夕焼けが綺麗な公園の中で二人があああああ！

うっはああああああ！サイッコーだね！テンションあがってきたわああああああ！

Cさんは言わずもがな超可愛いし、もしかしてこのままロマンティック入っちゃう！？直前のロマキャンだけは勘弁な！精神がもげるから！

が、俺のそんな妄想爆発も携帯の音に霧散した。

全く・・・せつかく人がCさんとの夢の楽園生活を考えていたのに、その邪魔をする風情のない輩は誰なんだ。

ん・・・って、憂からのメールじゃん、えーと。

『学校の近くで買い物してるからお兄ちゃん荷物持ちに来て！』

・・・。

姉ちゃん使えよ、姉ちゃんを！

あのね、俺ついさっきまで君と違って勉強してたの！物理のお勉強を3時間も！分かるかこの苦悩が！

それに比べて姉ちゃんは軽音部の美女達と一緒にお茶してるんだよ！？どうして俺なの！？俺って労働力としか見られてないの！？

が、此処で憂に逆らったら夕飯がピーマン尽くしになるのは目に見えているのもあって、結局俺は憂の下僕1号としてその仕事を全うするしかねえ・・・。

畜生・・・憂は我が家の食卓という最強の切り札持ってるし・・・はあ。

行くしかないか、噴火したりサンダーフォース詠唱されても困るもんなあ。

俺は鞆をひつつかみ、憂の苛々が堪らないよう駆け足で憂が待っているスーパーへと向かう。

決してピーマンが怖い訳じゃないからな！怖いのは憂だぞ！勘違いするなよ！

「お兄ちゃん、もうちょっと早く歩かないとお姉ちゃんがお腹すかせちゃうよ」

「そうすか・・・」

日が暮れたスーパーで待ち構えていた憂は両手だけではなくカート

にも大量の食材を・・・嫌がらせかこれは・・・。

仕方なしに俺はその荷物を持ってしているわけだが、憂に持たせる訳にも行かず結局全部一人で運んでる訳ですよ。

憂は涼しい顔して歩いてやがる、俺はこの30度を超す熱帯夜の公道を汗だらだら垂らしながらヒーコラ言っ歩いてます。

格差社会反対だ！

「今日は肉じゃがにしようかな、昨日は揚げ物だったしお腹に優しいものがいいよね」

どうやらピーマンは回避出来たようだ、来たかいがある・・・。

正直なところレジ袋の中にピーマンが入っていた時は肝を冷やしました、せつかく此処まで来たのに結局ピーマンって流れだけは絶対避けなければならなかったのだ。

くっそー・・・憂め、料理が出来るのはお前だけじゃないんだぞ、俺だってそこらへんの男子に比べりゃ料理出来るんだ！

肉じゃがだって揚げ物だって親子丼だってカレーだって作れるんだ！

でもあまりにも憂が料理上手すぎるから！俺の料理が全然美味しく思われないじゃないですか！

というかこの妹、少しは労わりの言葉くらいかけてくれないのかね。

兄ちゃんは朝から夕方まで物理の勉強してんのに、あの灼熱教室で。

まあ憂のことだからテスト前勉強しなかったお兄ちゃんが悪い！つて一括するに決まってるんだよなあ。

はあああああ、マジでどうやったらあの姉ちゃんからこんな鬼畜な妹が育つんだ、いったいどういう教育方針だったんだ母ちゃん父ちゃん。

あ、コンビニが見えてきた・・・そろそろマイハウスだ、歩いてあと5分つてところか。

つて・・・おい、あれって。

コンビニの前でこっちガン見してる奴って・・・。

「うわっ、平沢！・・・それに平沢さんじゃん」

「げえ・・・」

光桜高校のa子じゃん・・・。

お兄ちゃんを馬鹿にしないで

「うわー、相変わらず短髪でぱっつんぱっつんだね」

「・・・はあ」

「んで変な顔してるなあ」

「そつすか・・・」

あ、相変わらず齒に濡れ衣着せずつかすか言ってくるなあ子め・・・。

今日の前にいるa子は私平沢凜が中学時代に告白した女の子です、通っている高校は光桜高校。

ちなみに顔はめちゃくちゃ可愛いよ！性格は何処かのビリデレからデレを取って、戦闘力53万の人みたいになった感じね！なんだそりゃ！

「てか平沢の家ってこころへんなの？こないだも会ったけど」

「さあ」

「さあって何よさあって。アンタの家でしょ」

いやあの家は俺の家であって俺の家じゃないような・・プライバシ  
ーやら人権が皆無だし・・。

むしろ学校のほうが両方とも保障されてるんじゃないかなろうか。

「こないだは話せなかったしさ、高校とかどんな感じか教えてよ？」

「ええ〜・・。」

「何よ、連れないわねえ。アンタがベタ惚れした女の頼みごとじゃない？」

「・・・余計嫌だったの！」

こ、この野郎・・！思い出したくないことを思い出させやがって！  
そうなんです、既に説明した通り平沢凜はこのa子に告白しちゃっ  
てます。

結果は言うまでもないよな？俺の経歴とこの女の態度を照らす合わ  
せれば一発だよ！

「なんで？好きな人から話しかければ嬉しいもんでしょ？」

「そりゃ中学の時の話でさ」

「じゃあこんな可愛い子に話しかけられて嬉しいでしょ？」



確かにa子の可愛さはやばいね、天使中野梓と同じくらい。

その可愛さ故に毒牙にかかって餌食になった男がいたいどれだけいることが・俺含め。

たぶん今は光桜高校の男子生徒を食い散らかしてんだろっなあ・あそこ今年から共学になったばっかで、男子と女子の比率9：1くらいらしいし。

あーあ、色々な事思い出したら自分にビンタしたくなってきた、嫌悪感で。

「もう慣れたからさ」

「嘘だー！私の制服姿可愛いでしょ？ほら、中学と違ってスカートはチエックになったんだ」

a子が身を乗り出して俺に身体を見せつけてくる。

ぐは、姉ちゃんや憂と違って立派に育った胸部と、すらりと伸びた足、そして超絶に可愛い容姿・・・！

「ぐぐぬぬ・・・」

「どーっ？」

も、もうこれ以上は限界である！

「つつか俺じゃなくて憂に聞け憂に！」

「平沢さんに？」

「隣に居るだる隣に！」

よ、良かった憂が隣に居て・・・。

もう少しで本能がa子に陥落されてしまふところだった、ちなみに性格がこんななんんで心までは奪われないぜ！たぶん！

そついや憂一緒に居るはずなのに空気だな、a子と憂って仲悪かったっけ？

「平沢さんも大変だね、こんなキモオタが双子だなんてさ」

「・・・」

おいおい、もう少しオブラートに包めないのかねa子さんよ。

ラスボス憂ですらそんなストレートに言うことは・・・いや、五万とありましたすみません。

「平沢さんは結構可愛いほうなのに、キモオタが虫よけスプレーになつていい男の子寄つてこないでしょ？可哀そう」

「別に、私はそんなことに興味ないから」

「私コイツに告白されても全然嬉しくなかったし、平沢さんだって内心は嫌なんじゃない？」

うわ、始まったよa子の人格否定攻撃・・・。

コイツは容姿が超絶可愛いうえ、ある一定のレベルまでいかないと素を見せないから、俺みたいに食虫植物の罠にハマる可哀そうな人間がいるんですよ。

あとその一定のレベルってというのは、男子で言うところ『告白』までいくと素を見せる。

告白してきた男子は自分にベタ惚れであり、何を言っても大丈夫だとのこと。

そして振られた男子がどれだけ自分の性格を云々言っても、それは振られた奴の惨めなみつともない姿としか映らないからだとか。

女子に関してはよく知らん、まあこういう性格の奴が中学時代結構多かったし特に問題ないんだろうなあ。

何故多かったって知ってるって？そりゃあ、何処かのおバカな男の子がそいつらに片っ端から告白したからね！過去の事例に基づいて判断しているから正確なデータだよ！

「もったいないなあ、まだ彼氏とか出来てないんじゃない？」

「それは」

「ほーらやっぱり。キスとかまだしてないなんて、平沢さんクラスの可愛い子だったら今時皆もうしちゃってるのに。やっぱりこのキモオタのせい？」

おいおい、ちょっと言いすぎじゃないですかねa子さん。

俺は既に悪口雑言聞きなれてるけど、あんまり家族の身内の悪口を面と向かって言わないほうがいいんじゃないかなろうか。

あ、憂は俺のこと平沢家の癌細胞とか思ってるからそんなことなかつたか、流石ラスボス。

「だいたい何そのダサイ鞆、それに髪もサボテンみたいにぱつっぱつっんだし。性格もさー、陰湿でねちっこいし、将来性犯罪でも起こすんじゃない」

あーあー、聞こえません！聞こえません！

つつかお前顔だけじゃなくて性格もどうやったら天使になれるか中野さんに教えて貰って・・・！

「a子さんにそこまで言われる筋合いはないから。お兄ちゃんを馬鹿にしないで」

「・・・は？」

空気が、凍りつきました。

ど、どうした憂・・！そこはa子と一緒にあって俺を罵倒するのがセオリーだろう！

こんなの憂じゃないぞ！まるでどっかのビリデレからビリを取った・  
・つまりデレじゃないか！

「お兄ちゃんは、a子さんにかっこいいところを見せてないだけだから」

「え・・？」

なん・・だと・・！？

「お兄ちゃんは、a子さんにはもったいないくらい良い人なの」

「」  
「」  
「」  
「」

い、いったい何が起こってるんだこれは・・・！

この世の全ての森羅万象よりも不可解なことが起こっているぞ！

「帰ろ、お兄ちゃん！」

憂が強引に俺の手を取った。

うわ、スーパーの袋の重みのせいで手が痺れて痛いんだけど・・・。

目を点にしてコンビニの前で立ちつくしているヨ子と、耳を真つ赤  
にしている憂を見たらそんなことほどでもよくなっちゃった。

お兄ちゃんを馬鹿にしないで（後書き）

更新が一月以上止まってしまいました、すみません。

出来れば11月中にあと1回は更新したいと思っています。



だめ……？（前書き）

前回で10万字突破しました！

だめ……？

「…どうしてこうなったし」

家に帰ってきた俺と憂。

憂はあのa子に言い放った言葉を最後に全く口を開かない。

姉ちゃんに声をかけられても『何でもないよ』の一言で済ますあたり、かなりの重症だ。

俺は憂が自分に対して少なくとも最低限家族に対して向ける感情を持つてくれていると分かかって嬉しいんだけど、憂ちゃんはそうもいかなかったらしく…。

「お腹すいたね…りんたん」

「うんむ…」

とまあ、平沢家の夕食がまだ用意されていないことから分かるように、憂は自室に閉じこもってしまったのだ。

大変だ、早く憂が出てきて夕食を作らなければ姉ちゃんが餓死してしまう！

ぶつちやげ俺が夕飯作って食べちゃってもいいんだけど、何かそれは悪い気がするし。

「何かあったの？」

「うーん…あったと言われればあったけど」

俺はあのシーンは日常の1コマなだけだったしなあ。

憂のビリツンが一瞬デレ方向に傾いたのはかなり美味しかったけど。まあ普段あれだけビリツンビリツンしてるから、褒めるようなことを言つて恥ずかしくて顔を合わせられないのか？

俺からすれば、何時も罵倒している憂がそんな小さなことを気にするとは思えないんだけどなあ。

a子に一泡吹かせてくれたのは嬉しかったけど。

「りんたんのこと？」

「まあそんな感じ。a子覚えてる？俺が振られたあの超絶可愛くて中身ベトベトンな」

「りんたんがへドロちゃんって言ってた子だよね、覚えてるよ」

「そそ、へドロちゃんと近くのコンビニで会って。まあそこで若干口論？ぼく」

「ヘドロちゃんと憂が？うくん、想像つかないよ」

「だろうなあ、俺だって憂があそこまで強く出るとは思わなんだ」  
姉ちゃんだったら分かるんだけど、基本中学三年くらいから俺に色々云々言ってきた憂が、俺の面子を保つような発言をするなんて考えられるかね？

俺には朝起きたら目の前に女の子がいましたと言われるくらい想像つかないぞ！

「a子が何時も通り俺に対してあーだこーだ言ってきて、俺は当然スルしてただけど…」

「憂が噛みついたの？」

「そんなとこ、まあ…憂が俺に対してマイナスイメージしか持っていないと思ってただけに、かなーり予想外だったというか」

「具体的にはどんなこと？」

「げ、具体的に言うのか。」

流石にあの言葉を自分が言うのは恥ずかしいぞ、例えそれが姉ちゃんだったとしても。

「…い、言いたくないです」

「ぶーぶー」

「そ、そんな顔したって……！」

「りんたん……」

「だ、だから……！」

い、いかん。

姉ちゃんが本気で俺を落としに来ている！

こ、この顔は即刻核拡散防止条約か何かで禁止すべきだ！これ以上姉ちゃんの顔が俺に近づいてくると、この世の理が平沢家を爆心地として一瞬で崩壊してしまう！

「だめ………？」

「………参りました」

何で、何でそこで上目遣いで服を引っ張りながら小首を傾げるんだ姉ちゃん！

いくらこれが血が繋がってる姉ちゃんでも、可愛いと思わなかったら嘘になるだろ！

何処かの誰かが『「kawaii」に国境はない』とか言ってたけど、これなら全米もイチコロだね！

「まあ、その………かつこいいところを貴方の前では見せてない、とか」

ま、まあ……ここで何かしらの発展があったほうがいいしな、明日のために。

明日から姉ちゃん達軽音部は夏合宿に行くらしいし、今日は早めに寝て明日に備えないと、姉ちゃんだし。

「貴方にはもつたいない、とか」

てか自分で言うのとホント恥ずかしいなコレ！

耳とほっぺが熱くてさくらんぼのようだ！うちわ持ってきてうちわ！

「ええ……憂がそれを言ったんだ？」

姉ちゃんも驚くか、そりゃ。

だって家の中で弁慶みたいに仁王立ちして俺をシバキ倒してる姿しか見せてないもんな、憂は。

「まあ、そういう感じなことを二言くらい。普段俺をボコス力やってるから恥ずかったんじゃないかね？」

「ん……分かった！」

唐突に姉ちゃんが立ちあがった、ソファーがもふつと動く。

てか分かったって何がだ？俺には一切分からんのだが。

「よし、じゃあ私が憂を元気づけてくるから、その間にりんたんはお夕飯作って！」

「え、俺が？」

「うん！りんたんがご飯作ってくれたら、きっと憂も元気になるよ！」

そういうもんなんだろうか？

夕飯は作れるけど、絶対憂が自分で作って食べたほうが美味しいと思っただけだなあ。

「それじゃ、行ってくるよー！」

そう言っただけで姉ちゃんは普段のおぼつかない足取りではなく、颯爽と憂の部屋へと駆けて行った。

よくわからないけど、結局俺は夕飯作って二人を待たばいいんだろ  
うか？

なら憂が買って俺が運んだ食材でにくじゃがでも作りますか。

そっぴや姉ちゃんがあそこまで本気で俺に攻撃してきたのって、かなり久しぶりだったなあ。

皆には、内緒だよ？（前書き）

これで平沢家は50話目です。

たくさんの方に読んで貰い、支えられながらここまで来ました。

今後も平沢家をよろしくお願いします！



皆には、内緒だよ？

軽音部一同が夏の合宿初日を終え、軽音部全員＋顧問の某先生は一日の締めくくりとして花火をやっていた。

平沢唯が上手く線香花火を点火出来ずに悪戦苦闘していると、そんな彼女のことが見界に入った中野梓がやってきて隣にちょこんと座る。

「あ、あずにゃん」

「唯先輩、それ…逆ですよ、火をつけるの」

「う、うそ!？」

「ホントです」

梓に言われて目を丸くするものの、唯は言われた通り逆側に火を点けてみる、すると…。

「あ、点いた!」

「良かったですね」

線香花火はようやくその身体に火を纏い、ぱちぱちと小さな音を鳴らしながら燃えて行く。

その様子に目を輝かせながら、唯はこう言った。

「今日一日、楽しかったねあずにゃん」

「私は…もっと練習したかったんですけど」

「またまたあ、あずにゃんが一番はしゃいでたじゃない」

「うっ……」

「私達が疲れちゃった時も浅瀬で泳いでたもんねえ」

「あ、あれは…その！練習前にか、軽く身体を動かそうかなくて！」

顔を真っ赤にして反論する梓に、笑顔で見つめる唯。

何だか自分だけ子供のようだ、納得がいかない梓はむうと口を真一文字に結んで不貞腐れようとするが、此処でそんなことをすればもっと子供扱いされそうだと考え引つ込め顔を上げる。

目の前に広がるのは、花火相手にはしゃぐ先輩たちと先生の笑顔。

こんな中で、一人だけ不貞腐れるのはやっぱり間違ってるかもしれない。

「こんなに楽しくなるなら…やっぱり、りんとんと憂も連れてきたかったなあ」

「平沢君と…憂ですか？」

「うん、去年は二人とも受験勉強で忙しかったみたいだから言わなかったんだけど。りんたんは私と離れるのが嫌だったみたいで、『頼むから姉ちゃん早く帰ってきて！』とか叫んでたもんだもん」

「……それは平沢君が憂と二人きりで居たくないだけじゃ」

「そうかなあ？」

「そうですね、先輩の話や普段の二人を見てると分かります」

「少なくとも、憂はりんたん二人きりで居て凄い嬉しそうだったけどなあ」

憂が……？

「うん、憂はりんたんのことが好きだから。きつと恥ずかしくて、いつもあんなつつけんどんな態度取ってるんだよあ」

「そうなんですか…？とてもじゃないけどそうは見えないです」

確か期末テストの勉強会でも同じようなことを彼女は言っていた、平沢憂は平沢凜が大好きであると。

傍から見ればそんなことはまず有り得ないと皆言っだろう、クラスでは憂が凜に辛く当たっているのはよく見ているし、それ以上の繋がりがある梓は家庭ではもつと酷い仕打ちを凜が受けていることを知っている。

授業態度で怒られ、テストの点数で怒鳴られ、パソコンを廃棄させられようとされ……踏んだり蹴ったり。

「素直になれないんだよ」憂は

「素直に……ですか」

「うん、だって本当にりんたんのこと嫌いなら、一々りんたんの面倒を見ないでしょ？」

「あ……言われてみれば」

「授業のことだって、りんたんが寝てるならその後苦労すると分かっているからちゃんと聞くように！って怒るんだよ。テストも同じかなあ、後で赤点青点取って大変なことになっちゃうから」

「それは唯先輩も同じなような気がします」

「え、えっと今は私のことじゃなくてりんたんのことだよ」

「……」

ジト目で唯を見つめる様、すると唯は先ほどまでののほほんとした余裕の表情から一転して苦笑を浮かべる。

「そ、そんな目で見ちゃだようあずにゃん」

「はあ、分かりました」

まあこれ以上彼女を問い詰めても可哀そうだと思えば、しっかりしてくださいね、と笑って言葉を重ねた。

しかし唯の言う通り、本当に憂が凜のことを嫌いならば色々突っかかってくることもなく、無視を決め込むだろう。

それをしないのはやはり唯が言った通り凜の事が大好きで、兄妹という絆がブレーキになっているのかもしれない。

一人っ子の自分からしてみれば羨ましい限りだ、自分もそういうものを体験してみたかった。

「でも素直になつたとしても、憂が平沢君に対する態度を唯先輩みたいにするのは想像出来ません」

「そうかなあ？小学校の頃は凄かったんだよ、憂っていつもりんとんに抱きついてたくらいだから」

「え……！？」

憂が凜に……抱きつく？

唯を疑うわけではないが、それはとてもじゃないが信じられないことである。

今の二人の関係からすれば、互いがもう片方に抱きつきに行くなんて絶対に考えれない。

「でも中学校に二人が入ってから、変わっちゃったんだ」

「変わった……?」

「うん、『ししゅんき』ってものなのかな。突然憂がりんたんに対して棘棘しくなっちゃって……大変だったんだあ」

今でも十分棘棘しい気もするが、今以上のものだったのかもしれない。

何せ話している唯の顔がいつものようにおちゃらけていないのだ、これは真面目な話ということは流石に分かる。

「うーん……あずにゃんは憂の大切な友達だし、話しちゃっても大丈夫かな?」

「…先輩?」

いったい、この人は何を話そうとしているのだろうか?

今まで彼女のこんな顔を見たことはない、真剣な表情やおちゃらけた表情とも違う表情。

「皆には、内緒だよ?」

「この分からず屋！体力馬鹿！サボテン！」

「りんとんと憂は中学時代は顔会わせる度に喧嘩してたんだ」

「い、今もそんな感じですけど」

「ううん、今やってるのは喧嘩じゃないと思う。じゃれあってる？  
って感じかなあ」

「じゃ、じゃれ合ってる……あれがですか？」

「そっだよ、昔は本当に喧嘩してたもん。えーっとね、こんなこと  
とがあっただよ……」

「もう、いい加減にして！」

「はあ！？ふざけんじゃねえぞクソ餓鬼！そのポニーテール引っこ抜くぞ！」

「く、クソ餓鬼！？同い年じゃない！それにそんなこと言われる筋合いないもん！」

平沢唯の目の前で行われているのは、正真正銘の兄弟喧嘩である。

最近日常茶飯事となり始めた弟と妹の喧嘩はますますヒートアップしていく。

「だいたい俺はお前と違って部活で疲れてんだよ、帰宅部はさっさと飯食って寝ろ！」

「女の子はお風呂に時間がかかるものなの！」

「分かってるならごめんなさいの一言くらい言えよ！」

「どうして私が謝らなきゃいけないの！？学校で身体拭いてくれば良かったでしょ！」



「何処かの馬鹿が風呂で鼻歌なんざ歌ってるとか考える訳ねーだろ！俺はお前の執事かつーの！」

今回の喧嘩の原因は二人の会話を聞いて分かるように、お風呂に関することだ。

弟凜は現在中学でハンドボール部に所属しており、毎日疲れきって夜遅く帰ってくる。

当然身体は泥まみれなので、何時も帰ったらまずお風呂に入って汚れを落とす……それが彼の日課。

しかし今日は運が悪いことに、妹憂も友達と遊んで帰ってきたためお風呂に入るのが遅くなり、鉢合わせとなってしまうた訳だ。

結果凜は玄関で10分近く待たせられることとなり、怒りのボルテージが上昇、爆発し今に至る。

「もういい！さっさとお風呂に入ればいいじゃない、それで解決するでしょ！」

「お前からまだごめんなさいを聞いてないぞ俺は」

「だから、私は謝らないって言うてるでしょ！この分からず屋！体力馬鹿！サボテン！」

「んな……！？憂、お前大概にしろ！」

遂に憂が凜を罵倒し始めた。

サボテンとは凜の髪形を馬鹿にする時憂がよく使う言葉で、喧嘩の時は必ずと言っていい程出てくる言葉である。

凜自身も立つ髪に若干コンプレックスを感じているため、これが面白い程に彼を刺激するのだ。

「だってサボテンでしょ！そんなスポーツ狩りみたいな髪型、かつこ悪いもん！」

「んだとお！？お前だって劣化型姉ちゃんだろ！姉ちゃんからいいところ全部取った残り粕を集めたらお前の出来あがりだからな！」

「そ、そこまで言わなくてもいいでしょ！」

「真実だろが！」

二人の喧嘩はそろそろ佳境に入り始めた、普段はここら辺で両親が止めに入るのだが、父は仕事で母は買い出しに行っているため居ない。

よくあるケースなのだが、こういう時はだいたい自分にその矛先が向くであることを唯は分かっている。

「お姉ちゃんもこの人に何か言ってよ！この人こそ人間の残り粕みたいな人だから！」

「姉ちゃんに同意を求めるなんて汚ねえぞ憂！それにこの人ってどういうことだ！」

「そうでしょ！？お姉ちゃん！」

憂が鬼気迫る表情で同意を求めてくる、唯としては凜も憂も大好きなため二人の意見に賛成することは到底出来ないのだが。

「ま、まあ二人とも……落ち着いて。ほら、りんたんも。もうすぐお母さん帰ってくるから」

母が出かけてからそろそろ1時間、もう少しで帰ってくる。

流石の凜と憂でも両親の前で此処まで毒舌の限りを尽くしはしないので、今は母の帰りを待つことを祈るのみ。

それ以外に唯が出来るのはせいぜい火が点いた二人を宥める程度だ、今も凜に噛みつきょうとしている憂に笑顔を向けて落ち着かせようとしているのだが。

「お姉ちゃん！こんな人に気を使わなくていいのに！」

「姉ちゃん、憂にあんまり近づくと黴菌移るから離れたほうがいいぞ」

「ば、黴菌……！？私が黴菌ならそっちは生ゴミじゃない！臭いから何処かに行つてよ！」

「誰のせいだと思つてんだよ、だ・れ・の！」

互いを乏しめるためあらん限りの悪口雑言が飛び交う平沢家の廊下、きつと外には駄々漏れだろう。

明日の朝投稿する時近所のおばちゃんに『兄弟喧嘩?』と聞かれるのは覚悟しておいたほうがいいかもしれない。

「ね、ねえ」

これ以上近所迷惑はかけられないと、珍しく頭の回る判断を下した唯が声をあげる。

「なに、お姉ちゃん?」

「どした?」

呼びかけに応えて口論を止める凜と憂。

「黴菌とか、臭いとか、私はそんなこと思ってないから、ね?ほら!」

唯はそう言つと泥まみれの凜に抱きついた。

何の脈絡もない唐突な出来事に凜は目を丸くし、憂は固まる。

「ね、姉ちゃん……?」

「ほら、りんたん全然汚くないよ?」

「お姉ちゃん……」

「それに、すっかり運動して、いっぱい汗かいて、凄い健康的じゃん!臭い訳ないよ」

凜は唯に抱きつかれると、いつも通り急激に熱が下がって行く。

唯は普段二人が兄弟喧嘩をする時は、より怒っているほづに抱きついて事態を落ち着かせる。

中学に入ってから大小含めたらほぼ毎日行われる兄妹喧嘩の沈め方は彼女なりに分かっているのだ。

「だからりんたんも、憂に酷いこと言っちゃだよ。りんたんだって、憂とよくじゃれあってた」

「……わかった」

「憂も、ね?」

「……」

「憂……?」

だが、今回ばかりは抱きつく方の判断を誤ったらしい。

どうやら憂は相当頭に来ていたようで、今唯が凜に抱きつかれたことにより、更に不機嫌オーラを増幅させてその小さな顔に満開のしかめっ面を咲かせた。

「知らない!お姉ちゃんはこの人と一緒に居ればいいじゃない!」

「いてえ!」

「あいたっ」

憂が手に持っていた櫛を思い切り凜の顔面に投げつけ、それが額にヒット。

転げ落ちた櫛が唯の鼻に当たった、鼻の先がひりひりする。

憂はそんな二人のリアクションに見向きもせず、乱暴な足取りで階段を上って行き自室へと引きこもってしまった。

『ただいまー』

そしてこのタイミングで母親が帰ってきた。

良かったと内心ため息をつきながら唯は玄関へと向かって行った、母が憂の部屋に行けばもうこれ以上事態が悪化することはないだろう。

ただその後泥まみれで廊下を汚した凜が怒られて雑巾がけをしなければならず、憂のことを考える余裕なんてなかったのだが。

この分からず屋！体力馬鹿！サボテン！（後書き）

憂がとてつもなく口の悪い子になっていきますが、

気にしないでください！汗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6058q/>

---

けいおん！平沢家のお兄ちゃん！

2011年12月17日06時51分発行